

## 鬼退治（不思議な手ぬぐい）

嶋 均三

モモ太郎が亡くなってから半世紀ほど過ぎたであろうか。あの鬼ヶ島は最近復活し、多くの赤鬼や黒鬼が住み着き悪行を繰り返し始めた。

今では、ここ「おごわ村」にまで入り込んできて田畑を荒し穀物を盗み、悪戯を続けるようになった。

村人は困り果て、名主の「砂端すなはた」とともに幾度も策を考えた。しかし相手は危険な「鬼」である。

思案の末に村人達は「源左」という樵とその仲間を選んで知恵を絞った。この源左という男、山林の伐採の合間に猟師の仕事、すでに三十年のベテランである。鉄砲の腕はもちろん山々の地理にも詳しい剛力男である。抜擢されたのだ。

「今は、雉・猿・犬では戦えぬ」  
「鉄砲を三丁ほど工面してもらえませぬか」

こうして準備を整えた源左、仲間の猟師とともに苦勞の末に鬼が住むと思われる洞窟を探し当てた。そこは鬱蒼と木々が生い茂る奥深い山であった。

いよいよ三人が鬼退治に向かう日の前日、村のはずれにある「しどみ寺」の和尚が三人を寺に呼び、男達の背に向かつて経を唱え、黄ばんだ手ぬぐいを三本渡した。

「何か都合が生じたときこれを使いなさい」

翌朝、村人に送られて万端整えた三人が山に入った。

歩き続けて夕方になった頃、切り立つ岩肌のなかに深い谷が現れた。

「これは渡れねえな。しかし谷はこの辺りが一番狭い……」  
思案の末に丸太を渡して丸木橋を架けることになった。谷の近くに立つ太い木を倒せばそれが可能だ。

少し上流に谷の側に天を突くほどの太い樫を見つけた。この木には不思議な黒い実がついていた。

この木を谷に向かって倒せば丸木橋となる。源左はそう考えて二人に指示した。

足許を固め、静かに鋸を引き三寸ほど切り込んだ。だがあまりにも硬い。交代で鋸を引く。

ゼーゼーと息をきらして大樫に挑んだが石のように硬く鋸が進まない。ここで源左は、あの手ぬぐいを腕に巻いて足を踏ん張り剛力を尽くすと、だんだん幹に食い込んでいった。

しかし、すでに夕暮れが迫っている。やむなくその日はそこまで止めて野宿した。

翌朝、不思議なことがあるもので、何と樫の切り口は元通りに戻っていた。何度挑んでも同じであった。

驚く三人は谷越えを諦め上流を目指した。遠回りを覚悟して歩き続けた。いくつもの山を越え尾根を越え沢を渡り……すると木々の間に白い岩場が目立ち始めた。

やがて山奥の岩場にぼつかりと空いた洞窟を発見した。恐るおそる入るとこの洞窟は途中から狭くなり、背を屈めて歩いた。

「暗いな、戻るか？」

源左の声に二人は互いに顔を見合わせた。和尚から渡された腰の手ぬぐいはずして顔に近づけると、何と！闇の中に足許の岩場がハッキリと見えだした。

三人はこれを頼り、額に巻いて相談した。

「この洞窟、どこに繋がってるのか？」

「足許が見えれば動けるな」

「よし、行ってみよう！」

こうして動き出した。狭い場所を潜り抜けると今度は立って歩けるほどの空間になった。ここで三人は距離を稼いだ。

やがて暗い洞窟から抜け出すと、急に明るい光りが射し込み、三人は眩しきで目を覆った。恐るおそる・眺めると、何と目の前に怪しげな村が出現したのだ。

冬でもないのに雪と思われる白いものが降り積もって銀色に輝き、そこに家々が建ち並ぶ大きな村の出現であった。

三人は腰を抜かすほど驚いた。

「何だ、これは！」

「どこなんだ！」

「別世界だな！」

眼が慣れてくると白い世界に花のようなものが見えた。雪に花？不思議であった。

三人が高い岩場から下りてみると、不思議な黒い獣があたりこちで動いているのが見えた。

「これが鬼か？」

緊張に包まれ小声で話す三人にとつて、銀世界に動く黒鬼、何とも奇妙な世界であった。度胸、腕力に優れ、怖いもの知らずの源左にとつても、かつてない怖ろしい情景であった。

この時、鬼は三人に気づいた。仲間を集めて攻撃してきたのだ。太い杭のようなものを持つ鬼、石のようなものを握り、凄まじい勢いで投げつけてくる鬼もいた。当たった木は幹がえぐれて吹き飛び、白い樹肌がむき出しになった。人間がこれに当たれば致命傷であろう。

咄嗟に源左は二人に離れるように命じた。

固まって応戦しては狙われ易い。

そのとき、ひととき大きな黒鬼が何かを叫んで仲間を命じた。

源左はここでも「手ぬぐい」を耳に当てるように二人に伝えた。すると不思議なことに鬼の話す言葉が聞き取れたのだ。

「あの人間どもを帰すな！」

「先回りして洞窟を塞げ！」

しっかりと聞き取れた。

ここで源左は、この真つ白い世界のなかでゆっくりと辺りを見回した。すると近くに桑の木のような立木があった。銀世界でも不思議と木々に葉が茂っていた。

源左は咄嗟にこの木の陰に身を寄せた。ここで刻を稼ぎ鉄砲の準備を整えた。

敵は逃げ道である「洞窟」を塞ぐ行動に出る。何としてもそれは防がなければならぬ。

高台の洞窟に向かう黒い鬼に向けて源左の鉄砲が火を噴いた。同時に敵からも音をたてて石が飛んでくる。身を隠すようにして木々の陰から鉄砲を撃ちかける。

離れた二人の仲間からも鉄砲音が響いた。驚く源左、

「よく生きていたな・・・」

「二人の間は洞窟に入ったぞ！やむなし、あの木の陰の男をとらえよ！」

これを聞いた源左は、この一際大きい「黒鬼」に照準を合わせて二発撃ち込んだ。手応えを確認して山伝いに移動し、何とか洞窟に辿り着くことができた。

しかし、これを狙うかのように石が「ドスツ、ドスツ」と音を立てて凄まじい勢いで飛んできた。

かろうじて三人はこの不気味な世界から抜けだし、転がり込むように洞窟に入った。ようやく不気味な村から脱出し家に向かうことができるのだ。

さきほど入って来た洞窟に戻ると、衣服に草の実と思われる黒いものがピッシリと付いている。刻とともにこれが少しずつ大きくなり、石のようになって剥がれない。身体が重い。

三人の動きが極端に鈍くなってゆく。体力のある源左は先頭に立って何とかここを脱出しようとして動いた。

数刻前に来た道を必死で戻る。やがて枝を広げたあの大きな樗が谷の向こうに見えだした。助かったようだ。

ゼーゼーと息をついて岩肌に残餅をついたまま、辺りをゆっくり見回した。ずいぶん周りの風景が変わっているのに気づいた。

ここでまたもや源左は驚いた。何と、太い樗は全ての葉と黒い実を落としていたのだ。少しの間に辺りの木々が成長している。

そこに二人が倒れ込むようにして戻った。身体に石のような重りが付いている。何と！二人は一気に老け込んで、顔の

皺、白髪、背は屈み・・・もはや老人であった。驚く源左、

「よく生きていたな・・・」

だが村に帰る途中も空腹、体力は消耗しボロボロの状態。「身体が重い。足が捕られる」

必死で這うようにして村に逃げ帰る三人。だが途中で源左の持っていた鉄砲が暴発して腕と胸に傷を負った。何とか！こんなことは源左にとつて初めての経験であった。

この時も首に巻いた手ぬぐいが命を救った。

しかし、幸か不幸か、源左の身体にピッシリついていた石のような黒玉は衝撃ですべて落ちていた。

ようやく家に着いた源左を待つ村人たち・・・見知らぬ者であった。世代が代わっていたのだ。もはや名主の「砂端」も「しどみ寺の住職」もない。

すべてを知った源左は高熱を発して寝込んでしまった。しかし、それからというもの、鬼たちが村を荒すことはなくなつた。

漸く立ち直つた老人「源左」は、この「不思議な手ぬぐい」に命を救われたとして丁寧に祀つた。

一方二人の獵師は、

「村のために犠牲になつた！」

「鬼退治が成功しても何の報いもない！」

と辺りに頻りに不満を漏らし、手ぬぐいを焼き捨てた。手ぬぐいは白い「灰」にはならず、黒く溶けて固まつたという。この行為の直後・・・二人は不審な死を遂げた。

村人たちは「鬼の祟り」と話した。その後、村人達が厄を祓うとして酒、米、ソバの実を持参して数人が山に入ったが：あの洞窟も樗の大木も既に無かつた。

# いつもと同じ土曜の朝に

石塚 蓉子

私は五〇歳になったころ、会社勤めの夫と娘との三人暮らしだった。今日は土曜日。夫と娘はいつも通り朝からジョギングに出かけている。この春高校生になった一人娘との土曜日ごとのジョギングがこの頃の夫の何よりの楽しみになっているようだ。もう半年近く続いている。

ふたりが戻るまでまだ少し時間がある。さて、とテレビをつける。と、冬季オリンピックのアーカイブ番組をやっている。信州千曲川と大橋、その奥に真っ白な山脈が続く。見覚えのある風景に、懐かしさとは違った感慨を抱いて私は見入る。十七年前、私は全く同じ場所に一人で立っていた。その時はまだ雪は無く山々は紅葉に燃えていた。一年以上悩み思索して、私はその日を迎えたのだった。

棚の奥から高校の同窓会名簿を取り出しては何度も開けては閉じを繰り返して、私は川村保を選んだ。高一の時だけ同じクラスになったことがある。顔はボンヤリとしか思い出せないが、当時の私は河村といって苗字が同じだったせいか他の男子よりもいくらか印象深い。真面目で穏やかな人だった気がする。

入学早々の健康チェックの紙が私の処へ間違われてきて、血液型が私と同じOだったということがくっきり記憶に残っている。本当は夫と同じA型の方が良かったのだけれど。東

京にも故郷からも離れた長野県職員という肩書が決め手となった。

個人的には何のつながりもなかった川村くんにはいきなり電話した。

「お仕事中お邪魔してすみません。私は高校一年の時に同じクラスだった河村文恵と申します」

「え、カワムラさん？えーと、そうそう思い出した」

温かい声にほっとした。よかった憶えていてくれた。

「実は私今度仕事で長野に行くのですが、川村くんのご都合がつくようだったらお会いできないかと」

「懐かしいなあ、こっちへ来てからなかなか皆と会えなくてね。大歓迎。それでいつ来るの」

スムーズに話が進み、早速次の土曜の昼に彼の職場近くのレストランで待ち合わせる約束を貰えた。私の極秘計画の第一歩は成功した。

三十歳を過ぎた頃から私は子供が欲しくてたまらなくなっていた。夫はずっと優しく、当時はフルタイムで出版社勤めをしていた私との家事分担も協力的だったし、夜はたいてい私の片づけ仕事が進むまで寝入らず待っていてくれた。

卒業してすぐの結婚だったのでまずは生活基盤づくりと避妊期間が長かったので、それが響いているかなと、私は夫に

言わずに一人で産婦人科クリニックに通い始めていた。

実家の母には会う度に「稼いでばかりいないで女は仕事より子供だよ」と言われたが「ウチはマイホームが先」と逸らしてきた。夫の実家では兄夫婦の処に既に跡取りに恵まれており、義父母は私達の前では孫の話はあまりしないで気を使ってくれているように思えた。数年前から避妊を止めているのになかなか授からない。夫のためにも早く子どもを、私は焦っていた。

何度か通ってから、医師から「次はご主人も一緒に」と言われていた。休日の寛ぎの時また夜夫に抱かれながら今日こそはと「赤ちゃん欲しいね」と切り出すのだが、「子どもことは神様に任せよう。このままずっとフミと二人だけでも俺はいい」と言われて、自分が勝手にクリニック通いを始めていることをなかなか言い出せない。お医者に頼る前に真っ先に夫に相談するべきだったと悔やむのだった。

久しぶりの友達との旅行ということにして朝早くに家を出てきたので約束の時間までまだ間がある。駅前の公園の片隅で、これから自分が言うべき言葉を頭の中で繰り返す。近くで二組の親子が寛いでいる。よちよち歩きの子らの姿が眩しい。そろそろ行かなければ。試合に臨むアスリートさながら気を引き締めて、私は指定のレストランに向かう。

時間通りに川村保が姿を見せる。十五年ぶりなのに彼も迷わず私に気付いてくれた。

「驚いた、やっぱり河村さんだ。お待たせしました」

「お久しぶりです。今頃になって突然押しかけてきてごめんなさい、驚いたでしょ」

「びっくりしたけど嬉しかったよ。なんだってこんな山奥、

本当に河村さんなのかと今の今まで半信半疑だったよ。すっかり都会の人になっちゃったね」

「川村くん、全然変わっていない。すぐわかったわ」

「それ褒められているのと違うよね。何年ぶりだろ。今は河村さんじゃないでしょ」

私はリングを外してきた左手を抑えながら早くも最初の嘘をつく。

「ううん、残念ながらいまだに独り。川村くんはとっくに結婚してるでしょ」

「残念ながら」と、二人で笑う。

「お子さんは？」

「貧乏人の子沢山っていうヤツ。もうすぐ三人目が生まれるんだ」

「わあ素敵」私の喜び様は異様だったかもしれない。

「素敵かい？毎日寝させて食べさせての繰り返しただけだよ。家に帰れば一人になれる時なんて一分もない」

「いいじゃない。羨ましいわ」

「子供好きなの？それじゃどうして結婚しないのさ」

私はできるだけ嘘を重ねないで済むように自分の身辺の話は最小限に、彼の家族への関心も抑えて、互いの仕事の話や学校時代の思い出話にもっていく。

地元のランチをゆっくり味わった後、紅葉真っ盛りの山里を散歩する。川村くんてこんなに良い人だったのかと、私の中で彼を選んでよかったという最初の安堵が、だんだん罪悪感に変わる。どうかしている、友だちを利用するなんて。このまま帰ろう。

山小屋風の茶店で一休みしてから外に出ると、陽は落ち始

めている。秋の夕暮れは早い。目の前を臨月らしい若い女性が隣の男性に甘えながら通り過ぎてゆく。夫に嘘をつき何のために私はここに来たのか、苦い思いを噛みしめる。

「河村さん、今日の宿とってあるの？」

「いいえ、まだ」

「女性一人でも安心して泊まれるいい宿を知ってるからよかったですから案内するね。まだ夕飯には早いけれど、宿を決めておいた方が安心でしょ」

大きく息を吸って、私は下を向いたまま絞り出す。

「川村くんこのまま何処かでゆつくりできたら嬉しいな」

「え、どうということ・・・それでいいの？」

彼がどんな顔をしたのか、足元を見ているだけの私にはわからない。軽蔑され拒否されるのも覚悟の上だった。気まずい沈黙の後「ちよつと此処で待っていて」と近くのベンチに私を促し、彼は立ち去る。

このまま戻らないかもとボンヤリ地面を見ているだけの私の目の前で、白っぽい車のドアが開く。

「お待たせ、さあ乗って」と、会った時と変わっていない彼の顔が見える。「朝乗ってきたのを職場に置いといたの。これで好きな所に行けるよ」

殊更私の事情を詮索することもせず迷惑顔も見せずに、互いの口数は少なくなつたが、自然体の彼の隣りで私も落ち着きを取り戻してきた。夕映えの山麓を少しドライブしてから、車は里の外れにひっそりと立つホテルに入っていく。

昔の同級生の気まぐれに付き合ってくれた親切な川村くんは、「今日のごとは全部忘れて下さい、連絡も一切無しに」という約束を完全を守ってくれている。私自身の記憶も遠く

にかすんで、今では古いドラマを思い出している程度に他人事だ。

あの後程なく授かった我が子に「子どもはなくてもいい」と言っていた夫は最初から夢中だった。赤ん坊の頃は「抱き癖がついてしまうから」と文句を言っても、朝から晩まで抱きっぱなし。大きくなってからは何でも娘の言いなりだ。

娘の方も、母親には年々シビアになってきているのに、父親にはいつだって甘い。私へのクレームのほとんどは父親に味方してのものだ。昨日も「結婚するならパパみたいだな」とか言っていたっけ。

娘と私、さほど仲良しでもないが、男性観に限らず好き嫌いが似ている。同じO型だからだろうか。

あ、ふたりが帰ってきたようだ。私はテレビを消して出迎える。「おかえりなさい。ご飯できているわよ。それともシャワーが先？」。



# わかれみち

小林千枝子

「母危篤」

優子に沙絵からメールが来た。沙絵は優子の四歳年下の妹で、母といっしょに暮らしてきた。

沙絵は定職を持ちながら母の面倒を見てきた。とはいえ、母の部屋を片付けるのを手伝えだの、母に会いに来いだの、何かと優子に言ってきた。そういう沙絵が優子には煩わしく、メールや電話を無視することもあった。優子はカルチャーセンターでパッチワークの講師を勤めるようになっていた。六十歳近くになってようやくものにした仕事だった。母のことで自分の仕事を犠牲にしたくなかった。

一昨日、優子は夫とともに実家に行って母に会ってきた。片道二時間半の運転はきつい。母危篤とはいえ、仕事に行きたかった。急ぎよ誰かに代わってもらうのは避けたかった。

二、三時間後に、母が亡くなったと、沙絵から電話があった。生きている母に会えないのなら、急ぐ必要はないと優子は考えた。仕事を済ませて、夕方、夫を伴って実家に行った。未だの弟の良太も夫婦で来ていた。沙絵は寺に打ち合わせに行つたとのことで、家にいなかった。一昨日は、リビングルームにおかれた介護用ベッドに、母は寝ていた。そのベッドはもうなく、母は床の間に北向きに寝ていた。ご飯をてんこ盛りにして箸がまっすぐにさされた飯茶碗や白菊一輪が、母の枕

元に置いてあった。座布団が敷かれ、線香をあげられるようになっていた。

沙絵が寺から戻るなり、葬儀の段取りの話になった。話をする間にも、親戚や近所の人たち、ケアマネージャーが線香をあげに来た。沙絵が言った。

「遺影を決めなくちゃ。」

パソコン内に入っている写真もあると言うので、優子は迷わず言った

「そっちで決めて。」

四日ほどして実家宅での納棺の儀、そして通夜。コロナ禍ゆえ通夜振る舞いはなく、代わりに弁当を渡されて解散となった。その翌日に告別式。続いて火葬場まで行ったのは、きょうだい三人とそれぞれの連れ合い、沙絵の息子の史也、沙絵の夫の母親と兄夫婦の十名だけだった。

通夜式と告別式の際に、母のいろんな写真がスライドショーのように映し出された。母の思い出の品々も展示してあった。沙絵はよくやったと、優子は思った。しかし、遺影は最晩年の母の写真で、自分の知る母でないようだったし、二日にわたって沙絵夫婦の挨拶を聞くのにもうんざりした。

告別式の翌日、沙絵から優子と良太宛にメールが来た。遺産相続のことだった。農地の分割相続は困難なので、遺産放

棄してもらつて現金を渡すようにしたいというのだ。自分の退職金をそれにあてるとも書いてあつた。沙絵は昨年、定年退職してゐた。

優子は腹立たしくなつた。沙絵に電話で言つた。

「通夜も告別式も皆、一人で決めてゐる。遺産相続のことだつて、どうして私に相談しないんだ。私だつて義理親の遺産相続を経験している。いきなり長いメールを送られて身体がおかしくなりそうになつた。訴えようかと思つたほどだ。それに私は嫁に出た人だからいいが、良太はいくら家を出たと言つても長男だ。そのことを考えなくていいのか。」

二、三日たつたころ、母の公正遺言証書があると沙絵が言つてきた。すべて沙絵に譲るといふ内容のものようだつた。もういいと優子は思つた。その後、行政書士から相続の手続き終了と遺留分に相当する金額を沙絵が準備している旨の手紙が来た。「一銭もいらぬ」と優子は返信した。もう母はいないし、実家とのかかわりはやめようと思つた。

「キャン、キャン、キャン」

「ウオーン、ウオーン」

老犬二匹の鳴き声で、沙絵は目が覚めた。階下へ降りて行つた。外へ出て犬の様子を見る前に、母の居室をのぞいた。母はよく眠つてゐた。犬は沙絵が話しかけるだけで静かになつた。

家の中に戻つて、母のおむつ交換をした。下痢状の排便が続いてゐたが、適度の柔らかさの排便になつてゐた。続いて体位交換もした。しかし、何か氣になつた。脚の付け根部分に手を当ててみた。脈がはつきりわかる箇所だからだ。脈が

確認できなかった。思わず大きな声で叫んだ。

「お母ちゃん、お母ちゃん。」

夫の公明が二階から降りてきた。公明は母の鼻にあてゐた酸素の管を外して言つた。

「息をしていないようだ。」

公明はすぐさまベッドに乗りあがつて人工呼吸をはじめた。沙絵も代わつて同じようにやつた。母の穏やかな寝顔は、微動だにしなかつた。

来るべきときが来たのだ。沙絵は在宅看護ステーションに電話した。まもなく看護師が来た。

「こんな時間まで介護していたの。」

「ううん。犬が鳴くので起きたんです。」

「そうか、ワンちゃんが教えてくれたんだね。お母さんはワンちゃんとよくいっしょにいたのかな。そういうこと、あるんだよ。」

看護師が母の顔にティッシュをあてて、亡くなつたと告げた。痰をとり、清拭をしてくれた。看護師の指示に従つて、母の死装束にしようといふ前から決めていた、母のとつておきの色留袖を取り出してきた。帯も探し出した。看護師が着せてくれた。続いて医師が来た。老衰との診断。享年九十五歳。は午前四時を回つてゐた。

それから沙絵は、東京で一人暮らしをする息子の史也にはラインで「ばあちゃん危篤」と、姉の優子と弟の良太にはメールで「母危篤」と伝えた。はじめは「亡くなつた」とは言わずに「危篤」と伝えるものだと、母から聞いていたからだ。

母の死は突然だつた。しかし、訪問看護師が史也ほか会わせたい人を呼んでおくよう言つてゐた。母が一番氣にしてゐ



たのは、優子と良太だった。だから、一昨日、二人に家に来てもらった。数十年ぶりにきょうだい三人がいつしよになつた。

沙絵は淡々とことを進めた。まず葬儀屋に電話。九時になるのを待ってケアマネージャーに電話。近場の親戚にも電話。所属自治会の班長や自治会長に連絡。葬儀屋の担当者を中心に日程調整。それと同時に、何とか母を床の間に寝かせたいと、公明とともに床の間の物を奥の部屋や縁側の端に運んだ。母がまだまだ元氣だったときに母の居室にしていた部屋で、ベッドやテレビその他、母のこまごました物がたくさん置いてあった。始発電車で帰ってきた史也にも手伝させた。床の間をきれいにして布団を敷き、白いシーツを敷いて母を寝かせたのは昼頃だった。その後まもなく介護用品レンタル業者が来て、ベッドや車いすなどを引き取っていった。

夜中の二時ごろからの長い一日となった。早朝から見舞い客の応対もした。その後の四日間、沙絵は母の隣に寝た。葬儀屋の担当者がドライアイスの取り換えに来るだけだった。沙絵には一息つく期間となった。そうして、納棺の儀、通夜式、告別式、火葬場での変わり果てた母との対面。その後、葬儀屋の担当者と花屋が自宅に母の祭壇をしつらえた。

続いて四十九日法要、初盆、初彼岸。その間に相続問題、年金や通帳の解約等々の手続きもした。母が公正遺言証書を作成していたことを知るのは沙絵だけだった。それを使わずに話し合いで相続することも考えたが、姉の優子と電話で話すとき、沙絵へのねぎらいはなく、文句を並べられた。これでは自分が病気になるてしまうと、沙絵は公正遺言執行を決断した。優子に続いて良太も遺留分受領を拒否。きょうだい

集うこともなく相続問題は終わった。

コロナ感染が広がる最中での一周忌法要には、史也に加え、沙絵夫婦のきょうだいを夫婦で呼ぶだけにとどめた。寺での法要後、一階の四室を開放した自宅で、戸を開け放つて家族ごとに膳を食する段取りにしたのだが、優子も良太も家には来なかった。

父が早くに病死したため母は苦労した。優子は父の死後一年もたたずに二十歳で結婚した。優子をはじめて身ごもったとき、大きなおなかの姿で母に文句を言っていた姿を沙絵は思い出した。高校三年のときだった。似た場面は他にも、自分に対してもあつたなあ。母も辛かつたろうと、沙絵は思った。

# やぶれどう あるじ 破堂の主

寺崎 暁生

わしがこの破堂に住み着いたのは十年以上前になる。見知っていた者たちはもういない。わしもいつあの世に行ってもおかしくはない老いぼれだ。

今日聞きたいのは誰のことかな。何、徳雪齋とくせつさい。またいやなことを聞くものだ。徳雪齋のことを語るのはいささか憚られるがまあよからう。寒いなかこのような所に来てくれたのだからしばし語ることにしよう。

さて、壬生家は初代胤業ひななり、二代綱重つなむね、三代綱房つなぶら、四代綱雄つなたけそして義雄よしおと五代で滅んだ。実は綱雄の後に徳雪齋周長しゅうちやうが鹿沼城主として一帯を支配していた時期が十年ほどあった。

小田原の北条氏と繋がっていた義雄は壬生城に、宇都宮氏ら連合軍側の徳雪齋は鹿沼城にと互いに相容れなかった。遂に義雄は徳雪齋と戦ってこれを倒した。徳雪齋は鹿沼城から壬生勢に追われ日光山に逃れる途中、板橋で殺されたという。

その隅の棚に置いてある四つの石が気になるのか。側に寄って見るがよい。それは河原で拾ってきた石だ。その一番右の拳骨ぐらいでごつごつしている石、わしはそれを綱房に見立てた。綱房の時、壬生家は最も勢いがあった。山城だった鹿沼城を堅固なものに改築した。徳雪齋にとっては生き方を決定つけた父だった。日頃、綱房は徳雪齋を論じた。

「そなたはわしの子であるが正室の子ではない。壬生家にとつては影のような存在なのじゃ。己が光り輝くとは思うな。兄の綱雄を支えて壬生家のために生きるのじゃ」

その左の石だがあちこち尖っているだろう、それが綱雄。その左の丸くすべすべした石、それが昌膳だ。

昔、初雪が降った日の朝のことだ。壬生と鹿沼を治めていた綱房は鹿沼城の居室で、長男の綱雄十四歳、次男の昌膳四歳と三男の周長三歳を並べこう告げた。

「綱雄、そなたはわしの後を継いで壬生家の四代目の主になる。そのためには四書五経や孫子などの兵法書を学ばねばならぬ。昌膳は優しいところがあるから僧侶になるのが相応しいかも知れん。周長も兄二人と一緒に学ぶように」

年が明けると三人は禅寺に預けられた。そこは鹿沼の西の山中にあつて、杉が鬱蒼と繁っていた。三人は本堂に上がり老師の前で畏まつていた。

「人は頭が良すぎてはだめじゃ。頭が悪くてもだめじゃ」  
謎のような言葉にややいらついたように綱雄が聞いた。  
「ここでは何を学ぶのじゃ」

「人の道じゃ」  
そう答えた老師は、昌膳に優しく訊ねた。  
「そなたは分かるかな」

「分かります。ここまでの道は大変でした」

すると綱雄がくすりと笑った。老師は一喝、

「笑うではない。昌膳は分かっているではないか」

最後に周長に言った。

「よく兄たちのすることを見て最初は真似をするのじゃ」

翌日から、三人は老師から禅の作法を教わった。低頭、合掌、座禅、食事、廊下の歩き方など全てに型があった。

朝食はお粥、胡麻塩と漬物という質素なものだった。

「これだけか。城では跡継ぎのわしには小さい者たちとは別に膳がついていた」

綱雄の言い分を聞き、老師が静かに言った。

「ここでは誰でも同じものを食べるのじゃ。精進料理を有難く頂くのが修行だと心得よ」

その禅寺では朝早く手先が凍るような寒さのなか、沢から水を汲んで庫裏まで運ぶのが日課だった。

綱雄は自分の分さえ終われば後の事は知らないという態度でさっさと部屋に戻ってしまふ。幼い弟たちと一緒に修行するのが不満だったのだろう。試されているとも知らずに。

周長が汲んだ水の桶が重くて持ち上がらないでいると、側の昌膳と一緒に持ち上げて水をこぼさないように二人で運んだ。昌膳の桶も運んで終わった時、ちらほらと雪が落ちてきた。二人は汗と雪が混ざり合った顔を見合せて笑った。

本堂の拭き掃除の時、周長が浄巾をどうしても絞れないでいると昌膳がそれを絞った。

「有難う」

「わしの方が一歳上だからな」

昌膳は周長を本当の弟のように可愛がった。だが、綱雄は

周長を家来のように扱った。

それから十三年後、綱房は日光山惣政所になり、昌膳を十七歳の若さで日光山御留守とした。更に、壬生家が仕えていた宇都宮家で謀を巡らし重臣たちを失脚させ、宿老という絶大な権力を持った。そのやり方に反発したのが昌膳だった。

ある日、日光山を訪ねた周長に昌膳は不満を漏らした。「父上の力が日光山に及び過ぎている。日光山の支配者としての父の動きは僧たちの間でも恐ろしがられている」

「うむ、わしも最近の父は恐ろしい」

「もう父の言いなりになって今の地位に留まることには耐えられない」

「わしも同じ思いだ。だが、焦りは禁物だ。年とつてきた父は兄を使って裏で動いている。ここは十分気をつけねば」

しかし、昌膳と綱房との確執は後戻りできないところになっていた。昌膳は還俗して鹿沼から南西に下った久野にいた。

だが、乱を起したとの疑いをかけられて、綱房の命により綱雄の手に殺された。まだ二十六歳の若さだった。

急を聞いて駆けつけた周長はその亡骸を前に泣き崩れた。春の夕暮れ、鹿沼城に馬を飛ばし、三の丸で小田原城に習い築かれた障子堀の見回りをしていた綱雄を問い詰めた。

「何故昌膳を殺した」

「父の命令だった」

「父の命令なら何でも聞くのか」

「壬生家の意向に沿わなかったからじゃ」

「意向に沿わなければ、弟でも殺してしまうのか」

周長は刀の柄に手を掛けた。家臣が綱雄を庇った。だが、綱雄は家臣をどけた。

「切ればいい。切ればわしと同じだ。その覚悟はあるのか」  
周長は抜こうとした刀を握ったまま立ち尽くした。

父と兄を心の底ではずっと許せなかった周長は、幼い日、  
禪寺で汗と雪が混ざり合った顔を昌膳と見合せて笑ったこ  
とを生涯忘れまいと徳雪齋と名乗ったのだ。

だが、徳雪齋は父と兄に対する恨みを呑み込んで、父の命  
を守り軍師として兄の綱雄を支えた。徳雪齋にとってはそう  
するしかなかった。そして遂に綱房は死んだ。何者かに殺さ  
れたと噂する者もあった。

綱房が亡くなると、綱雄は北条氏と繋がり宇都宮城を乗っ  
取ろうとしていた。だが、徳雪齋は反対に宇都宮氏と結びつ  
いて北条氏から離れようとしていた。

「これ以上北条に近づくのは危ない。北条に利用されるだけ  
だ。このままでは遠からず壬生家は滅ぶ」

「家臣の分際で何を言う。わしは下野を統一するのだ」

徳雪齋の忠告に綱雄は聞く耳を持たなかった。戦に明け暮  
れて宇都宮城を奪い取った。だが、芳賀郡乙連おとつれが原はらで宇都宮  
氏ら連合軍に大敗した。そのうえ頼みの綱の北条氏が「壬生  
退治」と綱雄の宇都宮城退去に動いた。綱雄は鹿沼城に逃げ  
戻り、徳雪齋が見るに絶えないほど憔悴してしまつた。

その後、綱雄は鹿沼の天満宮に詣でたところを弓矢で射殺  
された。徳雪齋が家臣に命じ殺したとされたがそれは違う。

綱雄の宇都宮家からの離反を許せなかった当主の広綱が密  
かに徳雪齋に綱雄の暗殺を命じた。だが、徳雪齋は魂が抜け  
たようになつた綱雄を殺すことがどうしてもできなかった。  
すると広綱は徳雪齋の家臣に命じて殺したのだ。

一番左の石が壬生義雄だ。綱雄の遺児として一身に壬生家

を背負つて生きた義雄らしく頭頂部が尖っているだろう。

義雄は、父の遺志を継いで北条氏の下野における出城のよ  
うに宇都宮氏ら連合軍と戦いを繰り返していった。

だが、秀吉による「小田原攻め」が発せられると、義雄は  
小田原城の竹ノ花口を守り、落城の三日後死んだ。義雄に男  
子の後継ぎがいなかったためか壬生家は滅んだ。

肝心の徳雪齋の石がないことが不思議か。そう、わしが壬  
生徳雪齋周長だ。板橋で殺された姿で見つかったのはわしの  
影武者だ。

わしは兄昌膳よしむねの好で日光山の僧侶に助けられてここ日光  
大谷川向うに住み着いたのだ。そして僧侶の姿で里の人々と  
交わつて細々と暮らしてきた。食べ物がなくなれば人々が  
持つてきてくれる。破堂の修繕をしてくれる。わしも里の弔  
いには習い覚えた経を唱えている。

だが、このところ体が駄目になってきた。修繕してくれ  
とはいへ隙間風が身に凍みる。もう長いことはないかも知  
れない。

顧みれば壬生家を分裂させて滅ぼした張本人はわしかも知  
れぬ。だが、わしは壬生家の将来を憂えていたから戦つたの  
だ。そこに恥ずべきものはない。

今はかつての恨みは消え失せた。日々四つの石に手を合わ  
せて、壬生家の生き証人であることを生きる縁ゆかりとしてい  
るだけだ。尤も表に出られぬ生き証人だが。

おや、ちらほらと雪が落ちてきた。積もるかもしれぬ。父  
上や母上が心配するから気をつけて帰りなさい。三人とも同  
じ道だったな。わしの話を聞きたければまた遊びにおいで。

# 風かぜ 戯そばえ

福富 陽子

両親が亡くなった後も兄夫婦は実家の屋敷を継いで暮らしていたが、先日その兄が不慮の事故で亡くなった。

連休にバイク仲間とツーリングに出かけ、見知らぬ土地で事故に遭った。享年四十五歳。若すぎる死だった。

葬儀のとき、叔母たちがこっそり話していた。

「竜彦も気の毒だけれど、泉さんはこれからどうするかしらねえ。ひとりで広い家に住むのはかえって寂しいものよ」

「裏の畑や庭の手入れだつてひとりでは無理」

悲しみに浸ってばかりもいられない。いずれやってくる普通の生活を泉さんはこのまま続けられるのだろうか。夫を失くした哀しみが薄らぎ、気持ちも落ち着くころには泉さん本人にしても現実的に考えなくてはならない問題だった。

一か月が経った。近所に住む叔母の家に立ち寄った際、こんなことを言っていた。

「泉さんひとりで八坂の家に住み続けるのはどうかと思うわ。使わない部屋も閉めたきりでは家全体が傷むし。泉さんから出て行く話をしてくれればいいのに。札幌に帰るとか」「泉さんのご両親はもういらっしやらないから、帰るっていつでも……」

「そうだったわね。でも、この先もひとりであそこに居るの

は不自然。子どもでもいたら話は別だけれどね」

叔母は父と十歳以上離れているせいか、まだまだ若い。言いたいことはすぐに口にする。

「こうなつた以上、泉さんは無縁も同じ。他人が五代も続いた八坂家の主だなんてありえないわ」

叔母自身もかつて生まれ育つた家である。叔母と私が理屈抜きに気が合うのは同じ屋敷で育ち、結婚と同時に嫌でも家を出なければならなかつた者同士だからかもしれない。

「法律上、泉さんは世帯主だし私たちからは何も言えない」

「かといつて、泉さん本人もこのままでは気が引けるんじゃないの？ まさかとは思うけど、親族に相談もなく土地や家を売却された日には泣くに泣けないわよ」

そんな叔母とのやりとりをまるで聞いていたかのように、翌々日、泉さんから家のことで話したいことがあるから私に来てもらいたいと連絡があつた。

泉さんに会つてみると叔母の心配は無用だとわかつた。便利などころにマンションを買い、非常勤でもいいから教員にもどり今後の自分を立て直していきたいと言つた。

「私がこの家を出て、佐恵さんたち一家が住んだほうが理にかなつていると思うの」

もし実家に住むとなれば、子どもたちもいずれは私が通つ



た小学校に入学することになる。

「泉さんがそう言ってくれるなら、夫に話してみます」

もう一杯いかがとコーヒーを淹れてくれた後、泉さんはすつと立ちあがり縁側の窓を少し開け、

「夕方のここから見える風景が大好きなの」と微笑んだ。

池を縁取る樹々の向こうに太陽が傾き、澄んだオレンジ色が庭いっぱい広がる。椿の実を兄と競うように拾ってはピョンに集めた遠い日々が甦った。

子どもを授かりたくて兄夫婦は不妊治療に通っていたと、兄の通夜の席で泉さんから聞いた。

本当に兄の死は青天の霹靂そのものだった。たったひとりの兄がいなくなった喪失感と言葉にならないほど重く私にのしかかっている。妻である泉さんはどんな心境だろう。人前では泣いたりしない泉さんだから、余計に健気に思える。

私は自分の親が亡くなるまで、何の配慮もなく実家に子どもを連れていっていた。おとしの年末まで父は入院を繰り返していったし、孫の顔を見るのが唯一の楽しみだと言っていたから頻繁に出入りしていた。兄たちの不妊治療を知らなかったとはいえ、泉さんに申しわけないことをした。

家にもどり、さつそく実家に住めそうだと伝えると夫は手放しで喜んだ。それでも泉さんがマンションを購入するまでは、私たちから引越しの話はしないでおこうと夫は言った。

私も夫の意見には賛成だった。近いうちに話が整うだろう。同じ都営住宅のママ友たちにはその時が来たら話せばいい。

ところが、新年を迎え節分が過ぎてても泉さんから引越しの話はなかった。四月から私立高校で非常勤の教員として働くことになったという連絡だけはあった。

「学生時代の先輩がその高校の主任をされていてね、軽い気持ちで相談してみたら、年度末に退職される方がいてすんなり採用が決まったの。数年のブランクが不安だけど」

受話器から聞こえる泉さんの声はさわやかだった。

兄と結婚する前から教員だった泉さんは、人に教える仕事が本当に好きなのだと思う。結婚してからもしばらくは高校に勤めていたが、三年前になるだろうか、体調が思わしくないとといった理由で学校を辞めた。今思えば不妊治療でそうとう身体がつかつたのだろう。泉さんのからだも心配だったが、経済的には兄の収入で十分やっていたと思った。だから少し休養すればまた復帰できると安易に考えていた。

「泉さんが家を出る話、どうなっているのかな」

「たしかめたほうがいいわね。私たちの予定も立たないから」  
仕事が決まったとなれば、泉さんはすぐにも引越しの段取りを進めるだろう思ったが、いっこうに連絡が来ないのが奇妙でもあった。

思い立って泉さんに電話を試してみた。

「そのことです、近いうちに佐恵さんご夫婦と叔母様ご夫婦にお話ししたいことがあります」

泉さんはいつになく他人行儀なものの言い方をした。

慌てて叔母に連絡をしてみると、すでに泉さんから電話があったそう。

週末の午後、子どもたちをママ友に預け私と夫は実家に向かった。叔母夫婦はすでに到着していた。

「私たちも立ち会うほど、そんなに重要な話？」

さつそく叔母が切り出した。

「みなさんに知っていただきたいことなのです」



冷たい麦茶をそれぞれの前に配り終わると泉さんはソファに腰を下ろした。

「実は——」

少しためらった後、泉さんは言った。

「竜彦さんには、子どもがいました」

長い時間が経った気がした。泣き出したい気持ちになった。泉さん以外の女性との間にもうすぐ三歳になる男の子が生まれていた。三年前、泉さんが教員を辞める決心をしたのも当時の兄の言動に異変を感じていたせいだったのか。妻だからこそわかる夫の隠し事。——そういうことだったのか。

兄の死後、内縁の女性から直接連絡があったという。

「はじめはいたずら電話だと思いました」

「竜彦が、浮気をしていったっていうの？ 泉さんばかりじゃなく、私たちのことも裏切っていたというの？」

叔母の大きな声が響いた。叔父が「落ち着きなさい」と、たしなめながら叔母の膝を軽く叩いた。

「竜彦さんに限って——。私にも信じられませんでした」

泉さんは目を伏せたが涙はなかった。その事実を知ってから涙が涸れ失せるまで、ひとりでさんざん泣いたのだろう。

「たしかなの？ その子どもは」

絶対に許せないといった表情で叔母の唇が歪んだ。

「ほぼ間違いなく竜彦さんの子だと判明しました。——その方からDNA鑑定を受けたと言ってきた日がありました。ちよūdō竜彦さんの四十九日を迎えるころでした」

たしか、泉さんが実家を私たちに譲りたいと言ったのもそのころだった。マンションを買い、引越したいと言ったそ

の後にそんな重大な話が出てきていたとは。でも、そのときに泉さんには何も話してくれなかった。そのことがさらに場の雰囲気を変えた。

「そんな電話が何度かあり、隣の市までその女性に会いに行く約束をしたのです。皆さんにも同行していただこうと思いましたが、——結局、約束は叶いませんでした」

「どういうこと？」叔母が身を乗り出した。

「その方は先週亡くなりました。しばらく入院していたと聞きました。電話はいつも病院からでした。竜彦さんとは元同僚でした。その間、子どもはその方のお姉さんに預けていたのですが、いつまでもそういうわけにはいかないと。その子の行く末が心配だったようです。それで、なりふりかまわず私に電話をかけてきたと察しました。ご自分の死期が迫っていることを知っていたのだと思います」

皆、口をつぐんだ。エアコンの微かな音が響く。

「まさか、その子を引き取ってこの家で育てる、なんて言うのじゃ……」

冗談を笑い飛ばすような叔母の声が虚しく宙に浮いた。

泉さんは顔をあげ、静かにうなずいた。

# モモとヒナと私

高杉 治憲

(一) モモが急に我が家に迎えられたのは、二〇二二年一月十九日だった。元々犬派を自認していた妻と息子は、近所に住む長女一家がペットにしていた小桜インコの懐き方に魅了され同種類の小さな幼い小鳥を購入して一年二カ月が経過していた。その名をレモンという。レモンは極めて小さな姿でありながらまるで人間の子どものように馴れ親しんでいつの間にか我が家になくてはならない存在になっていた。私も、仕事から帰ると話しかけて遊び相手をするのが日課となっていた。言葉を話す訳ではないが家中の至る所を飛びまわり特に狭い場所や箱や袋のような閉じ籠る場所を好み探検するよいうな仕草は可愛らしく小鳥を超えて家族の一員として大切にされていたのである。一年が経過するころから、妻と息子から、もし家の中でレモンと共生できるなら犬か猫を飼いたいという話題が再三でていた。が、私は内心で、両方を別々に放し飼いにする状況を思い描いては「無理だ」と感じて賛成しないまま時が過ぎていた。ところが、我が家にモモが突然必要となる悲しい出来事が、その前日の一月十八日の午後八時頃に勃発したのだった。

その晩、夕食が済んだ私はリビングでテレビを見ていて妻と息子はキッチン脇の居間のこたつでビデオの映画を見ながらいつものようにレモンをゲージから出して遊ばせていた。

日頃から人懐こいレモンが足元やテーブル脇で色々なものに嘴を入れて探索していることを十分承知している筈だった。トイレに立った私が隣の部屋の自分の席に戻る前にふと妻と息子にテレビの話題に触れて話しかけようと近づいた刹那、妻が脱いで置いてあったスリッパを足で避けながらよるけてスリッパを踏んでしまった。一瞬、妙な感触で直ぐ足を外したものの次の瞬間、息子の叫び声が家中をパニックに陥れた。「レモンがいる。ああ、踏んでるよ、踏んじやったよ。死んじやうよ、どうしよう」ああおこなった私が抱き上げるとレモンは一度だけ羽をバサッと広げたが目半分開いたままほぼ即死の状態だった。私は、頭が真っ白になり、「レモン、許してくれ」と絶叫し、息子にも「許してくれ、俺が悪かった」我を忘れて悔やみ詫びてみても受け入れられない冷酷な現実が身心を包みこんでいた。暫くして妻と息子は「これも運命ね。あなたも私たちも精一杯レモンを可愛がり家族として大切にしてきたのだから、きつとレモンは幸せだったと思ってくれませよ。明日の朝、庭の柚子の樹の根本にお墓を造って天国に送りましょう」と、冷静に私を励ましてくれた。しかしその晩、私は事故のショックで一睡もできないままレモンを追悼しながら朝が来るのを待ち侘びていた。翌朝、一足早く起きて庭に行きレモンの墓を準備し家族が揃ったところで埋葬し

た。すると、墓に柚子の果実を幾つも並べ終わるのを待っていたかのように妻から思いも掛けない提案があった。「今日、午前中にベットシヨップに行つて、猫を飼いましよう」というのである。元々、何事にも切り替えの早い妻からの提案であり息子も賛成したので私も黙つて頷いて従うことにした。それが、私の落胆と憔悴ぶりを見た妻と息子が起死回生の一策として考えた名案だったと、モモを我が家に向かえて半年が過ぎた今となつても尚一層強く思つている。

(二)『あたし、モモ。ラグドールという猫で女の子です』

原産地はアメリカで茨城県水戸市のブリーダー業者に雇われている両親から二〇二二年の一〇月五日に生まれました。二カ月間だけママに育てられた後、独り立ちする為に年末に宇都宮の大型ペットシヨップにトレードされました。そこでは毎日、トレーナーのスタッフ女子にきれいに毛繕いされたりトイレの所作に磨きをかけ人間に可愛がられる抱かれ方を教わつて飼い主になる人のスカウトを待つていました。あたしはママから、「お前はシヨップで猫好きの人に見初められてスカウトされたらその家族が毎日笑顔で仲良く暮らせるように可愛がられるのが一生の仕事だよ」と聞かされてきました。そして、今年の一月十九日、シヨップのウインドウ越しに優しそうな老夫婦と息子らしい三人がなにやら相談しながら暫くあたしを見つめていました。やがて指で指名されて外に出されたあたしは、代わる代わる家族に抱かれた後、自動車に乗せられて宇都宮郊外の閑静な家に連れて来られたの。家について間もなく老夫人から付けられたのがモモという名前。始めは、すごく緊張したけど、この家で初めてご飯を食べて落ちていてママから聞いた通りのトイレ所作で人工砂を

かき分けて用を足し、その後で念入りに匂い消しをして見せると老夫婦と息子の家族が、「まあ、モモはなんて賢くていい子なの、えらいね」と相手を崩して喜んで抱いてくれたわ。あたしや兄弟姉妹を大勢産んで独り立ちの第一歩を身につけてくれるママはさすが『子づくり子育てのプロ』と言われる猫だと改めて見直しちゃった。

この家は、二世帯住宅用に建てられているのに、老夫婦と息子の三大家族なので、キッチンに繋がっている一階リビング全体がまるであたしの部屋と呼んでもよいくらい広々としている。ただ、何となくあたしと違う別の生き物の臭いと優しい老主人に元気がないことが気になりました。

(三)この二月、私は満七十六歳になった。幼い時には病弱で十歳の折に腎臓炎や肺炎を患つた上に翌年、急性骨髄炎で七転八倒する激痛の中で開業間もない整形外科医に左足切断を宣告されたことがあった。そのピンチを、母親の機転と父親が時々診療して貰っていた元陸軍軍医の即断の緊急手術によって奇跡的に切断を免れたのであった。私は、こうして身を以つて窮地を救われたことで、それ以降、自分の心身を強くするという自我に目覚めるきっかけになっていった。小柄ながらその後、中学から大学まで運動部に所属し心身を強くすることができたと思っている。以来、社会人になってから五十四年の間に大病に罹ることも仕事を休むこともなく、事業家として激しい変遷の中で何度もピンチやどん底を経験したがその度に新たなチャンスに繋げて再生発展を遂げて来たという自負と自信があった。この歳になつても今後、健全な心身を持ち続けられると信じ、自分の人生には鬱などは無縁だと思ひ込んでいた。ところがである。同じ一月末頃から不

眠症状、食欲不振、誤嚥の不安感に襲われたかのように体重が減ってきた。知り合いのドクターに相談したり整形外科のリハビリを受講したりスマホで数多のストレッチにも挑戦してみた。耳鼻咽喉科の精密検査を受けて薬を飲み本来の自分に戻る為に考えられることを片端からやってみてみたが捗々しくなかった。そんな私の救いとなったのは、モモとの生活が始まって二カ月余りしてからだった。仕事から帰宅すると出窓からモモが顔を出して出迎えてくれる。夕食後はモモと一時間ほど、かくれんぼや遊具を使って遊んでいるといつの間にか大声で笑っている自分に戻っていることに気がついた。

そこで、更にモモのことを知ろうと観察しつつ学習してみた。その結果、分ってきた事は第一に大型猫種であり雌でも六キログラムくらいまで成長すること。容姿は縫いぐるみのように可愛く、リラックスして過ごすことを好む。人間に關心を持ち人懐こくいつも人の傍らに居るような性格だ。普通の猫は、一歳で成猫となるがラグドールは四歳頃まで子猫らしく過ごすという。意外なことにモモは滅多にニャーオと鳴くわけではなく稀に人間にアピールする要求、不満、お願いなどに限られている。そして、一日に十四時間以上寝るのも仕事の内。普通の猫は独りぼっちを厭わないというのがモモは独りを嫌う。虎や豹のDNAを多く持ち、遊びは狩りのように一瞬に全てを賭ける肉食獣の習性が顕著であること。夜行性であり野生時代の特徴から見れば視力は強力だと決め付けていたが、猫の動態視力は狩りに適しているもののモモの視力や色別視力はかなり弱いことが分かってきた。そして、最も興味深いことは、モモの猫寿命十五歳は人間でいえば今の私と同じ七十六歳にあたるというのだ。さらに十七歳は人間の

女性の平均寿命と同じ八十七歳、極めつけは仮にモモが長寿で二十歳になる時は人間ならなんと、二十年後の私と同年の九十六歳になることを発見したのである。モモは、過ぎたことは気にせず忘れるというし、未来のことや分らないことは心配しないらしい。そして、今を好日好時として生きていることに気づかされた。こうして、僅か生後半年で避妊手術を受けたばかりのモモが猫としてあるがままに生きていることに注目している内に、鬱になりかけた私は快眠快食快便が戻って来て元氣な心身を取り戻すことができたのである。

(四)『あたしモモ』今、あたしが心掛けていることは第一にトイレの場所が変わっても一度も粗相しないこと。第二にご家族が食事の際には邪魔をせずに待つようにしたこと。オーパ(老主人)は、毎日毛繕いとウンチの後にお尻を拭いてくれる。彼はあたしと遊んでくれているの。でもこれは内緒。オーマ(老夫人)はあたしと遊ぶことは少ないけれど、ご飯やトイレの掃除をしてくれるし昼間は二人だけの時も互いに干渉しない時間を持っていてよい関係です。本来の飼い主であるニーニ(息子)はあたしを娘のように大事にしてくれるのであたしも甘えてあげている。色々考えていたらまた眠くなったのでまた昼寝します。これもあたしの仕事です。この翌週、モモが一人だと寂しいだろうと、生後三か月のブリティッシュ・ショートヘアという、ニャーニャーと賑やかで機敏な後輩の女の子が我が家にやってきてヒナと名付けられた。私が、「二十年後の我が家は九十六歳が俺たち三人になるね」と、しみじみ語りかけると、二匹の方は、上の空で私の目の前を追掛けっこして通り過ぎていった。

## 末裔地主2

紙屋 里子

昼の食事がすむと親父が見舞い金の袋を渡した。

「家の代表だからな、頼むよ」と親父がいう。子供の時からよく家の代表だと言われた。子供の時は代表が務まるから、俺は偉いんだと思っていたが、今はそんなことも思えなくなつた。あの頃は良かったなと思う。

外へ出ると太陽が真上からぎらぎら照りつけて暑かつた。お袋が手のひらを目の前に翳しながら車庫までついできた。

「貞三さんによろしく言っとくれよ」といつものごとく同じ台詞なので、笑つてしまつた。

「お袋、病気で入院しているんだよ。よろしくはないもんだ」  
「それもそうだね。それより貞三さんの家からは誰か行つてるといいけどね」

事情が事情だけに大声では言えないが、心配しているのだ。「妾がいるから来てないんじゃないかなあ」と言うと、お袋は黙つて頷いた。それ以上は言わなかったが家族を気の毒に思っているのだろう。大叔父は妾なんか作つて全くいい気なものだと思ふ。

大叔父の本当の家族は、隣町に住んでいて、妻と息子がいる。息子は、四十歳で女の子が一人いる。大叔父は孫がいるのに、自分の子供より五歳も年の若い女と暮らしているのだ。よくやるよいつも思っていたが、妻と息子はそんな生易し

い気持ちではないだろう。煮えくりかえるように腹が立って、どうにもこうにもならないほど馬鹿馬鹿しくて、涙が出るほど寂しくて悲しくて、外にも出られないほど恥ずかしくて、耐えられないのではないだろうか。もういい加減で家族の元に帰つたら良いのに等と考えながら自動車の運転をしていたら十五分ほどで病院に着いた。車の中がむしむしと暑くなつた。そろそろ、クーラーを入れなくてはならない。

堀越病院の駐車場はスーパーマーケットと遊技センターが一つになつた建物の前にある。駐車場のど真ん中に樹齢何年だろうと思うような大きな樺が立っていて、まるで木を中心にロータリーのように車を置く。この病院には何度か来たが、いつも車がいっぱいだ。見舞客が多いのか、一日診療の患者が多いのか分からないが、やつと一つだけ空いているスペースを見つけた。置き場所を見つづけるのが車を運転して来る時間よりも長くかかつたような気がした。車外へ出ると、頭が熱いほど陽が照りつけたので、帽子を被つてくれれば良かったと思つた。急ぎ足で病院の入口に行き、中に入ると、広いロビーは、涼しかったので救われた。沢山の椅子が設置されていて二、三十人座っていたが、みんなしょんぼりして活気がない感じがしたが、病人に活気がないのは、仕方ないことだと思ひ直した。



ロビー右側に沿ってカウンターがあり制服の女の人が五人いた。『受付会計』と表示してある。受付に五人もいるのは、患者が多いということだろうか。

「金田貞三の病室は何号室か教えて下さい」とたずねると、一人の受付嬢に聞いたのに五人ともみんなこつちを見た。五人の女性に一齐に見られるのは、照れくさい。

「別館二階の二四七号室です。緑の線に沿って行つて下さい」指さした床を見ると、五色の線が延びていた。

堀越病院は、来るたびに建物が増え大きくなっている。病院が流行っているという言い方は変だが流行っているのだろう。別館は真新しい病棟のようだ。エレベーターには誰も乗っては来なかった。せっかく設置されているんだから、乗ればいいのに。でも階段を歩いている年配の人を見て、若いんだから次から歩こうかなと思った。

二四七号室は、大部屋の隣の個室だ。大部屋からは、話し声一つ聞こえない。病院は静かなものだ。

病室のドアをたたくと、中で「はい」と返事をする女性の声が聞こえた。妻の声だろう。足音がして、静かにドアが開いた。ほっそりとした色白の女性が顔をだして、憂いを含んだ大きな目で健次を見た。目鼻立ちの整った小作りな顔、口びるのうすい上品な口許、思わず見取れるほど綺麗な。

「どちら様でしょうか」

ドアの取っ手を握りしめて鈴を振るような透き通った声で尋ねた。ゾクリとした。

「金田健次です。大叔父の見舞に来ました」

「それは、どうもお世話様です。さつき食事が終わって今、寝ていますがお入りください」と静かにドアを開けてくれた。

病室に入ると、病院特有の消毒液の強い匂いが鼻をついた。

大叔父は子供の頃、鳥打帽をかぶり粋な服装をして家に来て来た。来る時はいつもカステラを持ってきてくれた。あのころはカステラは高級品だったから、家ではなかなか買ってもらえなかった。お袋が切っておやつに出してくれたのでみんなワイワイいながらほおばった。その美味しかったことは今でも覚えている。

「おいしい。ありがとう。またカステラ持ってきてよ」と素直に言っていた。

ベッドに寝ている大叔父は、頬がこけ顔色も悪くまるで老人のようになっていた。七十五歳だから老人にはちがいないのだが、この前あった時は、まだ若々しくて精神的な感じだったのに。あれから半年も経つてはいないのにも思い、胸が痛んだ。

「どうぞ、座つて下さい」と妻が備え付けのパイプ椅子を指し示した。

「それはどうも、ありがとう」

椅子に座り腰を落ち着けると、彼女ももう一つある椅子に腰掛けた。まるでベッドを挟んで差し向かいのようになった。改めて見たら、ますます円香を綺麗だと思い、吸いこまれそうな気がした。

「大叔父の容態はどうですか」

本人が寝ているとはいえ目の前にいるのに聞くのは、何か気が引けた。

「心臓に肺に肝臓に腎臓とあちこち悪いのですが、特に心臓



が痛い苦しいというので、救急車で運ばれてそのまま入院したのです」下を向き探れ声でいう。疲れているようにみえる。

「詳しい検査結果は、これから出るのです」と妻。

「そうですね。これ、親父から預かってきた、お見舞いです」と話を転じた。

鞆からお見舞い金の入った袋を出して、手渡した。

「そんなことをしていただくなんて、申し訳ありません」

嬉しそうな笑顔をして袋を受け取ったのを見て、素直そうな人だと思った。

小声で喋っていたのに、大叔父が小さなうめき声を発した。目を覚ましてしまったようだ。ベッドを挟んで喋るのだから、どんな小声でも聞こえるので、うるさかったのかも知れないが、これで大叔父と話が出る。

「叔父貴、大丈夫かい」と元氣な明るい声を出して聞いた。

「健次、健次かい。来てくれたんだ」

苦しいのか、掠れた蚊の鳴くような小さな声でいう。いつも、三十人に聞こえるような大きな声を出しているのに、まるで別人の様だ。

「あなた、健次さんがお見舞いをくださいましたよ」と妻が見舞金の入った袋を見せた。

「大したことないんだよ。すぐに退院できるからそんなことをしないでおくれよ」

弱々しい笑いを浮かべながら言うが、その様子を見ているとまた胸が痛くなった。

「権十郎は元氣かい」兄弟のように育った親父のことを聞いた。これが血というものだろうか。

「元氣だよ。入院したっていうから心配しているよ」

大叔父は顔きながら、また力なく笑った。

「顔を見て安心したよ。早く良くなって、また前のように家にきて親父と話したりしてよ」

「ありがとう、養生するよ」

呂律のまわらない言い方になったり、フツと目をつむったりするのは、疲れるからだろう。引きあげなくてはいけない。

「叔父貴、早く良くなってよ。また見に来るからな」と帰る挨拶をする。

大叔父は少し目を開けて頷いたが、またすぐ目をつむった。部屋を出ようと椅子から立ち上がり、ドアの方に歩いた。

「健次さんを、送りに行ってくださいます」

送りに行くなんて、一寸したことまで一々言うのかと思つたが、夫婦でないにしても一緒にいる者はこんなものだろうか。妻は病室のドアを音がしないように閉めて出て来た。優しい心使いの出来る女性なのだ。

「ありがとうございました。来て頂いて嬉しかったようですよ」と廊下を歩きながら笑顔で言ってくれた。

「大変だけど叔父貴のこと頼みますよ」

顔をじつと見ると、彼女も健次の顔を恥じらうように見た。二人でエレベーターに乗った。一階に着くとドアの前に車いすに乗った男の人が待っていた。後ろに看護師が入り替わりになった。彼女は、病院の玄関まで送ってくれた。

「また見舞にきますよ」と言い帰ってきた。

病院に見舞いに来て爽やかな感じがしたのは今回が初めてだった。大叔父の事を考えると胸が痛い、一方でウキウキするような気持ちもあった。駐車場に行くと車はかなり少なくなっており、太陽が西に傾いていた。

# 高鳴る軍靴の響きのなかで

安西 悠子

昭和の年号が、数を重ねる毎に、日本の国は、戦争の空気が濃くなりはじめた。軍靴の足音のリズムが高鳴って来た。

昭和九年（一九三四年）四月、真岡小学校一年に入学した私は、文部省発行の国定教科書の国語の第一頁は、

“サイタ サイタ サクラがサイタ”

であったが、その二年後、弟が入学した時の国語の教科書の第一頁は、

“ススメ ススメ ヘイタイ ススメ”

と、改定されていた。

昭和十二年（一九三七年）七月七日、支那（現在は、中国と呼ばれている）盧溝橋で、日本と支那の軍隊が戦った。民間人も、たゞ一枚の赤紙の召集令状によって、兵役に就かなければならなくなった。

日本と支那が戦闘を交えても、日本の内地での戦火は無いから、子供心にも、対岸の火事のような心持ちであった。

昭和十二年（一九三七年）、荒町に住む八十歳になった久保平氏は、その記念にと、真岡小学校に瀟洒な雰囲気を持つ講堂を寄付した。古色蒼然とした木造平屋建ての校舎の並ぶ敷地内に、ヨーロッパの香を充滿させてくれた。久保講堂と呼ぶ。

この講堂の落成の祝が行われた。東京から、童謡作曲家の

“かいぬま みのもる氏”と、童謡歌手の川田正子姉妹、その伴奏のための人たちがやって来た。

“かいぬま みのもる氏”は、挨拶した。

「宇都宮から、大きな坂を四つも越えて、やっと、真岡に辿り着きました。この様な処（山奥の地に）に、ヨーロッパの香り高き講堂が建てられたことは、実に素晴らしい。」と、祝辞を述べた。

私は、小学生であったが、この時、初めて、私の生れ育った真岡とは、都会の人からみれば、山間の僻地であるのだ、と、気付かされた。真岡町は、真岡線の汽車に乗れば、上野駅まで三時間半で着けるから、山奥に立地しているなどと考えたことは無い。この挨拶の言葉で、真岡町というのは、都会人からみれば僻地であるのだ、と、木槌で頭を叩かれた心地がした。

真岡小学校六年生の私達は、受持先生の指導の許に、故郷を離れ見も知らぬ支那大陸で戦う兵隊さん達に、慰問袋を送ることになった。宛て先きは、宇都宮に在る陸軍の師団が派遣されている北支の兵士達へだ。十名づゝグループをつくり、木綿の布で袋を縫い、その中に、保存の効く菓子や、私達の絵や書を入れた。

暫くすると、一通の軍事郵便が届いた。手紙の主は、両毛

地区から宇都宮の師団に召集され、北支に派遣された一人の兵士からだつた。

慰問袋の中の図画や書が大層、嬉しかった。兵舎の壁に貼り毎日眺めている。甘納豆も羊羹も、とてもおいしかった。と書かれていた。そして、その札の手紙とは別に、一枚の便箋があった。たどたどしい日本語、大きな片假名の文字が書かれていた。

「日本の兵隊さんに、日本語を教えてもらっています。この手紙を書きました。慰問袋の中の羊羹、おいしかったです。陳文秀より」と、書かれていた。

日本の兵士達は、支那の各地で、支那の軍隊と戦つて、勝利した。内地の私達は、頻繁に、戦勝の提灯行列をして、日本軍の勝利を祝つた。

前戦の陸軍の兵士達は、支那の軍隊との戦いに勝利し、その村を占領しても、その後は、村人達と交流し、村の子供達を、日本軍の宿舎に招き、子供達は毎日、遊びに訪れ、彼らは、日本兵に日本語を教えてもらっているのだ。

命を賭けた戦争で勝利のあと、その村の人々、子供達と、平和的交流をもつていたという事実は、心が救われることであつた。

昭和十四年（一九三九年）、真岡小学校、五、六年生の女子、二百名（五年生、百名・六年生、百名）は、校庭に集合させられた。壇上には、時の校長、高橋田磨先生が登り、号令をかける。私達は、「興亜少女隊」と名付けられた。集合すると、剣舞の様な動作の「舞」をいたした。この「舞」の外は、具體的な行動は無かつた。

昭和十六年（一九四一年）四月、真岡女子高等学校に入學した。芳賀郡の各町村の小学校から合格した百名である。白い衿の付いたセーラー服を着た私は、新しい教科の、英語の科目に眼を見張り、小学校と違つて、各教科毎に先生が異なつて、教壇に登るのも新鮮であつた。

この年、昭和十六年（一九四一年）十二月八日の朝、六時に、ニュースを聴くために、ラジオのスイッチを入れた。突然に流れ出たのは、勇壮な「軍艦マーチ」の曲であつた。アウンサーが、いつもの朝と違つて緊張した声で、

「我が軍は、米、英と、戦闘状態に入れり。」と、繰り返し述べた。

よく理解できなかったが、不断と異なる重大な事態であることは、感じとつた。そして、私は、自分勝手な考えをしてしまつた。それは、この日は、女学校に入學してから初めて経験する第二学期の期末試験の日なのだ。科目は「生物」。私は十一日に気管支炎を患つて長い時間、授業を休んだ。その部分が、今日の試験の範囲で、試験にそなえて一生懸命、教科書を読んだが、よく理解できなかった。自分勝手な想像をした。重大な事態が発生したのだから、今日の試験は取り止めるかもしれない。しかし、学校は、予定通り期末試験を実施した。

日本国政府と軍隊は、戦争へと、国民を駆りたてた。私の女学校へも、その嵐は吹き込んで来た。結婚したばかりの、英語の先生は、胸に日の丸の旗をまいて、支那大陸へと出征した。代りに、白髪の老教師が教壇に立つた。理科の中松先生にも召集令状が届いた。それから、間もなく、南方戦線で戦死なされたとの報に、講堂に、黒幕を張り巡らして、全校

生徒四百名が、祈りを捧げた。

各教科の先生方も徐々に減って、農業の科目を担当する老教師が、西洋史の課目を講義した。

父の店からも、店員が次々と兵士となって出征した。

或る日、「としどん」が、セーラー袴をつけ、帽子にリボンをたらしした海軍兵士の軍服で訪ねてきた。彼は、海軍兵士として、店から出征した。住み込みの番頭さんは、名前の下に、「どん」をつけて呼ぶ。「としお」は、「としどん」で「ひでお」は、「ひでどん」と呼ばれる。「としどん」は、休暇が出たので、店へ挨拶に来た、と言った。ハワイ沖海戦に参加して勝利したと言った。その御褒美に休暇がでたと言う。「としどん」の語るところによると、日本の海軍は、樺太沿岸から、千島列島に沿って北上し、カムチャツカ半島沿岸を辿り、南下して、ハワイの軍港を攻撃したと話してくれた。「としどん」は、航空母艦に乗船していたが、ハワイ攻撃のあと、アメリカの軍艦の攻撃で、乗っていた日本の航空母艦が轟沈され、太平洋に投げ出されたが、九死に一生を得たので、こうして帰省できた、と語った。私は、十二月八日の日本海軍は、太平洋を横断して、ハワイの軍港を攻撃したものだと思っていた。

女学校では、遂に授業が打ち切られた。授業はせず、農村の出征兵士宅への勤勞奉仕が行われた。一年生から四年生まで十名づつグループをつくり、農作業を手伝うのだ。鉛筆を持つ手に、稲刈り鎌を持ち働くのだ。当時の農家は、働き手のその家の主人は、召集令状によって、戦地に送られ、残ったのは、老人と女性と子供たちだけであった。

セーラー服を脱ぎ捨てて、作業衣を着る。作業衣は、大人の和服、一枚から、上下一組がつくれる。上衣は、東袴、筒

袖、下衣は、紋平である。統制経済下であるから、新しい布地は求められず、祖母や母の晴着を解いて縫い直す。

昭和十九年（一九四四年）三月の卒業式には、久方振りでセーラー服を着た。別れを惜しむというより、これからの生活が案じられた。

卒業しても、就職、又は、進学以外の人々は、「女子挺身隊」というものに参加させられ、真岡高等女学校の教育目標の「良妻賢母」の途でなく、戦争への参加を求められた。真岡高等女学校は、霞ヶ浦にて、当時の航空予科練習生の制服、「桜に錨」の七つボタンの付いたものを縫っていた。

昭和二十年（一九四五年）、八月十五日は、朝から、ラジオのアナウンサーが

「正午に重大発表があるから、聴くように。」と、繰り返し伝えていた。

八月十五日は、私の曾祖母の葬式の日であった。葬式をつくる前に、ラジオの前に立った。ラジオは、ガーガーと、雑音がひどくて、最初は、天皇は、何を仰せあそばしていらっしやるのかわからなかった。途中、

「ポツダム宣言を受諾せり。」

と、仰せになった。ポツダム宣言の受諾とは、敗戦を受けられるということである。大人達は肩を落し、沈黙の時間が流れた。勝利すると信じて（信じこまされて）いたからだ。真岡の街から、音が消えた。

たゞ、庭で無心に遊ぶ男の子供達が、「ベイゴマ」の遊びに打興する歓声だけが、晴れた空に明るく響いていた。

## 凍ゆるむ

島田トミ子

繁蔵は五日前から病院の外科病棟のベッドの上でいた。病院の外は猛暑日が続いている時期である。

今年の春に七十歳になった繁蔵は、これまで入院するような病気がしたことがなく健康が自慢の男であった。ところが、那須高原のレンゲつつじを見に行つたところから食事のあとになんとなく胃が持たれる感じと、食欲も少し細くなつたのを自覚していたが、加齢のためだろうとも考えていた。

だが胃の調子が戻らなかつたために近所の開業医に診てもらつたところ総合病院を紹介され検査の結果、胃の過形成性ポリープと診断された。病理検査の結果、胃の三分の二を摘出する手術を受けた。ベッドに寝て天井を見ているとこれまでの自分史が次々と浮かんてくる。

三人の子どもたちもすでに独立して家庭を持ってやっている、親の役目も終わったなあ、あれが安堵の気分を味わうということだろう。脱サラしてやりたかつた骨董品の店も始めたし経営だつて結構軌道に乗つていたではないか。妻も喜んでくれていた。順調すぎたのかな？ 昨日発熱したそのせいも、今日もまたウトウトしながら自問自答をしている。

喜びのそのあと一気に谷底へ落とされたんだ。数年前に同じ年の妻がクモ膜下出血で亡くなつた。あれから男の一人所帯となり、寂しさと同居の生活になつた。それでも頑張つて

いたのに、今度は自分の病気かよ、ついていないなあ……。術後の経過は順調だったが、退院すれば男ひとりの生活であり特に食事のことを誰もが心配した。でも繁蔵はできるだけ栄養や食事のことを学んでから退院したいと言つて周囲のものを驚かせた。

これまでやつていた骨董品の店が唯一の支えであつた。入院を余儀なくされるにあたり、店のシャッターには「しばらくの間休業します」と書いた張り紙をしてきた。「早くあの紙をはがさなければ」、その一心でベッドの上でいた。

繁蔵は那須地区の農家の長男に生まれた。父から、「これから農業じゃないことを考えろ」と言われその言葉を信じて工業高校へ進学した。卒業後はとなりの市にある東北地区では一番大きい水道設備施工の会社へ勤めていた。給料取りと田畑を持つた兼業農家の世帯主としてこれまで真面目に働いてきた。

しかし本人は不本意な進路選択であつた。幼いころから手先が器用でそのうえ絵を描くのが好きだつたから、本当ならば絵や彫刻など何か芸術関係の勉強を試みたかつたのだが、家の経済状態もわかつていたし自分の下には妹も弟もいたからそれは無理なことだつた。それでも働きはじめてから少額の小遣いをためては街の中のギャラリーを覗いたり、時



折上京して有名な絵画展へ行くこともあって、叶わなかった昔の夢に繋がることをやっていた。それは高校生の頃胸の奥に置いてきた願望がちよろちよろとか細かい炎をもやしている証拠でもあった。

あるとき、会社が人員整理のために早期退職者を募った。退職金が割増しになるというので繁蔵はそれに乗った。これまでもずつとやりたかったことがあったが、身体にしまい込んでいたものが動き出した。脱サラするには定年退職後では遅い、体力的にも心配がないのは五十年代前半の今がぎりぎりのときだと考えてのことだった。

幸い妻も元氣だった。古物商の資格の申請をして取得し、念願の店を持つ準備を着々と進めた。退職と同時に安い貸家を探した。

二十代半ばで結婚した繁蔵は三人の子に恵まれた。妻も評判の働き者であった。子どもは二人続けて女の子、三番目に長男が生まれた。勝彦と名付けた。繁蔵夫婦は教育にも熱心で女の子たちもそれぞれ短大と大学へ進んだ。

普通高校へ進学した勝彦も、当然大学へ行くものとはばかり思っていたが、

「俺は勤め人にはならない。だから大学にも行かない。腕で稼ぐ職人になる」と予想外の考えを言って家族をびっくりさせた。繁蔵の驚きは大きく子どもの希望を叶えさせるのが親の役目なのかと悩んだ。

「超一流の大工になりたい。愛知県に大工を育ててくれる工務店があるんだ。丁稚奉公から始まって棟梁になるまで面倒を見てくれるんだ。ちゃんとした会社組織だから心配ないよ。関東地方の人も複数いるし栃木県から行っている人もいるら

しい。将来は立派な大工の棟梁になって帰ってくるから」

自分で調べたことを懸命に説明してきた。繁蔵は進学率が高くなっている今だからこそ高等教育で学び視野を広くすべきだ、と思えば思うほど勝彦の考えには賛成できなかった。怒りの感情が先に立ってしまい自分の考えを理路整然と言えなかった。良い悪いではない、生きかたについての考え方が父と息子でまるで違う。結論の出ない激論となった。

「お前は長男だろ、家のことも……」

「今どきそんな理屈は通らないよ。俺は長男を自分で選んでいないから」

「何を言っている」

何回も何回も同じような口論の繰り返しになった。

進路を決めるのは難しい、繁蔵は思った。自分は大学へ行きたかったのに家の事情から進学しなかった。それなのに自分の子どもは大学へ行ける条件がそろっているにも拘わらず行かないと言う。

「棟梁になる？ 始めてもいねえのによくいうよ。職人の厳しさを知らねえからな。大風呂敷を上げるなら好きにしろ、その代わり一人前になるまで親にはいつさい頼るな、うちの敷居もまたぐなよ、いいな。一人でどこまでやれるかやってみろ」

「ああ、やってみせるよ、大丈夫だ。俺にも覚悟がある」

繁蔵は自分の体験から勝彦の将来のことを良かれと思って意見を言っているのにうまく表せないもどかしさを残したまま決裂し、二つの心はこのときから行き違ってしまった。

勝彦の身元保証人の書類のこともひと悶着あった。本来なら父親の繁蔵が署名押印すべき書類だとわかっていたが、



双方とも何回にも及ぶ口論と、繁蔵も最後まで承諾しない親の意地をつつばってしまい「俺が書く」とは言わなかった。いや言えなかったのだ。仕方なく妻から埼玉に住む繁蔵の弟信二に頼んだ。家族以外のものが保証人になることは、それはそれで意味があることであつたから会社からは特に何も言われず支障もなかった。

信二は何か事情があるなど感じながらも双方に問い詰めることもなく快く署名して勝彦に渡してくれた。一連のできごとと繁蔵の妻も心を痛めたのは同じであつたが、お金も困らぬように持参させるなど必要な準備はもれなくした。結局、勝彦は意志を曲げることなく、予定どおり愛知へ行つた。勝彦が家を離れてから二人の娘たちは順々に結婚して家を

離れた。

子どもたちが巣立つた家は五十の坂を越えた夫婦二人にとつては広すぎる空間となつた。

子どものことが一段落したのを機に繁蔵のやる気エンジンのギヤが一段上がった。絵画や古い掛け軸、焼き物などを集める目的を持って見て歩いた。

幸い会社に骨董品好きな先輩がいて、繁蔵の趣味を聞きつけて声を掛けてくれた。そのあと骨董市やなじみの骨董屋に連れて行つてくれた。

「繁ちゃん、お前ゼビ店を持ってよ」という先輩の言葉は励ましなのか冷やかしのなのか、それとも後押しなのかわからなかつたが、繁蔵はだんだんその気になつていた。歩いているうちに興味もいっそう膨らみ次第に目利きにもなつていく自身を実感できるようになつた。若いころから美術館や焼き物の窯元などに入入りしていたのも今になって生きてきたのか

もしれない。

食う米は心配ない、割増しの退職金の一部を準備金として使わせてもらおう。繁蔵の商魂のほどは未知であつたが「誠実な性格はこういう商売にはうってつけだ、いい客が付くよ」とも言われ、行動に移した。

妻に計画を話したところ、条件付きの賛同を得た。

「骨董店は自宅とは別の所でやること、五年やって駄目なときは潔く店を閉じること」という約束をして、早速店の建物探しを始めた。

繁蔵の自宅は黒磯駅近くの国道四号線を少し東へ入つた所にある。

地元の不動産屋に頼むと直ぐに探してきた。那須街道を少し上がったところで街道沿い、立地条件は満点である。元は民族雑貨店を営んでいた建物ですぐにも使える。大家は地元の人でそれも安心材料であつた。

観光客と別荘を利用する人々が客層と想定した。

賃貸借契約をすると同時にテーブルや椅子、ショーケースや机など必要な備品も整えた。これまでに集めたものを家から運びさらに市場でも買いそろえて並べるとすっかり骨董店の雰囲気が出てきた。店は学校が夏休みになるのを待つてオープンした。温泉街に上がる前に立ちよる客、帰り道に覗く客といろいろだが客足は上々である。

好きで集めた品物が他の人の手に渡り、大切にされますようにと祈る思いで商品を手渡した。半年ほど経つたとき地元で焼き物をしているという若い夫婦が「品物を置かせてもらえませんか?」と言つてきた。それも受け入れて地元製の品を「新進気鋭の作家コーナー」として設けた。新旧混在である。

順調な経営で繁蔵はほっとしていた。開店五周年記念のとき繁蔵は妻に感謝の花束と欲しがっていた桔梗の柄の浴衣を渡した。五年以内に店を締めずに済んだのだ。繁蔵は火花を打ち上げたい気分だった。妻も喜んでくれたのだが、これは次に来る谷底の前触れだった。そのあと間もなく妻は桔梗の柄の浴衣の袖を通すことなく旅立ってしまった。クモ膜下出血だった。

妻の葬儀には棟梁になると宣言して家を出ていった勝彦も初めての帰省をした。三十路を過ぎ妻と二人の子もいた。一人前の立派な大工になり建築部の課長だと言った。繁蔵は「立派になったな、よく来たな」とだけ言った。勝彦も多くを語らず家族を紹介した。感じの良い嫁と小学生の孫たちがそこにいた。

繁蔵は「いつ栃木へ戻るのだ」と聞きたかったが、葬儀の席でもあるためだまっていた。勝彦もその話題には触れなかった。

妻が逝って五年が過ぎた。繁蔵は自分が入院した当日、埼玉に住む弟の信二を病院へ呼んだ。

「ポリープをとるだけで大きな手術ではないからまさかのことはないと思うが……。実は相続のことなんだ」

「何を言ってるんだい、兄貴。高速で急いできたのに」

「不動産は法律どおりで構わない。店のことなんだ。家と土地は賃貸だからなんのことはない。問題は中の品物なんだよ。また元通りにやれるとは思うがこの先俺に何かあれば品物は市場で売るか同業者に買ってもらうかなんだ。そこで、お前

が預かってくれ。店を再開する時は連絡するから大変でも持って来てほしい」

「ええっ、俺が？ 長女の美代子でいいんじゃないの？」

「いや、俺の考えなんだよ。美代子に家の鍵を頼んであるから」

繁蔵はベッドの横の床頭台の中の金庫から二つの鍵を出し、信二の手のひらに鍵の重さを感じるような置き方をした。信二はその場では預かった。

那須の山の楓やもみじが色づき始めた頃、信二の携帯電話が鳴った。

店を開けると言う。その週末、信二は勝彦を伴って繁蔵の家を訪れた。家の玄関先には作業服を着た笑顔の勝彦の姿があった。

# 浅葱鼠色の空

鈴木あぐり

哲也が亡くなった。享年六十歳。早すぎる死に隣人たちは色めき立った。一人暮しの哲也の死を発見したのは、無断欠勤を不審に思った同僚二人だった。

四年前に母が亡くなり一人暮らしになると、一時はセルフネグレクトのような生活になった。そんな哲也を気にかけてくれたのは、中学時代からの友人澤井だった。

代々農業を生業としていた哲也の家には、農地を貸倉庫や、貸店舗などにしていて、働かなくても収入があった。株の運用にも手を出したが、損失も多く今は熱が冷めてしまった。

妻の麻子とは一人息子の雅也が、大学を卒業したのを機に別れた。哲也の母との折り合いが悪く諍いが絶えず、そのほとんどが母の理不尽な言いがかりだった。

父は常に麻子の味方だった。そのことも母を苛立たせた。父が亡くなると、タガが外れたようにエスカレートしていった。配偶者が亡くなると大人しくなるという話を耳にするが、母には当てはまらなかった。

せめて妻に十分な労いの言葉をかけていれば……。後の祭りである。

哲也と麻子が出合ったのは、アメリカから帰る飛行機のみだった。

哲也は大学の農学部を卒業すると、アメリカに二年間の研修に出かけた。無事研修を終え帰路の飛行機のなかで具合が悪くなってしまったのだ。仲間や研修団の事務局の者も同乗していたが、皆眠っていて気づいてくれなかった。

哲也の異変にいち早く気づいたのは、通路をまたいだ横に座った麻子だった。すぐに客室乗務員を呼び、事情を話しプランケットと、ポカリスエットをもらった。

麻子は看護師をしていて、友人が医師と結婚しアメリカで暮らしているところを訪ねた帰りの便だった。旅行バッグのなかには、薬一式が入っていた。体温は三十八度五分。額に熱さまシートを貼り、眠っていた事務局の人を探して、既往症と薬のアレルギを聞いた。麻子の適切な処置により、成田空港に着くころは、哲也の熱も三十七度代まで下がった。

空港に着くと、麻子は事務局の人に差し支えなければもう少しいてほしいと頼まれた。なにより哲也が懇願するような目で見つめてきた。

母性本能をくすぐられた麻子は、哲也を置いて帰ることができなかった。三十分くらいすると哲也の父親が車で迎えに来て来た。父親は皆に挨拶すると麻子を送ると言う。

麻子はそれなら自分の勤務する病院に寄って診察を受けてほしいと提案した。麻子の言葉通り病院で診察を受けた哲也

は、風邪と疲労それに栄養状態が悪いと言われた。結局五日間の入院を余儀なくされた。

哲也は不幸中の幸いだと思つた。二つ年上の麻子に一目ぼれしてしまい、このまま別れたくないと思つていたからだ。哲也の父も初対面の麻子を気に入つた。そして哲也の配偶者にはテキパキとして、しっかりした麻子のような人が相応しいとまで思つてしまつたのだ。

哲也の猛アタックが功を奏し二人は結ばれた。

アメリカから帰つて来た哲也は、父が五年前に始めた花卉専門の農業を、さらにハウスで花を販売し、出口には喫茶コーナーも作つた。花農場カフェは口コミで客が増え、麻子も時々カウンターに立つた。

一度は職を辞した麻子だが、息子の雅也が保育園に通うようになるとまた働き始めた。前の総合病院でお世話になつた医師が、麻子の住む隣市で開業したため、声がかつたのだ。これには哲也だけでなく父が大いに喜び麻子の背中を押ししてくれた。

歳月が流れなにもかも順調そうに見えた花卉の経営に少しづつほころびが生じてきた。慢性的な人手不足と、ハウスの維持費が値上がり続けた。

なんとか工夫をしては持ちこたえてきたが、母の愚痴が増えてきて、麻子の顔を見れば当たり散らしている。

そんな日々のなか父が入院した。癌だった。父はハウスを辞めて、貸倉庫にするよう哲也に命じた。道路沿いの畑は貸店舗として貸し出すよう算段した。自分の代で清算し父は息を引き取つた。

「ジーンジ」「ジーンジ」雅也の泣き声が齋場に響いた。雅也は祖父が大好きで、幼いころから後をついて回つた。特に犬の散歩は二人の日課となつていた。哲也は雅也の喪失感はいかばかりかと不安に思つた。

雅也は目を追うごとに祖父のいない家が虚しく感じた。それと同時に、早く大きくなり家を出たいと言ふ思いが膨らんでいった。

祖母は雅也にはとてもやさしい。過剰なほどの期待もしている。それは学習や運動能力への期待ではなく、「跡取り」としての存在だった。福岡県に父の姉の子である従弟もいるが、期待度が全然違つた。

雅也は北関東の緑豊かな集落で、古い因習としがらみにとられ、生きるのはまっぴらだと思ひながら成長した。学習能力を高め、誰からも認められ「こんな田舎に埋もれさせられない」と思われるようになりたいとの思いで努力を続けてきた。努力の甲斐があつて、常に一、二位をキープした。雅也にとつて勉強は現実逃避に他ならなかつた。

母と祖母の諍いのなかで成長してきた雅也は、毅然とした態度をとらない父を恨めしく思い、母に同情していた。

雅也が大学を卒業すると、両親が離婚した。ホツとする気持ちと寂しさを覚えた。祖父とこの家で暮らしたところが懐かしく甦つてきた。ジーンジ……。

哲也にとつて母との暮らしはなにをしても侘しく感じた。麻子や雅也に会いたい。田舎とはいえなぜ自分は両親と離れて暮らさなかつたのだろう。自分の優柔不断さが妻子を不幸にしたのだ。

リビングの隅に貼つてある雅也の身長計。三歳、五歳、七歳……と印がついている。哲也は号泣したい衝動にかられた。

砂を噛むような味気ない暮らしにも慣れて、恙なく過ごすある日、呆気なく母との別れがやってきた。蒸し暑い夏の薄暮時、裏庭に茗荷を摘みに行った母が、潜んでいた蛇に指を噛まれた。すぐに水道水で洗い絞り出すようにして蛇の出した液を流した。

母は軽いしびれを感じたその刹那、これで死ぬると思つたらしい。我に返ると隣人に頼み救急車を呼んでもらつた。病院で血清を投与したが、時間が経つと肘のあたりまで暗黒色に変色していった。

それから二週間で母が旅立つた。

「オレを残して死ぬなよ」と何度も繰り返す哲也に母は、「哲也の家庭を壊したわたしが長生きなんてできないよ。罰があつたのよ」と息もきれぎれに話した。

母が亡くなり遺品整理をしていると、日記が出てきた。

「麻子さんと女同士タッグを組んでたくましく生きて行こうと思つただけけれど……。夫も息子も麻子さんは認めてもわたしは労働力としかみていない。百年まえの農家じゃあるまいし！ 昔わたしが家族経営協定を締結しようと言つたときも、茶化されて終つた。わたしの声に耳を傾け聴いてほしかつただけなのに……」

読み進むうちに哲也は母の孤独を思い涙が出てきた。母の心に溜まつた涙。そのどうしようもない涙を揺らすためのヒステリーだつたのだらうか。お母さんごめん。

哲也の酒量が増えた。健康を心配した澤井がアルバイトを

しないかと誘いに来た。生コンクリート会社のミキサー車の運転らしい。澤井は哲也が運転することで、夜ごとの深酒が直るのではと期待したらしい。

一月で辞めるつもりで出社した哲也だが、昼休みになるとその考えを翻した。

二歳下の従妹の佐和ちゃんが社員食堂で働いていたからだ。佐和ちゃんは子どものころはお転婆だったが、中学生になるころには、綺麗な少女に成長して、哲也を虜にした。

佐和ちゃんの亡くなった夫はコンクリート技師だったらしい。この会社の社員食堂で佐和ちゃんが働いていたとは驚きだ。寡婦になつた佐和ちゃんに、人事課から事務職で働かないかと誘われた。だが父を亡くした子どもたちと少しでも長い時間寄り添いたいと、早く退社できる社員食堂を希望した。子どもたちの夏休みは、実家の母が協力してくれ乗り越え、働き続けた。

哲也は、三時の休みにも食堂に出かけた。美味しいコーヒー豆を持参しては食堂のメンバーと飲んだ。やれ筍がとれた、ウドだよといったは食堂を訪ねた。

そして一度でいいから佐和ちゃんと、デートがしたいと思つた。

その日も哲也は食堂に行こうと外に出て空を仰いだ。浅葱鼠の空が広がっていた。かつて住んだロサンゼルス強い紫外線越しに仰いだ青空と違い、浅葱鼠色の空は六十歳まであと数年の佐和ちゃんを思わせる上品な色合いだ。

佐和ちゃんへの思慕を胸に空を仰いだ翌日、哲也は心筋梗塞で亡くなつた。

## 古井戸

飛行船のようにぼっかり浮かぶ白い雲が、休日の長閑な時間と吸い込まれそうな青い空をのろくさと流れていた。

俺はぬれ縁に腰掛け風呂上がりのビールを飲んでいり。ぼんやりとした、良い一時だ。古い平屋の借家だが小さな庭が付いている。俺は手入れはしないが前の人たちが植えたものがときどき芽吹いてくる。

名も知らない花が咲いたり、紫蘇の葉が繁ってきたり、以前の住人たちが地中に残していったものが忘れた頃に地上に顔を出してくる。それぞれの思いで植えた草花が語りかけてくるようだった。

―もつと良い家に移り住んだのか、家賃も払えず出ていったのか―

家の前の国道を大型車が通る。その度ひどく揺れる。それにもまして常に不平をぶつぶつと口にしながら気忙しく動き回る女房が五分もたないうちに静けさを打ち破る。

「ちっ」と舌打ちをして休日の缶ビールを呷る。時おり足や腕に止まった蚊を叩く。女房は俺を都会人と勘違いして追いかけて来た。地方の人間には東京と首都圏、関東地方の區別がつかないようだ。此処は都内から電車で一時間半はかかり、駅からも遠い。だから家賃も安い。だがこんな所でも都内に通うサラリーマンがちらほらと家を建てはじめていた。

## 相馬 龍久

俺は会社に近いからここに住んでいるだけだ。俺には将来の夢などない。高校中退でトラックの運転手をしている。夢がないからといって悲観しているわけでもない。夢もないがそもそも将来なんて考えもしないから不安もない。ただ次の休みを指折り数えて待つだけだ。

近所に小さな居酒屋ができた。

俺も休み前に一人で飲みに行くこともある。最近引越してきたサラリーマンも飲みにきている。ちよつと話しかけられたが、会社の愚痴とマイホームの自慢話だ。どうやら彼らにとつての将来はローンの残高と定年との兼ね合いで、その先の夢は語らない。どちらにしても考えるだけ無駄だと思つた。何となく時間は過ぎていくし親たちの世代のように戦争もないし大地震も起こっていない。普通に働いていれば何とかなって行く。

ここに住んで女房は初めてサラリーマンという人種を知つたらしい。新築の家に住み毎朝スーツを着たご主人を駅まで送っていく奥様。何を着てもあか抜けている女性。うちの女房でも少しは憧れるらしい。

終いには「あんたも東京の会社に勤めなよ」などと言つた。最後の一杯を無造作に流しこむと、畳の上にあお向けに寝た。薄汚い天井と空が半々に見えた。何人がこの天井のシミ



を俺のように見つめたことだろうか、どんな人生を送っていたのか、脳裏をかすめた。どうでもいい事なのにうつすらと浮かんでくる。

相変わらず薄雲はたなびいていた。

俺はいつしか深い眠りに落ちていった。眠りに落ちる刹那、空を見上げながら深い底なしの古井戸に落ちていくのだ。丸く見上げていた空がだんだん小さくなりやがて点になり消滅するのだ。暗闇の中に沈むころには深い眠りにおちている。

★

どれくらい寝ただろうか。千年の眠りの中にいるような夢心地だったが一瞬の深い眠りだったかもしれない。

嗅いだこともないようなコーヒーの香りが鼻をくすぐっている。それでも俺はまどろみの中を漂っていた。

「パパ！コーヒー入ったわよ！起きなさい」

はるか遠くから聞こえたような気がした。俺は目覚めようとしたが金縛りにあつたように身体も動かさず目を開けることもできなかつた。まだ古井戸の底にいろような閉塞感があり、真上の小さな光を見つげようとしていた。必死に見つけたその光が次第に大きくなり部屋の様子が分かってきた。木のいい匂いも漂い天井が高く、あきらかに新築の家とわかつた。俺はその一角の茶室のような畳の部屋に寝ているのだ。

何とということだ。俺は酔って他人の家に入り込み、寝てしまったのだ。

—さあどうしよう、今まで警察沙汰だけは起こさなかつたのに—

俺は完全に混乱していた。

軽やかな鈴の音がしてドアが開き誰か入ってくる。俺はも

うダメだと思ひ子供の様にタオルケットを被った。

「コーヒー冷めちゃうわよ。早く起きなさい」

その家の奥さんは優しい声で言うと出ていった。その場は何とか耐えたが、逃げるか素直に謝るか、この場をどう切り抜けるか考えた。何も思い浮かばないでタオルケットの中で目を閉じていた。長い間そうしていたようだが数分の事だったと思う。恐る恐るタオルケットを退けて薄目を開ける。その部屋の木の匂いと内装に馴れてきた。突然脱皮するように我に戻った。

「此処は私の家じゃないか！」

想念と身体が完全に一致した。

私は昼のうたた寝の一瞬まったく別の人生を生きていたのだ。それにしても生々しい夢だった。いや夢というより入れ替わりのようだった。

「ママ！ごめん今いくよ」

「はやくいらっしやい」  
明るい妻の音が帰ってきた。

★

私は人より多く夢を見るほうだ。しかも覚えている。自分の見た夢をいろいろと分類もできる。しかしどの夢も自分に関連したことやどんなに変形していようと自分の目線があつた。しかしあの夢だけは違つた。全くあの男になりきつていた。もしかしたら現実にとどこかに生きていてあの男の人生を覗き見したのかと思うほどである。

数年たつても旅先で知りあつた人のように何かの拍子に心に浮かんでくる。今どうしているのか？もしかしたらあの男もどこかで現実に暮らしているのではないか、いやそんな馬

鹿な、あれはただの夢だ。そう自分に言い聞かせていた。あの夢で寝るときに見た古井戸に落ちていく情景は私もたまに見る。唯一の共通点のようだ。眠りに落ちていく刹那見る情景だ。

時おり思い出すあの男と借家の風景。彼は別の世界で生きている自分ではないかと思うことがある。あるいは自分の未来か。

ある日目覚めたらシミだらけの天井が見える。

「父ちゃん邪魔だよ、はやく起きな！」

洗濯物を抱えた女房に舌打ちをされながら身体を跨がれているかもしれない。

心地よい風にのって漂うコーヒーの残り香を懐かしんでいるだろう。美しく優しい妻、洒落た新築のマイホーム。全て夢だったのだ・・・

私はそんな事にならないように想像の古井戸に蓋をして覗き込むことさえしない。古井戸に背を向け青空を見つめよう。そうしたらふわりと身体が宙に浮き、能天気な綿雲の上にも寝ている夢が見られるかもしれない。

マイホームのローンが終わり定年退職したらのんびり暮らせるだろう。親たちの年代はあの大戦争があり大変だったが、その後この日本では大したことも起こらず経済はよくなる一方だ。関東大震災のような地震が来ると言われているけど結局何も起こっていない。東西冷戦も終わり核戦争の危機もなくなった。株価と地価も上がり続けている。あとは癌の特効薬でも出来れば世の中に心配事などない。

世は平成となり希望に満ち溢れているのだから。

## 谷中を捜す

森羅一

諭に埋まって見えなかつた谷中村と足尾鉍毒事件\*1と2の形跡を捜す。(以下谷中で表記) 筆名逸見猶吉を調べていた時に、猶吉の語彙の中に凶の語彙が潜んでいることを感じた。凶は逸見にとって基体であると確信し、作品の中に凶の語彙と谷中を連想させる詩行を拾い出してみた。



▲旧谷中村役場跡(旧大野家)を訪れた逸見の妹(三宅・永井)の二人。この日、堤防外にある詩碑と母みきの生家も訪問した。

(昭和62年)

凶く兇く兇の字の表記について。

凶の字をチェックしたのは筆名の探求の過程で猶吉の吉の反対に当たる凶に行き当たったためである。つまり、「猶予

狐疑」と言う故事から猶吉を読むと吉に躊躇うと言うことになり、吉の反対は凶となり、更に進めれば、逸見は吉・凶を躊躇っていたことになる。凶とは何か。字義は悪である。逸見は自分を悪と言う意識を持っていたのではないか。それは父祖との宿縁、大野家、谷中、出生に繋がっているが、吉は善でありたいと願う。猶吉にはこのような屈折した思いが潜んでいたのではと、言うのが推論の要旨である。

作品の中の凶く兇く兇を拾いながら、詩篇の中に原罪や贖罪(謝罪)の詩句があるか確認する。

1 「兇牙利的」タイトルの「凶と牙」。「兇牙利的」は詩篇の三か所にあるオレなのだろうか。この他「兇牙利」単独で一個。ハンガリーは漢字で洪牙利と書くが洪を兇にしたのは逸見の卓抜な造語センスであろう。これをハンガリーと読むかキョウガリーと読むか、いずれにしても凶は悪、牙は害すると言うイメージがある。

2 「厲シイ天幕」後半「雷ニ撃タレタ兇牙利ノ 水のような跳梁」も兇牙利的の中にあるオレなのだろうか。

3 「火ヲ享ケル」冒頭「贖罪の館」、中程「黒イ耕地」、後半「磔木ノ荒クレタ影ノ裡 諸々の凶ナル種子ヲフリ撒カフ」。頭から読むと「謝罪」、「禍々しき耕地」、※磔木ははりつけの木。そのまま読めば十字架に悪の種子を撒こう、になる。しかし、

この十字架は己自身であり、謝罪を自らに付そうと言うことになる。語彙とタイトルを並べると自らの負の宿命＝謝罪によって火を受けると言う風に読み取れる。禍々しき耕地は谷中と読める。

4 「冬ノ吃水」一章後半「兎牙利非情ノマン中ノ誰ダ 喇叭ヲ吹キナラス誰ダ」は俺と俺の中の他者の存在を書いているのか。

5 「ナマ」冒頭「十字架に爛れた生をつき放さうとするのだ」は負の宿命を償う身を連想する。二章冒頭「原罪の遅い映像にうち貫かれた両の眼に」は累代の負の宿縁を自らも意識の中で負い、清浄には戻れないと述懐する。この作品は累代の宿縁である負とのダイヤログであろう。

この作品は詩集全体を貫く、逸見自体の宿縁を表すメッセージを持っていないかと思つた。「ベエリング」や「ウルトラマリン三部作」が逸見詩の修辭法によるものだとすれば、「ナマ」は書いている本人の基体であるのではないかと思つた。

6 「燼」三章冒頭「黒三稜の重なる沼沢に漬つた凶時よ、この青春時。」これは谷中の数度にわたる洪水を予想させる。ただ、青春時があるので谷中村争議と逸見との関連が掴みにくくなっている。

7 「手」後半「虫をまいたやうに凶はしい」の凶は呪わしいと読める。

8 「牙のある肖像」一章冒頭「苦い移住を告げて」は明治三八年～四四年に行われた県内（近隣、県北）や北海道への移住施策を想起することができる。後半「野生の卓に水が流れる」は前記と同じく洪水を予想させる。二章冒頭「諸々の

狭隘な傲りを押し破つた水。季節の免れた水の氾濫！ それこそ兎なる星辰の頰れだ」谷中の洪水と宿縁が読み取れる。二章中程「北方路線」は北海道移住。三章前半「十字を投げるだらうか」は贖罪（謝罪あるいは原罪）を予想させる。三章中程「ふりかかる兎なる光暉の羽搏きに」はふりかかる悪しきものと読める。

この作品にはもう一つ難解な設定がある。それは『詩と詩論』の発表時にタイトルの左にロートレアモンと言葉が献辞されていることである。内容は逸見の父祖とも読めるフレーズである。牙、肖像、父祖とロートレアモンの「加害の文学」がどのように関連するのかわからない。課題である。

9 「兎行」冒頭「兎々たる交感の裡に織り込まれてゆくのか。旧くまた新しく、」はつねに兎行の果されて来たこの河上には過去、現在にわたって行われてきた悪しきこと。※兎はハンガリーの略。兎がハンガリーだとすると交感を読み解けず、兎を兎牙利に置き換えると同じように（凶）は悪しきもの、（牙）は害するものとなり、悪しく害するものとの交感となる。

10 「無題」後半「凶しやけふも死いろの悔みの深ければ」「禍々しい」と「悔い」には懺悔の思いが読み取れる。の作品は「歷程」創刊後、一時頓挫の頃に書かれている。

11 「群」（未収録）冒頭「ワルク臭フ水ガシダイニ浸シテ」は鉍毒をイメージできる。

12 「終ノ斷章」（未収録）冒頭「兎牙利青ノ寒流」とあるが、この凶は青と対句なのか不明。

13 「童話・火を喰つた鴉」（未収録）のテーマ「加害と自浄」も谷中と謝罪の念が繋がっていると読める。よく考えると鴉を分解すると牙と鳥で、害する鳥は即ち己と読める。ポー、

ゴッホの鴉も重なる。逸見はこれらも喩にしたのだろうかと勘繰ってしまふ。

14 「無題」（未収録）冒頭「サン・ジャック」（巡礼の意）、後半「あらがねにおののきたり」。初めの「巡礼」と後の「あらがね」から戦争を前にした精神の巡礼と読める。これを謝罪の旅に繋げるのは少し飛躍すぎか。

対象にした作品四二篇（定本詩集と未収録）の内、十四篇に凶と谷中に類する詩行が確認された。これらが全て谷中に繋がっているか不明だが、大部分は谷中に根ざした思念であると私は推測する。

\*1 足尾鉍毒事件・足尾銅山より流出する鉍毒によって被害を受けた農民及び鉍山労働者が、その保障問題などで政府に請願運動を起こし、特に明治二十年以降、大きな社会問題にまで進展した事件。衆議院議員田中正造はこれを積極的に支援し、天皇への直訴にまで及んだほか、鉍毒問題等に関連して明治四十年及び大正八年、十年に鉍山労働者の大争議があった。

\*2 谷中村、栃木県下都賀郡谷中村（明治二二年、下宮、内野、恵下野が合併し村となった。現、栃木市、藤岡町）明治二三、二九、三一、三五年の水害により、渡良瀬川沿岸は被害を受け、抗議運動が起こり、社会問題となる。明治三九年、隣接する町村や県北、県外の北海道に移住を余儀なくされた。藤岡町に合併され廃村となった。



# 慈悲・慈愛に満ちた博愛の詩人

## —金子みすゞの詩を読んで—

宇賀神 忍

金子みすゞの詩は、優しく・温かくて・美しい。時には切なくて・哀しくて・痛々しい詩もあるが、常に私達の心を温めてくれ・癒してくれ・励ましてくれる。金子みすゞの詩は、小さいもの・弱いもの・無用と思われるものにも心を寄せ、そのもの達の喜びや哀しみを優しく掬い取り、「みんなちがって、みんないい」と励ましのエールを贈るのである。

金子みすゞは、この世にあるものは総て神様や仏様のおほしめしで存在しており、この世の森羅万象には、神仏の意志が通底し宿っている故に「この世に存在するものは、一木一草総てが、かけがえの無いものであり・大切なものである」と私達に示唆してくれているのである。

こつつんこつつん／打たれる土は／よい畑になって／よい麦生むよ。／朝から晩まで／踏まれる土は／よい路になって／車を通すよ。／打たれぬ土は／踏まれぬ土は／要らない土か／いいえそれは／名のない草の／お宿をするよ。

(土)

金子みすゞは、土一つ・石一つにも不用なものはないと言う。土は、田や畑として作物を育て育むし、道路や宅地としても人間の役に立っている。それ以外の無用と思われる土で

さえ、雑草にとつては命を育んでくれる大切な役目を果しているのだから決して無用な存在ではないと金子みすゞは言う。

金子みすゞは、世の中の常識や習性から脱却して、子供の様な眼で人の世の営みや自然を見つめ、この世にあるものは、互いに助け合い補い合いながら共生共存して行くべきで、自己中心的な価値観で、自分と違うもの・異質なものを疎外したり拒絶したりしてはいけないと諭すのである。

私が手をひろげても／お空はちつとも飛べないが、／飛べる小鳥は私のように、／地面を速く走れない。／私がからだをゆすつても、／きれいな音は出ないけど、／あの鳴る鈴は私のように、／たくさん歌は知らないよ。／（鈴と、小鳥と、それから私／みんなちがって／みんないい。

(私と小鳥と鈴と)

この世に存在するもの・生きとし生けるものは、一つとして全く同じと言うものは無い。ものみなそれぞれに特性があり、個性がある。長所もあれば短所もあり、得手不得手もある。金子みすゞは、この世に存在するものは互いに対立し合うものではなく、互いに仲間として同朋として互いに認め合い

補い合つて一みんなちがつて、みんないい。一と手を繋ぎ合い共存し合つて生きて行くべきだと私達を論じてくれているのである。

もし、今地球上に生きている人総てが、金子みすゞの様な考えを持つ事ができたら、この地上からいじめやいさかいは無くなるだろうし、宗教や民族等の違いから起こるテロや戦争も無くなり、世界中の人々が平和に安穩に暮す事ができるのではあるまいか。

人類の一人一人が、互いの違いを認め合い、長所を敬い短所や欠点を補い、許し合い敬愛し合う様になれば、この世はもつと明るく平穩になり、ずいぶんと住み良く暮し安くなるのではあるまいか。その意味でも金子みすゞの「みんなちがつて、みんないい」と言う思想は、現代の今こそ重く受け取らねばならぬ思想なのではあるまいか。

#### 内部に潜む本質を見極める眼力

我々凡人は、ともすると人を見る場合でも物を見る場合でも表面だけ・眼に見える部分だけで判断しがちである。顔つきだけを見て、あの人は優しそうだとか、意地悪そうだとか、頭が良さそうだとか判断したり、外見や肩書きだけで、お金持ちらしいとか下品だとか判断しがちである。

とかく人間は、表面的なもの・眼に見えるものだけで人や事物を判断し、そのものの内側にあるもの・本質的なものを認知できずに見逃しがちである。ところが金子みすゞは、私達が気づかないもの・私達には見えないものをしっかりと観得して、そのものの本質をしっかりと捕えて我々に提示して

くれるのである。金子みすゞは、見えないけれども確実に存在するものを捕えて、そのものの価値や本質を私達に教えてくれる。そうして物事は、見えないものの中にこそ本質的なもの・大切なもの・かけがえのないものが存在している事を示唆してくれるのである。

青いお空の底ふかく、／海の小石のそのように、／夜がくるまで沈んでる、／昼のお星は眼に見えぬ。／見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ。／散つてすがれたたんぼぼの、／瓦のすきに、だあまって／春のくるまでかくれてる、／つよいその根は眼に見えぬ。／見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ。

(星とたんぼぼ)

夜紺碧の空にダイヤモンドの様に燦然と光り輝やく星々も、昼間は、海の底の小石の様に空の奥深くに身を潜めて隠れていて私達には見えないが、本当は昼間でも星はちゃんと存在していて、夜が来たらよりいっそう美しい光を放つて地上の人々に美しい夢を見てもらおうと、しっかりと準備をして待っているのだし、冬枯れのタンポポの根だつて決して枯れたりほしないで、冬の寒さにじつと耐えながら、春になったら美しい花々を咲かせようと地面の下で一生懸命がんばっているのだと、金子みすゞは、私達が気づかず見過しているものを具体的に気づかせてくれるのである。

確かに私達は、この世にあつて肝心なもの・大切なもの・心の支えになる様なものを、私達は気づかず見過してしまふ事が多い様である。然しそういうものは、厳然としてこの世

に存在していて、私達に光を与え、生活を支え・生きる喜びや希望を与えてくれる宝物なのである。

戦後日本人は、拜金主義・拜物主義に陥って人間にとつて大切なもの・心の支えとなるものを見落して来てしまった結果、かつて日本人が持っていた謙虚さや思いやり・優しさや情愛・連帯感や他者を敬う心を失い、なにかぎすぎすとして殺伐とした世の中を築いてしまった様である。

私達は、もうこれ以上物質的には豊かにならなくとも良いから、みずぶの言う様に眼には見えないけれども、私達の心を癒し、生きる喜びや楽しみを与えてくれるもの・心を満たし元気づけてくれる精神的なものを大切にしながら、悠然と心豊かに暮して行きたいものである。

### 慈悲の眼・慈愛の眼

朝やけ小やけだ／大漁だ／大ばいわしの／大漁だ。へはまは祭りの／ようだけど／海の中では何万の／いわしのとむらい／するだろう。

(大漁)

この詩は、金子みずぶの代表作です。本当に金子みずぶの慈悲・慈愛の心が溢れ出た詩である。港では、漁師達が「大漁だ。大漁だ。」とお祭り騒ぎで喜んでいきます。漁師達は、自分の世界しか見えません。自分達の損得しか考えていないのです。ところが、みずぶは違います。大漁に湧き返っている人間世界だけではなく、漁師達の誰もが気づかない・見ようとしなない海の世界を凝視しているのです。そうして海の奥

深くで、親や兄弟や隣人を失って嘆き哀しんでいるおおば鯛達の悲しい心を・やるせない思いに心を寄せ共感し、共に涙を流すのです。この優しさ・慈悲慈愛に誰もが心打たれるのではないでしょうか。

みずぶは、利己主義者でも人間中心者でもなく博愛主義者なのです。みずぶは、仏様の様な温雅な心で花や魚や草達を見つめ、人間と同じ様に慈しみの心を注ぐのです。

金子みずぶは、この世に在るものは総て神仏のおぼしめしで存在しており、仏性が宿っていると考えていたが故に、おおば鯛達にも優しく温かい眼を向ける事ができ、彼等の哀しみを自分の悲しみとして共に涙を流す事ができたのです。

### この世の物総てに仏性が

金子みずぶが生まれ育った仙崎と言う所は、浄土真宗が盛んな土地柄で、おおばちゃんも人一倍信仰心の厚い人だった様である。みずぶも幼い頃から自然と宗教心を育み、思いやりの心や慈悲の心を培っていった様である。

次にみずぶが、仏教に帰依し、この世にある物は総て神や仏によって生かされており、総てのものには仏性が宿っているという思想を鮮明に謳い上げた詩を味わってみよう。

はちはお花のなかに、／お花はお庭のなかに、／お庭は土べいのなかに、／土べいは町のなかに、町は日本のなかに／日本は世界のなかに、／世界は神さまのなかに。～(そうして、そうして、神さまは、／小ぢやなはちのなかに。

(はちと神さま)



## 大なる災難

大野比呂志

一瞬、目を疑った。ノートルダム大聖堂が火に包まれていた。初めは、何かの間違いで模型の寺院に火が点いてしまったのだろうかと思っただ。が、テレビを見ているうちに、本物のノートルダム大聖堂が燃えているとわかったとき、持っていたボールペンを落としそうになった。

飢えた悪魔の赤い舌とも見える炎が、執拗に尖塔に巻きついている。次の瞬間、傾き始めた高さ九六メートルのその塔が、炎の中に落下したのだ。夜空に映し出される地獄絵を見るようであった。二〇一九年四月十六日(現地では十五日)の夜のテレビであった。

翌日の新聞やテレビは、衝撃の大きさを大々的に報じていた。起り得ないと信じてきたことが裏切られたという敗北感ともとれるパリ市民の顔をアップで写している。化粧が剥落するものおかまいなしに大粒の涙を流すご婦人も、報道のターゲットになっていた。

カメラを向けられた男性は、  
「こんな惨状にことばも出ません」  
と、声を引きつけていた。

燃えさかる大聖堂を見つめる群衆の上には、重い喪失感のベールが覆いかぶさっているように見えた。キリスト教の長い歴史にまつわる美術品や遺品は急ぎよ。パリ市庁舎に運ばれ

たという。

わたしが最初にノートルダム大聖堂を訪れたのは三十年も前であった。海外の教育事情の視察研修で東ドイツ、スイスと周って、アメリカに飛ぶ前日、フランスに立ち寄ったのだ。

通訳から「ノートルダム大聖堂はバックシャン」だと訊かされていた。後ろから見た姿が美しいということである。そこで数人でセーヌ川に沿って後ろへ回って見上げた。貴婦人の異名をほしいままにしている寺院だけあって、ドレスを優雅に靡かせているその姿に見入ったのを覚えている。凶鑑や旅行のガイドブックでは決して観ることのできない見事な姿に、感動を口に合ったものだ。

東側には店が立ち並び、そこで寺院のスケッチを買ったり、喫茶店でその娘さんと写真を撮ったりしたことが、臉の裏にしっかりと焼きついている。

早くも、修復のために寄付を申し出る富豪があらわれているらしい。失ってみて初めて意識される宝もあるのかもしれないが、前から認められている宝もある。ノートルダム大聖堂は後のほうだろう。

世界の文化遺産といえども天災人災の難から逃れられる免罪符を付与されているわけではない。災難は現実起こりう



るということを確認しなければならぬ。苦い記憶は、他にもあった。

多分、旅行会社が調べたのだろうが、外国旅行をした人たちに、「再び訪れたいところは？」と問うたところ、かなりの人が「ルッツェルン」と答えたらしい。ルッツェルンには、屋根のある美しい橋がある。カペル橋である。屋根にはルッツェルンを守ったという物語のパネルが百数十枚取り付けられていた。わたしも、同行の仲間たちと何度となく行き来してはパネルを眺めたものだった。

言い易いのでルッツェルン湖と言っているが、フィーアーパルト・シュテッターゼーが正しいらしい。ワグナーはこの地を愛しく訪れていたのだろう。ワグナーが歴史のパネルを見ながら散策を楽しんだことは容易に想像できる。湖畔にはワグナーの記念館が建っていた。

ルッツェルンにはベートーベンも訪れていたという。もしかしたら、「月光の曲」の曲想を練りながらカペル橋を行き来していたかもしれない。

とにかく、ルッツェルンのカペル橋は、これまで見てきた橋の中で最も美しいという印象は、今もかわらない。

帰国後、そのカペル橋が消失したというニュースがテレビに流れた。それを見たときは、懐かしい思い出が消されてしまったような悲しい気持ちでいっぱいになった。

悪いことは続いた。デンマークの人魚姫の像が、何者かによつて頭部を切り落とされたというニュースが流れた。

デンマークの人たちにとって、アンデルセンの人魚姫の童話をどれほど愛し、誇りに思っていたか改めて口にするこ

ではない。国の宝そのものだったろう。

予期しない事件に、デンマークの人たちの嘆き悲しみはどれほどであったろう。世界じゅうの子どもたちが母親に読んでもらい、また自分で読んで胸ときめかしたはずである。蛮行を犯した者として、子どもたちの母親から人魚姫のお話を聞いたことはあつただろうに……。

価値ある文化遺産の破壊や焼失への嘆きや悲しみが大きければ大きいほど、復旧再建へ向けた大きなエネルギーを生みだすに違いない。

カペル橋も人魚姫の像も、数年後にはもどおりの姿を甦らせた。ノートルダム大聖堂も、いずれの日にかセーヌ川のほとりに優美な姿を燦然と輝かせることだろう。是非そうなってほしい。パリ市民ばかりでなく世界じゅうの多くの人たちが願っていることだろう。

フランスには、願いを叶えてくれると信じられている石のフクロウが街角にあるという。邪悪なサラマンダーは、そうさせじと監視の目をフクロウに向けているとか……。

サラマンダーに願いが喰われぬように用心しながら、石造のフクロウを撫でてお祈りするパリ市民は、後を絶たないに違いない。おそらくは、自分の願いを後まわしにしても……。

日本においても、戦乱や地震などによつて国宝が焼失したり倒壊したりした衝撃の事例はたくさんある。

大事なものが失われても平気でない寒々とした時代には、どんなことがあつても逆戻りしないほしい。

# 花嫁の父

小島 延介

今朝の新聞（二〇二二年六月十六日）を広げて、何か楽しいテレビ番組はないかと探していたら、昔懐かしいアメリカ映画に目が止まった。スペンサー・トレイシーとエリザベス・テイラー主演の『花嫁の父』だった。あの頃は娯楽と言っても映画ぐらいしかなかったし、土曜日は半ドンだから、仕事や授業を終えると映画館へ直行しては、スケールの大きい西部劇などを楽しんでいた。そんななかの『花嫁の父』だった。私は社会人一年生になったばかりで、娘を嫁がせる父親の心情などわかるはずもなく、ただホリの深いエリザベス・テイラーの美貌に見惚れていた。

今日は観客が一人だけのお茶の間映画館。私はコーヒートを淹れ、チャンネルをBS3に合わせて、六十年前の断片でも浮かび上がるだろうかと、ひそかに記憶のよみがえるのを期待した。

しかし、期待はずれた。開けてみれば、より滑稽な事態に見舞われていたのだ。

親しい友人たちとこじんまりに独身最後のひとときを過ごしたい娘と、自分の仕事の関係者まで招待して盛大に祝おうとする父との意見が割れたままひと騒ぎして、両親と酔った関係者を残してハネムーンに出かけてしまった。

その頃、私にも年頃の娘がいたので、この情景は他人事ではなかった。

結婚式は娘が中学校に勤めていたときだったが、授業が終わると担任の生徒ほぼ全員が「先生おめでとうございませう」と花を一本ずつ持って披露宴に駆けつけてくれた。生徒たちが秘密裏に進めてきたハプニングで、感激的なワンシーンとなった。

映画は招待客も帰って、急にガランとなった部屋に、娘からの電話が鳴った。「パパ大好きよ」

その瞬間、父の眼から涙があふれた。それは私にもストレートに伝わってきたが、不思議と目が潤むことはなかった。

娘の結婚から五年が経って、息子のそれは、真夏の暑さを避けて日光のホテルで行なった。

式は東照宮で、「眠り猫」の下をくぐって神前に向かうときに、観光客から「おめでどうございます」と声を掛けられ、新郎新婦ともに笑顔で応えた。披露宴も滞りなく進んだ。娘のときは緊張のあまり涙も出なかったもので、今度も大丈夫だろうと高をくくって安心していた。最後の挨拶のとき、この日のために新婦の母が手縫いで仕立て上げたドレスの話に触れると、感涙に詰まった。

「花嫁の父」には涙が出ないで、「花婿の父」ではこみ上げた。どうしてだろうと考えたら答えはすぐに見つかった。娘は近くに住んでいるのに、息子は高校卒業してすぐに親元を離れて東京の大学に行き、今も茅ヶ崎に住んで東京で働いている。やっぱり親子といえども近くに住んでしょっちゅう顔を会わせないとDNAだって薄くなる。

そのことを教えてくれた真夏の挙式だった。

# 家に帰りた

松林 厚子

九十二歳の母が施設に入所した。九十歳を過ぎても足腰が丈夫で、老人用カートを押しながら、歩いて十分ほどのコープで買い物するのが日課だった。

一昨年冬の冬、コープの職員から電話があった。母が買い物済ませたものの、疲れて帰れなくなったので迎えに来てくください、というのだ。体調でも崩したのかと、慌てて車を出すと、店先で不安そうに立ち尽くす母の姿があった。

それ以降、母は買い物に行かなくなつた。今思い返すと、帰り道が分からなくなつてしまったのだろう。

「だんだんバカになつていく。情けないよ」

と呟くことが増えた。私は、九十年も生きているのだから仕方ないよ、と笑つていた。

昨年の春。

「今日は、何月何日なの？」

と繰り返すようになった。五分おきに尋ねるので、いったいどうしたのかと、腹が立った。

もの忘れが続いた。

「お母さん、また火をつけっぱなしにしたね」

と黒焦げになつた鍋を見せても、

「ああ、そうだったかねえ」

と他人事のようだ。目を合わせないのは、失敗した、と後

悔しているよりも、鍋を焦がしたこと自体を覚えていないのかな、と感じた。

ケアマネージャーに相談すると、介護認定を受けるように助言された。医師の診断書が必要だと聞き、母を病院に連れて行った。検査の結果は物忘れに加えて幻視、幻覚があることからレビー小体型の入つたアルツハイマー型認知症だと診断された。介護認定の結果は「要介護一」。母は週三回のデイサービスに通い始めた。

母は少しずつできないことが増えた。時間の感覚がなくなり、足が弱つてきた。部屋に食事を届けると、それが朝食なのか夕食なのか、わからない。放つておくと一日中パジャマで過ごすこともあった。祖父母はとうに亡くなつていて、  
「おじいちゃん、おばあちゃんを食事に誘うから、車を出してちょうだい」

と母は、バッグをもつて立ち上がった。七回忌の済んだ父がそこにいると、壁を指さすこともあった。

「お父さんがここにいるの？」

と念を押すと、

「いるじゃない。アツ子ちゃんの後ろに。見えないの？」

真顔で言われて、幻視だとはわかつていても怖くなつた。

今年の春、母は起き上がることが出来ず、食事をほとんど

とらなくなつた。トイレにも間に合わず、紙おむつをすると、「気持ち悪いんだよ。こんなものなくても大丈夫だからさ」とはずしてしまふ。ここにこ笑っている母の隣で、私は過呼吸になりそうになり、腰も痛めた。このままでは共倒れになる、と母の施設入所を考えるようになった。

母は、六十歳を過ぎた時、自由を求めて離婚をした。本人の求める生活を数年間満喫したものの、家族に囲まれていた頃の生活が恋しくなり、末っ子である私の家に同居するようになった。母は娘夫婦と四人の孫たちとの暮らしになつて、遠慮することもあつただろうが趣味の山登りや、写経など、快適に生活しているように見えた。私は母とは最期まで一緒に生活すると信じていたが、そういうわけにはいけなくなつてきた。

まずは、老人保健施設に入れては、とケアマネージャーに勧められ、二か所見学に行つた。家から近い方に決めたのは、面会に行きやすいからだ。

施設に入つて、一度目の面会の時。拍子抜けするほど、母は落ち着いていた。その二週間後の面会日。母の顔色は良く、足取りも以前よりしっかりしていた。母はアクリル板の近くまで歩いてきた。

「ねえ、いつまでここにいななくちゃいけないの」

「自由に外出もできない、外の空気も吸えない。花も見えないのよ」

「家族の気配の中で暮らせることがどんなにありがたいことなのか、身にしみるわ」

「帰りたい。帰りたいよお」

母は思いのたけを訴えて号泣した。

「アツ子ちゃんがいれば、私は家で暮らせるのよ」

一五分に決められた面会時間を途中で繰り上げて私は席を立つた。母の言葉に、体を縛られたような気がした。私の生活を楽しんでいた母を入所させていいのかと葛藤に苦しんだ挙句だったのにと、うつむいて玄関に向かつていくと、見知らぬ女性が、「わかりますよ。お辛いですね」

とそつと私の肩に手を置いた。私は、暗い目のまま頷いた。



# 涙が滲んでくる歌

大出

京子<sup>たかこ</sup>

子供のころ、「月の砂漠」という歌が大好きだった。

ところが、最初のフレーズを歌い始めると、なぜか寂しくなつて周りがぼやけてくる。訳が分からないまま、ひと前で歌うことは避けていた。合唱に不向きな歌だったのだから、大勢で歌った覚えもない。いつも独りで、呟くように口ずさんでいた気がする。

「月の砂漠をはるばると旅の駱駝がゆきました

この最初のフレーズで、早くも胸が痛くなる。

「金と銀との鞍置いて二つ並んでゆきました

人影のない広い砂漠をゆく二頭の駱駝。月の光に浮かび上がる砂漠は静かで、ひたすら広い。駱駝に乗った二人は、おそろいの白い上着を着ているとある。

砂漠に行ったこともないのに、その情景が、ありありと見えてくる。(砂漠って、どこなの?) などと考えることもなく、ただただ、ロマンに浸って歌っていた。もつとも、砂漠が何処であろうと関係がない。哀調を帯びた、好きなメロディと歌詞に惹かれて、歌っていたに過ぎないのだから。

改めて、砂漠って何処だろうと、関心を持ったのは、子育ての時期が過ぎ、心にゆとりが生まれた四十代になってからだった。

あるとき、私が所属する生け花の流派の機関誌の編集長・H先生に、千葉県御宿のご自宅にその雑誌のレポーター三人がお招き頂いた。洋画家であるだけに、お住まいは独創的で、私たちは驚いてばかりいた。

その一つが天井一面ガラス張りの、広いバスルームだった。星空を見上げながらの入浴は趣があった。が、少々怖かった。浴室のすぐ横は林で、大きな枝がガラスに覆い被さるよう伸びてきていたからだ。正直、(誰か、枝葉の間から覗いていないだろうか)と、落ち着けなかった。

このバスルーム、ある雑誌に取材記事が載ったとか。今から四十年前では、さぞかし、珍しくて、斬新なバスルームだったことだったろうと頷けた。

翌朝、先生と御宿の浜辺を散策した。しばらく歩いたところ、

「これ、『月の砂漠』の像です」

と、先生が立ち止まられた。

御宿の浜辺がこの歌の誕生につながる場所であることを知ったのはあの時だった。

興味津々の私たちに、  
「月はそこにありますよ」と、説明を続けられた。

月は半分ほど砂に埋もれて、足元にあった。何で作られていたか、材料までは覚えていない。空に浮かぶ月ではなく、砂まみれの月とは……。何とも妙な気分だった。

日頃、この歌の「砂漠」の文字を気にすることなく歌っていた。ところが、あるとき、「沙漠」と書いてあるプリントに出会った。調べて、「砂漠」と「沙漠」は違うことが解った。

「砂漠」は砂浜のことで、「月の砂漠」の「砂漠」は海岸沿いの砂浜とのこと。つまり、「月の砂漠」の王子さまと王女さまの二人は、ガラリア湖の砂浜を進んで行くのだとあった。どうしてこの歌が、子供の頃の私の涙を誘ったのだろう。

先のくらは王子さま  
あとのくらはお姫さま  
乗った二人はおそろいの  
白い上着を着てました

おそらく、歌のなかのこの情景が、私の涙を誘ったのだろう。小さい頃の私には、「王子様お姫様」に憧れる向きがあったからだ。太平洋の荒波の音を耳にしながら浜辺に行くのでは、ロマンは感じられない。湖のほとりだったら納得できる。

この歌の作詞者は、画家で詩人の「加藤まさを」、作曲は「佐々木すぐる」。現在の講談社発行の「少女倶楽部」の前身の雑誌に発表されたであった。（大正12年3月号）。

歌の背景がわかって、可笑しくなった。昭和生まれの私が、

大正ロマンに涙した……。ということだ。今はこの歌を口ずさんでも涙は一粒も流れない。涙しながら口ずさんでいたあの日が遠くなったと振り返るだけである。

H先生はいまもお元気に美術面でご活躍と聞く。

何年前か、階段の上から大量の塩を流した先生のお宅の写真が、某雑誌に掲載されていた。あのキッチンにあった階段に違いない。余計なことだが、さぞかし、あとの掃除が大変だったろうと、気になった。

昭和、平成、令和。三世代を生きてきた。人類が初めて月に降り立った日も、だいぶ昔のような気がする。科学が進み過ぎ、「月の砂漠」を口ずさんでも涙が滲んでこない。

寂しさを胸の痛い思いを味わいながら口ずさんでいた「月の砂漠」は、はるか遠い思い出の歌になってしまった。

御宿に「月の砂漠記念館」があるという。幼い私が思い描いていた砂漠の風景は、どのように再現されているのだろうか。訪ねてみたい。

# 蝶の綾取り

小林 博

涼しい午前中に、実家の土手やあぜ道の草刈りを片付けようと取りかかった。

早朝から、熱中症アラートが出る暑さ、汗でぐっしより、大きな切り株をテール代わりに、ぼんやりコーヒーを飲んでいたら、目の前の放棄畑のヒメジョオンに蝶が飛び回っている。

紋白蝶らしい二頭が、互いに追い回すようにクルクルと、上になったり下になったりしながら、中空に浮かび上がるのが目に映った。

先日の新聞のコラム欄に「まじしちもんひんしやう卍巴飛翔」という蝶らしからぬ飛び方の名前が載っていた。

「卍、巴」なんてプロレスや柔道の決め技、蝶には蝶の優雅な呼び名があってもいいと思いつながら、気にかかっていた。

これまでは目もくれなかつたのに、レジ袋でさえ風に舞い上がると、蝶が飛んできたときと見間違えてしまう。

今日は蝶の図鑑を片手に実物と名前を照らし合わせ、目の前に飛んでくる蝶をしげしげと眺めては、にわか蝶マニアに成った積りで悦に入っている。

「卍巴飛翔」を手掛かりに蝶の解説書を探したら、『武器を持たないチョウの戦い方』という書籍にたどり着いた。

私は爪や牙などの武器を持たない蝶が、どういったやり方

で縄張りを守るのか、という点に興味を持ったが、この本の著者は、「卍巴飛翔」は「縄張り争いではなく汎求愛行動説」をと考え、実地に丹念に調べ上げて論文化し、「日本動物行動学会賞」を受賞している。

面白いことに、雄が待ち構えている目の前を他の蝶が横切ると、同性ならば追いかけても二〜三秒で止めてしまう。雌ならば執拗に追いかける。どうやら蝶は近眼らしい。

このことから、「卍巴飛翔」は汎く求愛行動だと言う。私は二頭の蝶がクルクル戯れながら舞い上がるので、「蝶が綾取り」をしているようにも見えた。

隣家の山椒が境界を越えて我が家の庭にはびこるので、草むしりのたびに妻が棘を怖がる。その都度こっそり、枝を払っている。

今日も枝を切り落そうと、怖々棘を避けて鋏をむけると、揚羽蝶が留まっついていて動かない。私は卵を産み付けているのだと直感した。急ぎよ、カメラに収めることもできた。

よく見ると、山椒の葉が葉脈を残して虫に食べられた跡がある。揚羽蝶と黒揚羽蝶は棘のある山椒やかたち、柚子、金柑の柑橘類の葉に卵を産み付けて棘に外敵の侵入を防いでもらう。卵が孵ったときには、幼虫がすぐに餌が食べられる

ように配慮し、子孫に対する気持ちが涙ぐましい。黄揚羽蝶は人參、セリ、パセリに卵を産み付ける。ことによると、燐家の山椒の葉にはすでに、揚羽蝶の卵が産み付けていて、すんでのところで、隣家の山椒を無断で剪定するところだった。

柚子や金柑など柑橘類の葉を食い荒らすのは「柚子坊」という揚羽蝶の幼虫で、俳句の秋の季語にもなっている。

柚子坊を入れ込んで一句したためようと、散歩の途中、他所の柚子の葉が虫食いだらけなので、垣根越しに覗いていたら不審がられたので、事の次第を告げて許しを請うと、吹き出されてしまった。

アサギマダラは秋の七草の藤袴ふじばかまにも飛来すると聞き、他人の放棄畑を無断で花壇にし、春先に藤袴とキャベツなど野菜の苗を植えた。

キャベツは球になる前に、紋白蝶にすっかり食べ尽くされてしまった。ほかの野菜の苗には寄り付かない。蝶は偏光眼鏡をかけているのか、好みの草木に間違いなく飛んで来る

今、我が家の庭を訪れているのはツマガゴロヒヨウモンで、ダリヤとマリーゴールドの花に留まって蜜を吸っている。

驚いたことに、動物や昆虫類は雄が雌より派手なのに、この蝶は逆で、雄は名前のとおり茶色のひょう柄で地味、雌は豹柄でも、翅には黒い縁取りがあつて白い紋入り、裏側には赤い模様まで入っていて派手だ。

時おり黒揚羽蝶が飛んで来る。凌霄花のうぜんかずらの朱色の花に黒い蝶が止まると先祖が戻ったようで物悲し。この世に未練があるのかと思つたりもする。

図鑑には蝶になる前の幼虫の写真もうじゃうじゃ載つてい

る。

成虫の蝶は艶やかなのに、幼虫は芋虫たぐいの毛むくじゃら、松やダリヤの固い葉を音を発して食べている。グロテクスさに鳥肌が立つ。

芋虫のカサカサという葉を食む音を耳にしたら、蝶と蛾の違いは何なのか？ 疑問がよぎった。

図鑑によれば同族なのに、蝶は日中に活動し、蛾は夜に動き回る、という正反対の違いが載っていた。

「夜の蝶」は実在しないが、ひとは暗闇の濃艶さに惑われて口の端にのせたのかも知れない。

今まで殺虫剤で撃退していた厄介ものだが、柚子坊を知ってしまった今、妻や娘に毛虫が怖いとせがまれても、やみくもに殺虫剤を散布するのを断ることにした。

秋に紅い実をつけるマユミを今までの罪滅ぼしに、毛虫に随意に食べてもらおう。

蝶は食餌植物をそれぞれに選り分けて卵を産みつけ、いざこざや衝突を避けて生き永らえてきた。

ロシアがウクライナに侵攻して半年が経った。「蝶こそが、万物の霊長では……」悩んでいる。

# 真夏の夜の珍客

古谷 耀子

七月の初旬、その日は特別に暑かった。そろそろ夕飯の支度をと、読んでいた本に葉を挟み、エアコンを停止してリビングのガラス戸を開け放った。空を見上げると、暗雲が広がって遠雷も聞こえる。

この雲行きだと、間もなく夕立になりそうだ。

慌てて二階の窓を閉めに階段を駆け上がると、途中の段から気温が急上昇して体じゅうにムワーンと熱気がまとわりつく。

こんな日の夕立は大歓迎。灼熱の太陽光線を浴びて焼けている屋根瓦の熱を一気に冷ましてくれる。

案の定、それから間もなく閃光とともに雷はすさまじい轟音に変わると、大粒の雨がテラスの屋根に当たって賑やかな音を立て始めた。やれやれ、これで今夜は気持ちよく寝られるかしら。

夕立は小一時間ほどで終わり、暑さで萎れかかっていたプランターの植物は、たっぷりと雨水を吸って元氣を取り戻した。

その晩、家事を済ませて二階の自室へ行くとき、階段の踊り場まで来ると何かいつもとは違う気配を感じた。

踊り場の一角には、明り取りのために畳一畳より少し大き

めの厚手の曇りガラスがはめ込まれていて、外側にある樹木の緑がぼんやりと透けて見える。

見回したところ足元には変わったところは見当たらなかった。気のせいだったのかと何気なくガラスに目をやると、七〇センチくらい白くて細長いものが外側に張り付いている。さらに目を凝らすと、輪郭から「ヤモリ」と判明した。

ガラスに透けて見えるヤモリは、白い肢体をくねらせて私の姿をじっと見ているかのように静止している。その幻想的な姿にちよっとドキッとしたが、続いて見た手足の漫画チックなようすには笑いを誘われた。ジャンケンのパールのように広げた指がモミジの葉っぱみたいで、先端にある吸盤らしき球体はガラスにピタッと密着している。

私は昆虫や爬虫類が大の苦手。こんなにしげしげと細かく観察できたのは、ガラスの外側にいるので襲われる心配が無いとわかっていたから。

その日を境に、夕立のあった晩には必ずヤモリが訪れるようになった。どの日も同じ場所にじっと張り付いていて動かない。まるでこちらの気配をうかがっているかのよう。

何度か会っているうちに、「お待たせ！」と声をかけたくなるほど親近感が湧いてきて、私はいつものまにかヤモリの白い姿がそこにあることに喜びを感じていた。



暑かった八月がようやく終わって、九月に入ってすぐの昼下がり、家の外にある郵便受けへ配達ものを確かめに行くのと、石塀のてっぺんで何かがススッと移動しているのを目撃した。

恐さをこらえて、近づいて確かめるとヤモリだった。からだ全体が薄茶色で、それより少しだけ濃い茶色の斑点が背中にポツンポツンと印されている。

私は、雨上がりの夜に階段の踊り場のガラスに訪れてくるあのヤモリだと直感した。けれど、白色でなかったことに驚くとともに落胆もした。

普通なら、人間に遭遇した爬虫類は咄嗟に逃げ出すはずなのに、今、私と目を合わせている塀の上のヤモリは、走り出すこともなく私をマジマジと見ている。しばらくそのまま見つめ合っていたが、やがてヤモリの方から立ち去った。

その突然の出会いのあった日の後も、雨上がりの夜は幾晩かあった。しかし、踊り場のガラスに、ヤモリが再び現れることは無かった。

私が白色でなかったヤモリに落胆したのと同じように、あちらも現実の私の姿を見て、ガラス越しとのギャップにがっかりしたのだろう。

思えば、人間界においてもこんな場面を経験したことがあるような。

真夏の夜の珍客に心躍らせたあの数日、もしかしたら「夢」だったのかもしれない。

# 人間界の切符は？

館野ひろ子

「人間界の切符をもたない」

この言葉に出合ったのは、今から二十年以上前になるだろうか。バス旅行で智恵子の生家跡を窓から見て後、智恵子について説明されたことが安達太良の山の形とともに心に残った。そのことが、智恵子抄を読み直すきっかけとなった。

私が初めて知恵子抄にであったのは、中学だったか高校だったか記憶は定かではないが、国語の教科書でだった。忘れもしない『レモン哀歌』である。

「そんなにもあなたはレモンを待っていた」

で始まるその詩は、完全とは言えないが諳んじることができきる。

私ならずとも、多くの人が高村光太郎の智恵子への愛を『道程』『智恵子抄』にて感じて、己の夫婦像を昇華させたり願望したりしていたのではないだろうか。少女時代の私も人並みに胸を熱くし、夫婦愛というものに憧れをもったものがあった。

わたしをよぶ声をしきりにきくが、

智恵子はもう、人間界の切符を持たない

夢中になって読んだ智恵子抄の中でも、記憶がおぼろな部分ではある。

ところが、人間界の切符という言葉は、息子が輪禍に遭い

人間らしい生き方が危ぶまれるという状況となり、強烈に私の心をかき乱す言葉となって脳裏に戻ってきた。

瀕死の重傷となってしまった息子。

青春を謳歌している三十歳の正月に、それは起こった。宴会があるからと車を家において自転車を出かけていった。その帰り道、自転車にまたがり信号待ちをしていた息子は、少年の未熟な運転の犠牲となってしまった。

脳の機能を損傷したが、現代の医学は命の小さな灯を、消すことはなかった。が、考えることも言葉も失い、食べるという楽しみまで助命の代償として奪われてしまった。もちろん歩くこともできない。自分でできることは一つもない。

かつて少年の頃、息子はミニバスケットを楽しみ、レギュラーになり切れない補欠ながら、全国大会にまで参加させてもらっていた。社会人となってからは会社の草野球のキャッチャーとして仲間に頼られ、スキートの季節には後輩たちをスキー場まで誘う運転手となり、カラオケには、おば様たちから声を掛けられ、自分も歌うのが大好きなのでしげく足となっていた。結婚してもよいという人まで現れていた。

息子の輪禍遭遇で、家族の平和な生活も、一変した。

私も夫も、いつ果てるとも知れない息子の命を見守る日々となった。声をかけても体をゆすつても目を開けることのない

い日が、五か月間過ぎ、百五十日目に、大きく目を開けたのだった。CDをかけていたときであった。大好きなスピッツの曲『空も飛べるはず』に気が付いたかのように。

いつも静かな看護師さんが、

「祐ちゃんが目を開けました」と、廊下をバタバタと走り、私は息子の手を握り、頬を寄せた。

「残念ながら、目覚めたことは治ったことではない」

担当医師は正常には戻れないことを告げた。そのため喜びは一気に凍りついた。

生死をさ迷いひたすら眠っていた百五十日余も、転々と病院を転院せざるを得なかった時も、どこまでも車を走らせ息子の傍らに終日いて、どうしようもない虚ろな時間を埋めてくれたのが、書くという作業であった。

やがてネットにブログを開き、綴るようになった。敢えて淡々と綴っていった。少しの変化を見逃さないように。

思い切ってブログを出版するようにと出版社が応募を促してきた。これまで書き溜めた作品を交えて『夫とコーヒール』と題し一冊の本として応募した。図らずも、エッセイグランプリ・エッセイスト大賞となり、やがてそれは出版されたのであった。

この時、編集長の総評に私は奮起したのである。

「あなたの作品は一見簡単な文章のようにだが豊かな表現性を感ぜさせてくれる。最愛の息子の交通事故など様々なアクシデントの中にあっても、飾らない家族の人柄ユーモアが淡々とした筆致で、文章そのものと誠実に向き合っている。……」このメッセージは、これ以後の私の人生の生きる力になってくれた。

あの日から二十一年、相変わらず自分のできることは何一つない遷延性意識障害者である息子は、五十一歳になった。「智恵子は東京に空がないという」で始まる、『あどけない話』の中で、ほんとの空が見たいといって、安達太良の山々を忘れることがなかった。

息子はどうかという、人間界の切符を未だに持っているとはいいきれない。その壊れてしまった脳に、私が投影されている部分が残っているのではないか、とかすかな期待を持っているのだ。

輪禍に遭った二十年前の私と今の私は、悲しいくらい顔つきが変わり耄碌度は進んでいる。それでも息子は「お母さんですよ」と言葉をかけると、時々笑顔を向けてくれ、手を出すとタッチしてくれることもある。笑顔と手の動きは再生したのだ。これは素晴らしいことではないか。

以前、息子は自宅で夫と二人で看っていたのだが、胃ろう部分の器具交換のため短期入院をしていた間に、私は悪性リンパ腫の再発があり、その治療のため息子の看病は出来なくなった。その上頼みの夫の突然の死、そしてコロナ禍。それ以来息子は、家に戻っていない。

面会することもままならない三年間に、笑顔も親しみ込めたタッチも忘れてしまっていないだろうか。

絶望という言葉は、私の禁句である。

私の命の期限は長くはないが、息子が完全に人間界の切符を手にする日を、待つてやらねばという心意気は失せていない。今年五十一歳になる息子だが、私にとっては少年のままなのだ。なんとしてでも、「お母さん腹減った」と笑顔で言ってくれる日まで待っていてやりたい。

# 舞い込んで来た絵

高橋 暁美

桃の花の代わりにピンクのスイトピーを生けてお節句を  
楽しんでいた日、Nさんが摘みたての苺を手に、訪ねて来た。  
苺の甘い香りが漂い、とちおとめの赤とミルクペリーの  
白が春の日差しに輝いて、気分が華やき笑みがこぼれた。N  
さんも優しい笑顔をしている。

彼を中学校で担任してから半世紀経った。中学生のころの  
彼は元気いっぱい、笑顔が愛くるしかった。難しい年ごろ  
の中学生との日々、彼の無邪気な笑顔に私は何度も救われた。  
Nさんたちの学年は度々同窓会を開いていて、四年前の「還  
暦同窓会」はNさん宅の広い庭でのパーベキュー大会だった。  
招待されて初めて行った彼の家の離れは、骨董品、名の知  
れた作家の書や絵画、ステンドグラス作品が多数並び、ギャ  
ラリーのようだった。

建設会社を営み、街のイベントの会場設営などを請け負う  
ことが多かったので、彼の美のセンスの良さは常日頃から感  
じていたが、こんなに美術品に傾倒し、収集していたことは  
全く知らなかった。

たくさんの美術品に時間の経つのを忘れて、Nさんと話が  
はずんだ。特に壁いっぱいには掛けられた絵画はもっとじっく  
り鑑賞したかったほどだ。

苺のお礼を言い、お茶を勧めたが、コロナ禍の今、玄関先  
で帰るといふ。Nさんを見送ったときのことだ。

「あのう、車に絵が載ってるんですけど、ご覧になりますか」  
彼が車からもってきて、箱から出した絵を見て息をのんだ。

日本画家『岸野 香(かおり)』さんの絵である。彼女は  
五十代半ばで、岡倉天心が創設した日本美術院の同人である。  
「気に入ってくれたようですね。物置に眠っていたので、お  
貸ししますから飾ってください」

「えっ、夢みたいで嬉しいけど恐れ多いわ。それにこんな高  
価な絵のレンタル料なんか私にはとても払えないし……」  
Nさんはそんなものいらぬ、無期限でいいからと笑って、  
二階に上がるところの壁に絵を掛けてくれた。まるで測った  
ようにぴったり納まった。

八号ほどの絵は茶色一色で、マンシヨンと思われる建物側  
面の階段を昇っていくおぼろな人影、建物の左半分を隠す大  
きな広葉樹が描かれている。張り出した壁のタイル一枚いち  
まい、大樹の一片いちようが、作者特有の繊細な筆致で描か  
れていて引き込まれ、時のたつのを忘れそうだ。

岸野さんの絵が我が家にあることが奇跡のような気がし  
た。

初めて岸野さんの絵に出会ったのは、二十数年前、「院展」宇都宮展だった。

中国の居酒屋らしい店の、縄のれんの一本いっぽんを色彩豊かに丁寧に描いた絵にすっかり魅了された。

美術の知識も鑑賞力も乏しいのだが、岸野さんの絵は触れる度に好きになった。

画面いっばいのおびただしい数のアイスホッケーのステイック。壁のポールに掛かった何台もの自転車の精巧な描写。建物や人物を、レース越しに見たり霧がかかったように描いたりする数々の絵に感動した。

岸野さんは高校時代まで日光市で過ごしたという。お会いしたことはないが、娘と同じ年齢ということにも親近感ももてた。

数年前、娘との旅で、島根県安来市にある日本一と言われる庭園と、横山大観の作品が収集されている「あだち美術館」を訪れた。そこに岸野さんの絵が展示されていた。

院展で二〇〇九年、一〇年と二回「大観賞」を受賞しているの当然のことなのだろうが、年間六十万人もが訪れる山陰地方の美術館に、岸野さんの絵があることが同郷人として嬉しく誇らしかった。

日々、家の階段を上り下りする度に岸野さんの絵を眺める幸せに浸っていた。

が、心配でもある。レンタル品は保険の「家財道具」対象外と聞いたので火災に遭わせてはならない。強い地震があった夜は、絵が破損しなかったか気が気でなく夜まで落ち着けなかった。

やはりこの絵はNさんに返した方がいいと思いい手紙を書いた。

折返しの返信には、

心から気に入ってくれたのだから、絵はさしあげます、岸野さんと娘さんが同じ年だと言う縁、昔「笑顔がいい」と褒めてもらったことを大切にしてきた生徒の私が、持っていたという二つの縁があるのですから、どうぞお納めください。

と書いてあった。

思案の末、彼の厚意に甘えることにした。

憂えることが多く重苦しい気分の日だが、Nさんのおかげで、胸のときめく絵にいつでも会えることが心を潤してくれる。コロナ禍が収束したら、絵の好きな友人たちに見てもらう楽しみもできた。

# 欠片を拾う

柴崎 幸子

息子がコロナに感染した。家族は濃厚接触者なので、一週間の自宅待機と保健所に指導された。

大学生の三男との生活はすれ違いみで、食事も会話も極端に少ない状態だった。感染するリスクは少ないと思われたが、そこはルールに従い早朝からの仕事も休むことにした。パートを始めてから二十年間、明らかな体調不良以外に休んだことはない。元氣なのに仕事をしないのは、後ろめたい気分で落ち着かない。

習慣とは恐ろしく、朝四時半きつちり出勤と同じ時間に目が覚める。さて、どうしたものか。働かなければ収入はない。ゴミでもいいから手に入れたい。この期間も有意義な時間を得なければと、焦る自分はまったく損な性分だと諦める。

仕事があったら絶対にできないことは何だろう。ひとまず、早朝散歩に出かけることにした。

現在住んでいる場所は、生まれ育った所から五百メートルほどしか離れていない。世界の広さを味わうチャンスもななく心を許せる範囲でしか生きてこなかった。

子どものころの遊び場だった大学のグラウンドを回って来ようと思いつく。

自宅を出て三分、国道を渡って正門から運動場を目指して構内を縦断する。テンポよく歩くことは、リズム体操だと何

かで聞いた。財布もスマホも面倒なしがらみも持たない身体でなんて軽いだろう。大きなイチヨウ並木の緑が頭上で踊る。動くものは自分の手足と緑の葉っぱだけだ。

早朝の自由時間を得たのは二十年ぶり、ここまで歩いてきたのは半世紀以上経っているかもしれない。

グラウンドを一周するころには、今日よりもっともつと自由で軽くて小さかった自分に帰っていった。

この先には野球場がある。さらに奥には田んぼ、周りには畑の緑がゆっさゆっさ揺れていた。丸い衿のブラウスに母の手製の吊りスカート姿の幼い私は友だちと

「今日は馬に乗せてもらえるかな」

「あの優しそうなお兄さんがいたら、お願いしてみよう」

田んぼの横の沢を渡ったところにある馬場を目指す。

柵の隙間からおかつば頭を並べてじっと見ていると、ごくたまに馬場の中に入れてもらえた。

馬に触りたくて、できれば乗せてもらいたいくせに、ぬかるんだ土の上をつま先立ちで入って行くと

「わあ、臭い」

とたんに鼻をつまんでバタバタ引き返してくる。

ブヒヒヒン、馬は尾っぽを振って、ひと鳴き。どうして逃げるのか解らないままゼイゼイと息を切らして、



「こんどは絶対にお馬さんに乗せてもらおうね」  
「うん」「うん」

同じ髪型の少女たちは頭を突き合わせて、うなづく。  
必ず立ち寄る遊び場は正門入って右側に広がる。ハイカラな名前の庭だった。

ヨーロッパの国の名の付いた、その庭にかくれんぼをするのに絶好の作りだ。子どもがしゃがんで隠れるほどの帯状の植え込みが続く。まったくもってパラダイスだ。

手入れのされた芝生の上で匍匐前進、鬼に見つかればその場で前転。ブラウスもスカートも芝の葉が付きまくり、首筋はチクチクするし、相手の顔に付いた葉っぱを見てゲラゲラ笑う。笑った自分の顔も同じで草だらけ、再び大笑いが止まらない。

かくれんぼに飽きると、庭園を見下ろすように立っている大木の下で、持って帰ると怒られるドングリを拾う。

スカートのポケットがパンパンに膨らむと、お気に入りのサルスベリの木に登って一休みする。女優のようにスベスベした木肌は登りやすいが滑りやすい。

自分の身長より高い位置から見渡す庭園の奥から、ブォーン、ブォーンと管楽器の鳴る音が聞こえる。

重なりあつた大谷石が崩れかけていて、幽霊が出そうな古い建物からその音は響いてくる。海援隊の武田鉄矢に似た髪型の男性が細長い入口でトランペットを吹いていた。

あの人は本当は何をしている人なんだろうと、不思議に思つて眺めていた。

懐かしいサルスベリは現在でもその場所に立っていた。

私の指定席もそのままに、何度も座つたところに手を置いてみる。静かに振り返ると、五十数年前に見た景色が広がる。あのときと変わらないと思つたサルスベリの長く伸びた枝の先に目が留まる。

広がりすぎた枝先は、優しく丁寧に支柱で支えられていた。まるで、杖を付く古老のように。

帰り際、庭園の説明が書かれた立て札を読んだ。

『大正十五年秋に建造され・・・二〇一八年日本遺産として認定されました』

まさか遺産の中で、転げ回つて遊んでいたなんて、申し訳ない気持ちと懐深いフランス庭園に感謝する感情が入り混じつた。

思い出のかけらを手に入れた私は満足して自粛の我が家に帰って行った。

# 捨てる決心

国井 和子

今年は八月と九月の二か月間で、八十八歳を過ぎた夫が三回も救急車の世話になった。昨年も二月ごろ救急車の助けを借りている。

三回のうち二回は日中のことで、近所の人達が何ごとかと集まった。どうしたんですか、と心配して私に声をかける。状況を説明する余裕は無いので、お騒がせしてすみません、とひたすら頭を下げる。

救急車を頼むかどうかはやはり決心がいった。このまま落ち着くかもしれないという気持と、重大な事態なのかもしれないと思う心が交錯して、頭が混乱する。

夫の場合、「寒くて駄目だ」と言い出すのが発熱の合図になる。四五分も過ぎるうちに身体中をふるわせ、苦しいと叫ぶ。その時点でどうとう決心して一一九番をする。救急車が到着するまでに、保険証や診察カード、飲み薬、パジャマなどを走りながら用意する。

度重なる入院に、さすが夫も先々のことを考えたのだろう。「こんなに病院へ行くようになったんでは、いよいよ身のまわりの整理をしなくちゃならないかな」

夫は急に弱気になって言う。今まで身のまわりの始末など口にしたことはない。

「まず、不用のものが沢山ありそうだから、それを少しでも

処分してもらえれば嬉しいんだけど」

夫のゴルフ道具やボール類、つりの道具、日曜大工の刃物や材料。描いた油絵や絵画関係の道具（イーゼルなど、かなりの場所をとる）など、あちらこちらにあふれている。

夫の趣味の道具については、私も強く言うことはできない。私も夫に負けず、書籍類や焼物・版画など、各部屋ごとに所せましとひしめいている。

夫に整理をすすめてから、自分の身辺整理も早急に必要なることをやると悟った。

本の中に埋もれ、絵の中に身を置いて、寸暇の心のいやしをしていたのだが、やはり断捨離は必要になってきていた。

この多量な雑物を処理するには、相当のエネルギーと体力が必要に思える。私はすでに八十歳をとうに過ぎているのだから、もつと早く身辺整理を始めるべきだった。病院生活をするようになってからは、もう整理どころではない。毎日の自分の身体を守ることだけが仕事になる。

しかし、何とかしなければならぬ。

そんな折、コンビニの店頭で目についた本があった。題名が『捨てる練習』とある。著者は『島耕作』の漫画で知られている弘兼憲史氏である。

捨てるにも、練習がいるらしい。目次の最初を見ると「い

らないものはすべて捨てる」という。何と小気味の良い言葉ではないか、この言葉に背中を押された。背中を押してもらわないと、なかなか行動に移せないところがある。

この本では、捨てるものの中に「見栄や虚勢」「愚痴」なども入っていて面白い。

まずは夫と共に、不必要なモノを取り出して、捨てる練習をすることにした。だがそれが不必要なのかどうかを判定するのがむずかしい。自分の心が充実し、輝いていたときの趣味のものは、考えていたより執着があった。それらの存在は、自分の生きてきた軌跡の証明であり、現在の生活に自信をもたらししてくれる。

計画をたて、節約をしてやっとな手に入れた数々のモノが、今は捨てる対象になってしまふのかと思うと、少しばかり虚しさがこみ上げる。

夫の様子は、と見ると、やはり「捨てるものはあんまり無いんだよね。ゴルフボールくらいかな」と言う。ゴルフボールは、バケツ二つに山盛りになっている。

「これ、何とか使えないの」

夫は普通に歩くのもやっとなだから、ゴルフでこのボールを使うことはできない。

「親戚の誰かが使ってくれないかな」

となり町に住む甥に電話をすると、すぐ次の日、取りに来た。比較的新しいクラブを二本ほどついでに渡すと、「これもとは高かったでしょ」と喜んでる。

少しずつ物が減り始めた時、夫はまた入院ということになった。今度は救急車での入院ではなかったが、調子が良くない、と診察に行くと、即入院の診断が出た。今回は十日ほ

どで退院したが、夫はあらゆることに興味を無くしていた。言葉も少なく、ぼーっとしている。

ゴルフ道具とつり道具は、全部甥にやることにしようか。油絵はどうするか。

額に入った油絵は、二十点ほどある。夫の絵はほとんど風景画で、川の流れや山々の遠景である。

半年ほど絵の先生のもとに通っていたが、自分の好きなように描けないからつまらない。などと言い出して、自己流で好きに描いていた。

「誰か買ってくれないかな」

「今は、もらってくれる人も見つからないと思うけど。額だけだったら、古物屋なんか売れるかもしれないね」

「それじゃ苦労して描いた絵がかわいそうだ。なかなか良くできた絵だと思うんだがなあ」

夫と会話しながら、私は自分が買い込んだ美術全集や焼物のことを考えた。子どもに残しても「いらないものは、すべて捨てる」になってしまうだろう。

或る人間国宝の手になるコーヒークップの素朴さが、いかに心を和ませるか。やっとな見つけた水色の一輪ざしに、ピンク色のコスモスを一本入れた時の、新鮮な感じなど、物を所有した本人だけが知る感動である。

自分で所有したものは、やはり自分の心で決めて処分することが、モノに対する礼儀なのだろう。

この年になって、自分の生活とかかわってきたモノと、縁を断ち切るためには、大きい決心が要ることがわかった。

# 沖守弘先生との想い出

藤田 香月

知友からの年賀状、はがきや絵はがきは、私の大切な品々のひとつとなっている。その中には、報道写真家沖守弘先生からいただいた、海外からの二枚の絵はがきがある。

その内、一枚はサグラダファミリアの絵はがきで

「サグラダファミリアでのマザー・テレサ展、……。お蔭さまで連日数千人の観光客にみてもらっています。マザー・テレサの平和へのメッセージが伝われば幸いです。」……。スペイン・バルセロナにて「沖」とあり、もう一枚のアッシジの絵はがきには、

「ミラノ展は大成功でした。今本命のアッシジに来ています。……。マザー・テレサが敬愛する聖フランシスコの生地写真展が出来、半ば興奮状態です。……。グッドニュース、アッシジ展示中10月22日洗礼を受け、小生第2の人生を歩みます。……。アッシジにて『沖』二〇一〇年一〇月」と書かれていた。沖先生は、マザー・テレサの写真展を念願のサグラダファミリアやアッシジで実現し、心に決めておられた洗礼も彼の地で受けられた大きな喜びを、二枚の絵はがきで届けてくださったのである。

沖先生のお名前を知ったのは二十数年前にさかのぼる。当時、私の勤務する大田原赤十字病院（大田原市住吉町二一七

一三。二〇一二（平成二十四）年七月一日那須赤十字病院と改称、中田原に移転新築となる）A館4階の電話交換室のことだった。ある日、救急センターの婦長（現在は師長）國井斐子さん（『国家救援医』の著者、國井修先生の母上）が「マザー・テレサの本、郡司さんにいいと思って！」と一冊の本を届けてくださった。沖守弘氏の『マザー・テレサあふれる愛』であった。

カルカタ（現コルカタ）に生きる路上生活者の人々と、マザー・テレサやシスターたちの彼らへの奉仕の姿を、長年にわたって密着取材されたたくさんの写真と文とで伝えていた。私も友人たちにマザー・テレサの本を読んでもらいたいと思い、何度か沖氏に本の注文をお願いすると、「おにぎり献金」のことが知らされた。「おにぎり一つ分を節約し、マザーやシスターたちの奉仕の一助としていただけよう」というのである。二、三度、心ばかりを送らせていただくも今度は、「山谷のブラザーたちが温かいクリスマスを迎えられるよう、何か協力してください」と、呼び掛けられた。それに応えて、お米やお茶、タオルなどを神の愛の宣教師会山谷修道院に幾度かお送りするうちに、今度はブラザーから「おじさんたちと一緒にクリスマスを迎えませんか」とお誘いを受けたのであった。沖氏はいつしか私を、山谷に導いているかのようだった。

た。私は修道院のブラザーが外国の方であつたことに驚いた。当時は、ルンビニ生まれのブラザー・ニルマルと、もう一人は韓国人のブラザーだった。ボランティアの方々と日本のおじさんたち六百五十人を支えてくださっていたのだ。

クリスマスの日、ミサの行なわれている傍らでは、けんちん汁とおにぎり作りがされて、私もおにぎりを握った。トレーの上におにぎり菓子パン、焼き鳥とを盛り付けおじさんに渡すのだが、数が数だけに身動きもままならず汗がにじみ出た。クリスマスプレゼントの袋も用意されていて、中には毛糸の帽子やマフラー、カップラーメン等が入っていたようだ。ブラザー・ニルマルと近所のパン屋さんにパンを受け取りに行つたこともあつた。途中、歩道に坐りこんでいるおじさんに声を掛けられると「どうぞ来てください」と応えていたが、その時の慈愛のこもつたブラザーの眼差しは今も忘れられない。またその日パン屋さんは、お店を休みにしおじさんたちへのパンを作り、半額近い値段にしてくれたことも分かつた。そして沖先生からのお電話が、「そちらで、マザー・テレサ展をしませんか。写真パネルをお貸しします」と、驚きのお言葉だったが、私はとっさに会場設営は？行動できる人がいるのは？と考えた。インドとの交流もあり、私も寛方・タゴール会でお世話になつている「さくら市ミュージアム」荒井寛方記念館―が浮かんできた。館長の中野英男さんに電話で伺うと、即「うちでやりましょう！」と快諾してくださつたのだつた。

結局、沖先生には写真展に合わせ「マザー・テレサくその人と愛く」と題しての記念講演会に御越しいただくことになつた。二〇〇九年九月十二日講演会の日、私はミュージア

ムの方の車で、氏家駅に沖先生をお迎えし、その時初めてお会いすることになつた。

ミュージアムに着くと先生はまっすぐ展示会場に向われ、一巡されてから事務室に行かれた。大勢の方々が見えて、駐車場も会場の椅子も新たに増やす場面となつた。

壇に上がられた沖先生は先ずジャケットを脱がれたので、一番前の席にいた私は、それを受け取つて膝の上にお預りした。講演の後の質問も活発で、いつしか先生は壇をおり、質問者の近くに移つて応じられていた。先生と聴講の方々には何か共通の熱いものが感じられたようだった。しかし私には一つの心配が浮かんできた。沖先生は胃の全摘手術を受けており、昼食もとらずに講演に臨んでいたのだ。質問後、著書へのサイン会に大勢の方々が並ばれていた。ハラ／＼しながら見守っていると、サインが終わつても尚、お話に応じられているのだつた。やつと事務室奥の席で出されたお茶に、私は持参したル・レクチュエ（新潟特産の洋梨）のゼリーを添えてお勧めした。先生はゼリーを上がつけてくださり、私はようやくほつとしたのだつた。

しばらく時を経ていただいた沖先生からのお電話は、「マザー・テレサは列聖して聖人になつたんですよ！写真展はしないんですか！」と少し憤つてさえおられるような口調に私は途惑つていた。数日後、お嬢さんからのお電話でようやく理解することができた。「父は認知症が進み訳がわからなくなつています。刺激しないようにお願いします」と。

幼児が母を親うように常にマザー・テレサと共におられた沖先生は二〇一八年の四月、天に召されたことを知つた。

# 三十八度

国母 仁

午前、五時に目が醒める。と言うよりウトウトとして熟睡出来なかつたのだ。いくら眠ろうとしても眠れないのが一番辛い。

以前にも同じ事があつた。かかりつけ医に相談したら一ミリグラムの不眠症治療薬を処方してくれた。不眠症薬は飲んだことがなかつたので不安でいっぱいになる。飲んだ次の朝スッキリ起きられると思つたが軽い頭痛と眩暈に襲われる。不眠症薬の副作用か。それとも私には合わないのか。以後、あまり薬は飲まないように心掛けている。

今飲んでいる薬は尿酸薬と整形外科医から処方された四種類（二種類は漢方薬）。

脊柱管狭窄症の術後、二カ月経つても腰がフラフラして杖をつかないと歩けない。仕方がないので家の周りをゆっくり歩いている。

四種類の薬を飲んだ後、体温を測る。三十八度あつた。寝起きに測つた時は三十七・七度。熱が上がつてゐる。もしかしてコロナに感染したのではと疑う。

感染した後の生活はどういう制約を受けるのか、最悪の場合隔離される事になるかも。それとも自宅療養で恢復するのを待つことになるのかと。ネガティブな思考に支配されてゆく。

段々とダルクなつてきた。昨夜、解熱剤を飲まなかつたからか。一週間前から熱がある。コロナ感染を気にして測つていなかつたのだ。多分、三十八度くらいあつたかも。熱があるとコロナ感染が疑われるから熱が下がるのを祈るように待つしかなかつた。

心が崩壊寸前になつてきている。誰に頼ればいいのか混濁してくる。やはり一番身近な妻に頼るしかないと少し冷静さを取り戻す。

五日前から私が熱のあるのを妻は知つている。妻もコロナ感染を疑い始めてきたのか、

「今日から、食事は別々に取りましょう」と、奥の書齋に焼魚定食を運んでくる。犯罪者を見るような棘のある目に変つていくのがひしひしと、伝わつてきて疑心暗鬼に陥る。

「どうして別々に取るの」  
「もし、コロナに感染していたら私も感染するかもしれないんだよ」

やはり妻は私が感染していると決めつけているのが分かつた。確かに二人して感染したら買い物にも行くことができなくなる可能性もある。そうすると人に頼るしかない。近くに娘夫婦がいるが二人とも勤めているから頼ることができな



い。だから絶対に二人感染は食い止めなければならぬと、妻の提案に納得するしか選択肢はなかった。

昨日、熱が下がらないのでかかりつけ医に妻が連絡を取り、午後四時に伺った。駐車場に着くとスマホで連絡を取り合い院内には入ることができなかった。

四十代の看護師が直ぐ近付いてきた。看護師は目だけむきだしのマスクをしてその上にフェイスガードをつけ透明な帽子を被っていた。まるで、宇宙飛行士のような格好だ。

「熱を測ります」

飾りのない棒きれのような言葉に恐怖を感じる。差し出された体温計を右腕の脇に差し込む。

五分前、車中で測った時は三十六・五度。

今回も三十六・五度が計測される。平熱に戻ったのだと安堵する。平熱に戻ったのだから容疑が晴れ家に戻れるのではと勝手に解釈する。

棒きれのような看護師はロボットののような動きで院内に消えていく。医院は大木のトチノ木、いちようの木に囲まれている。心地よい風が頬を撫でてゆく。猛暑から解放されたように癒される。院内にいる五、六人の看護師が私達を凝視している。完全に感染者と見ている目だ。いや、犯罪者と決めつけてる冷酷な氷目だ。

五分後、二人で来る。

二人とも宇宙飛行士の姿だ。

「熱が続いているということなので、PCR検査をさせていただきます」

「でも、熱が下がってきているのですが。今、測ったら三十六・五度なんですけど」

「それは解熱剤を飲んでいるからでしょう。飲まなければま  
た上がりますよ」

かなり強権的なふるまいに観念するしかなかった。

医院にくる前、解熱剤を飲んできたのは確かだ。

「マスクを下げて下さい。少しむせるかもしれないけど我慢  
してください」

柄の長い綿棒を右の鼻に差し込んできた。ドンドン奥へ奥へと傍若無人に差し込むと言うより突っこんできたという方が正しいかも。あまりの勢いにせき込んでしまった。

「明日、検査結果は保健所からかかってきますから、待って  
てください。奥さんの携帯に連絡するようにしますね」

今日、PCRの結果が妻の携帯にかかってくることになっ  
ている。午前、十時過ぎにかかってきた。

# 「蒲生氏郷」由来の地を歩く

水野 弥彦

終戦直後の小学校時代を疎開先の故郷の静岡県藤枝市岡部町で育った私は、戦火に怯えることなく、自由気ままに育った。ぜいたくさえ除けば、海にも比較的近く、遠洋漁業の街として当時から全国的に知名度の高かった焼津港が真近だったこともあり、食生活もそれなりに恵まれた環境の中で育った。自分が現在、何に不自由なく居られるのは、この時代、多くの知人友人に恵まれたことを一時も忘れたことはない。

ただ当時のことを振り返ってみると、高まる向学心を満たす十分な教材に欠けていたことは否めない。終戦直後の教材といえば、ほとんどがガリ版刷りのお粗末なものばかり。加えて片田舎の小学校ともなれば、併設の図書館などはなく、副教材に乏しく向学心を満たせないまま育った。ただ良き友人や先生には恵まれ、その不足分をカバーするには十分であつた。

この時期、私の心を魅了したのは、教室の片隅に張り出されていた大きな一枚の日本地図だった。時間さえあれば、その地図に釘づけ。お陰で全国都道府県の主要な地名を総て暗記。このことが原点となり、地図から地理へと発展し、終生、大事な生活の糧となっていくとは、予想だにもしなかった。

もう一つは、学生時代に受けた史学概論の指導教授の言葉「君達は卒業したら、地方史に目を向ける。そこには何か、

新たな発見に遭遇するはずだ」。地理と地方史——今なお各地を歩き続ける原点は、ここにあるのかも知れない。

古い友人に貰った一冊の本。『火の兜・蒲生氏郷』（小野孝二著）に魅せられて、氏郷の足跡を訪ね歩いたのも、その良き一例だ。氏郷は近江商人のふるさととして知られた滋賀県の湖東、中野城（日野城）を築き、定秀・賢秀（ただひで）、氏郷（うじさと）と三代が五〇年にわたって、当地を治めた地域。特に、この平城（ひらじろ）は、本能寺の変（一五八二年）の折、織田信長の妻子が身を寄せた城としても名高いところでもある。

氏郷は、近江日野商人の街の振興策に力を注いだことは、つとに名高いが、その後の松阪城主、会津若松城主と大々名の位置に付いても、常に地元産業の振興策の発展に尽力した大名であつたことから、地元民から大いに慕われた人物だった。この三地域の中で唯一、訪ねていなかった三重県松阪市を先年、訪ねる機会に恵まれた。

◇ ◇ ◇

食通にはお馴染みの三重県松阪。武家長屋や商人町など江戸の町割とその佇まいを今に残す歴史を感じる城下町だ。私の場合は、東海道新幹線の名古屋駅で伊勢・鳥羽方面行ききのJR東海の快速電車「みえ」で約70分、目指す松阪駅に到着。

駅前ロータリーから西に伸びる広い道路を進むと間もなく、伊勢街道に交差する。これを右手に進み、2つ目の信号を渡ると、右手に三井家発祥地が現れる。

松阪商人を代表する三井家邸宅跡だ。彼の井原西鶴が「大商人の手本」と称賛した三井高利（たかとし）は元和8年（1622）松阪本町で出生、28歳の時に江戸から戻り当初は松阪で金融業を営む。後に江戸にご存じの「越後屋呉服店」（三越の前身）を開き、「現金掛（か）け値（ね）なし」など、次々と革新的な商法を編み出し、江戸、京都、大阪の三都にまたがる呉服店、両替店を経営し事業を拡張、後世の「三井財閥」の基盤を確立した人物なのだ。

周辺には、この松阪で生まれ『古事記伝』44巻を著した国学研究者・本居宣長（もとおり・のりなが）宅跡、松阪商人の館（旧小津家住宅）、木綿問屋で財を成した松阪商人の代表的な商家・長谷川邸などが点在し、観光スポットの一つでもある。

この一角を離れると、四五百森（よいほのもり）と呼ばれる独立丘陵上に築かれた松阪城跡（国史跡）が目の前に迫る。城は戦国時代末期に、冒頭でも触れた滋賀県湖東の日野の城主から移ってきた蒲生氏郷（がもう・うじさと）が天王16年（1588年）に築城した平山城（ひらやまじろ）だ。本丸・二の丸・三の丸のほか郭（くるわ）から成る。残念なことに現在、堀は埋められてなく、立派な本丸跡と二の丸跡の高い石垣が残るだけだが、天守台跡付近からは市街地が一望できる。二の丸跡の一角には本居宣長旧宅や記念館などがあって、その業績を偲ぶことができる。

ハイライトは、城跡の東側、裏門跡と搦手門（からめても

ん竹御門）跡を結ぶ石畳の道の両側に楨垣を巡らした武家・御城番長屋（ごじょうばんながや）国指定の重要文化財）があることだ。城を警護する御城番組同心の珍らしい武家長屋である。この周辺の殿町（旧同心町）は、氏郷が会津に移封後、紀州藩の伊勢領となり、紀州藩士とその家族の住居地だったところで、松阪では是非訪ねたい場所所でメイン・スポットだ。この松阪で氏郷の存在感は絶大である。わずかに在位2年にもかわらず、地元に大きな功績のあった武将といわれている。築城と合わせて城下町建設にも大いに力を入れ、楽市楽座の制度を採用して全国各地から商人を呼び寄せた。彼らの出身地の地名をとって、城下に日野町・平尾町・湊町などの由緒ある町並が出現、同じ職人や商人を集めた職人町・魚町を作る徹底ぶりだったといわれる。これが後の松阪商人（伊勢）として江戸などに進出し、繁栄を極める礎（いしずえ）となったのだ。

松阪市では、この氏郷の功績を称え、毎年11月3日に「氏郷まつり」が行われるほど、尊敬される城主だったことがわかる。城内の一角にある松阪市立歴史民俗資料館、松阪もめん手織りセンター、文化財センター、はにわ館なども見所。この松阪の市内には、由緒ある貴重な神社仏閣も少なくない。より松阪の歴史を知りたい向きには、さらに足を運びたい。余裕があるならば、ぜひ足を伸ばしたいのは、少し離れてはいるが、雲出川沿いにある北海道の名づけ親・松浦武四郎の誕生地と、その記念館だ。彼の調査日誌や地図など膨大な記録を展示、彼の実像を紹介する貴重な施設だ。武将の道、豪商の道、国学の道——松阪は歴史ロマンに溢れた街なのだ。

# いい湯だな

関根喜久枝

白黒の古い写真を見つけた。父と私が宿の丹前を着て下駄をはいて並んで立っている。宿の人が撮ってくれたのだろう。父が三十歳の時、お酒の飲み過ぎが原因で胃潰瘍になり入院し手術した。その後温泉療養のため那須塩原温泉に一カ月ほど滞在した事があった。多分父は一人では退屈すると思っただろう。五歳の私をお伴に連れて行った。家では母が家業をしながら幼い二人の弟の面倒をみていた。小さい頃なのでほとんど記憶がないが、他のお客さんは余り見かけなかった。一日のんびりお湯に漬かっていた。想い出すのはお風呂あがりに食べたみかんが甘くておいしかった事、時々雪が散らついで東京育ちの私にはめずらしかった。私のお風呂好きはこの時からかも知れない。

我家は金属玩具製造業を営んでおり、十数人の従業員が工場で働いていた。注文が多くはいると忙しくて人手が足らなくなる。すると父が、

「そろそろ人を募集しなければいけないな」

と母に声をかけると、

「そうですね。じゃ準備しましょう」

と言って半紙に、時給〇円、日曜日は休み、工場の住所と電話番号を書いた。早速日曜日の朝早く小麦粉を煮て作った

糊を小さなブリキ缶に入れ、十数枚の半紙を持って家を出た。私はまだ小学生だった。東京の下町厩橋に住んでいたので蔵前から浅草あたりまで自動車に乗って回った。道路脇に車を止めて近くの電信柱に半紙を貼っていった。当時電信柱にはキャバレーのホステス募集や消費者金融の広告お金貸しますという貼り紙、そして様々な職種の求人募集の紙がすき間なく貼ってあった。父は空いている場所を見つけはけで糊をつけた。その時私に、

「人が来ないか見て」

と声をかけた。

「誰もいないわよ」

それを聞いてすばやく手を動かしていた。今振り返ると違反だったのかそれとも人に見られるのが恥ずかしかったのか疑問を抱いた。作業は朝からお昼頃までかかった。

「ねえ、まだ終わらないの。お腹すいた」

「そうだね。もう終りだ」

と言って片づけると、当時出来たばかりの日帰り入浴施設隅田川温泉に立ち寄った。休憩所もあり昼食の後入浴した。広い浴槽の湯に漬かり手足をのばして温まっていると、父の手伝いの疲れもやわらいだ。募集は十日位の間には必ず数件の問い合わせの電話があり、二、三人雇う事が出来た。一度新聞

に求人募集の広告を頼んだ事があったが、費用がかかるわりには全く反応がなかったのでそれから数回貼り紙で募集をしていた。昭和三十年の頃だった。

年末になると両親は資金繰りの調達や、従業員の年末手当の準備に忙しかった。それらが終ると大掃除になる。毎年父は母に、

「掃除はほどほどでいいからな」

と念をおした。きれい好きの母は日頃念入りに掃除をしたくても工場の仕事に時間をとられ出来なかった。大晦日になりこの時とばかり始めるので家族皆うんざりしていた。高校生の頃母に頼まれ夜十時過ぎまで廊下のワックスがけをしていた事があった。

お正月を迎えると朝風呂に入るのが恒例だった。さっぱりした身体に真新しい下着を身につけ家族揃って新年の挨拶をした。こうして我家の新しい年が始まった。

## 真冬のひまわり

神山 暁美

「生きて帰ってきて」娘はそう言って  
 軍服のポケットに数粒の種を忍ばせた  
 明日は戦地へと赴く恋人へのお守り

ロシアの 母が 妻が 年老いた父が  
 別れには必ず手渡したひまわりの種  
 北国の太陽の恵みが  
 生き延びる糧となるよう祈って

夏空の下いっせいに群れ咲く  
 広大なひまわり畑の地中には  
 かつての戦で命を落とした兵士たちの  
 亡骸が埋まっているという

いま国を護るためではなく  
 愛する家族への想いでもない  
 訓練の延長と信じて戦車を操る若者  
 ポケットにはひと粒のお守りもない

極寒の大地に 大輪のひまわりが一本  
 太い茎には鋼の神経の針を巡らせ



何ものも寄せつけようとはしない

陽<sup>ひ</sup>を追うことも 振り向くこともせず  
西方を視つめたまま 聞く耳もたず  
揺るぎのない 真冬のひまわり  
黒と白 不吉な縞模様の種類  
その色をさらに濃くして膨らみながら

## ミストの雨が

岩本久美子

朝の片付けをしながら

目はテレビの画面に

高層ビルとタワーマンションが林立する

東京の空

スカイツリーがそびえ立つ

スクランブル交差点を

夢を抱いた若人の群衆が

足早に行き交っている

宝石のような魅力が散りばめられ

活力に満ち溢れた大都会は

地方の若者達の魂を虜にして

大口を開けて呑み込んでいる

恰もブラックホールのように

そこから故郷の景色は見えるのだろうか

少子化人口減少が叫ばれて久しい中

東京一極集中に拍車がかかり

地方は閑散として疲弊する

何処にも解決の鍵は見つからない

空からミストの雨が降ってきた

都会を田舎を覆い尽くすように

辺り一面の景色は朧げに遠ざかり

時は過ぎて行く

ミストの雨の下

足元の庭先に鈴蘭の花が咲いていた

純白の小さな花が存在感をアピールして

地に向かって健気に可憐に

鈴蘭に初夏の光が明るく差してくる

いつの間にか消えたミスト状の雨

移ろう時の流れの中

それぞれの下で

生あるものは命を繋いで行く

生あるものの命は引き継がれて行く

案ずるなと囁いて

ミストの雨が持ち去った

# 地球の肺が燃えている

貝塚津音魚

ジャングルを焼いてなぜ悪い  
貧しいから豊かになりたい

石油や鉱物が国土があれば幾らでも裕福になれる

ジャングルに火を放ち焼け野原から

農地や鉱山を開きダイヤモンドを求める

アマゾン川流域には3000万人もの人が暮らし

4万種の植物と1000種以上の鳥 3000種の魚

4000種以上の哺乳類と250万種の虫たち

アマゾンは生物多様性の故郷だ

地球規模の光合成で人類を助けているのに

経済的に何ら豊かにならないこの矛盾

世界の原生林の三分の一を占める

アマゾンの熱帯雨林は二酸化炭素を大量に吸収し

地球上の酸素の20%を供給している

アマゾン熱帯雨林を「資本主義」が焼き尽くす

経済優先の社会が地球を破滅へと追い込んで

要因は森林伐採 農業利用 干ばつだ！

「地球の肺」と呼ばれるアマゾンは

気候変動の大きな抑止力を担っている

今もアマゾンのジャングルから火の手が上がる

地球が無言で暑い熱いと叫んでいる  
やがてその火の粉は人間に降りかかる  
人間が熱いと叫んだ時にはもう遅い  
地球 この稀なる緑豊かな水の惑星  
いま  
我々ひとり一人の手に委ねられている

# 中沢

森  
秀夫

鉄の胃 元氣印五重丸  
囲碁 将棋 テニスにゴルフ ギターまで  
剣道は ドイツに十年単身赴任  
日本人学校で教えていた三段の実力者

勝ちに拘る勝負師  
他人の悪口は決して口にしない  
寡黙な中に 胸に秘めたる  
メラメラ燃える真紅まっかな闘魂

第二の人生はこれからだ と語っていた君が  
突然 襲いかかった白血病に負けた  
全てはこれから という時の旅発ち

木々が芽吹き 山が笑う季節の中  
空を舞うツバメのごとく  
緑の風に乗って逝ってしまった

限りある生命いのち  
日々 精一杯生きろ  
日々 精進しろ



君からのメッセージを俺は受け取った

君に誓う

君の分まで生きてやる

まっすぐに 生きて 生きて 生きてやる

中沢

俺の背中を押してくれ

天国で見えてくれ

# 閉じ込められた風景

こやま きお

きりつと一輪 菜の花  
そこは小高い丘であつたに違いない

土地の人からお花畑と慕われていたと  
きみの話を思い出す

かつては多くの人が訪れ  
晴れた日

丘に立つと

ゆるやかなアーチを描く水平線が  
輝いて見えたという

いくつもの重機のアームが  
獲物を狙うカマキリのように丘を抉っていく  
土壌汚染の除去だというが  
遺跡のように残されていた家々の礎石も  
たちまち茶色の土に均され埋められていく  
記憶の抛りどころがまた一つ消える

鈍く照り返す無数の黒い袋  
この地で暮らしてきた  
人々の

喜怒哀樂を詰め込んだまま  
失われた町に積み上げられていく  
きみの眠る彼方の海を遮り  
逝った人たちの無念をも塞ぐ  
いつまで  
街の風景を閉じ込める

## 林中追懐

高田 太郎

ぼくが投稿少年だった頃  
浅春の雑木林の陽だまりで  
詩を書いた

机に向かつていては

女の子ばかり頭にちらついて

言葉が出なかった

ときには啄木のマネをして

朽葉の上に寝ころんで

十五少年の心をたんまり空に吸わせて

自分だけの贅沢な時間を

持て余した

空の名残を惜しみながら

すっかり葉を落とすつくした樹々は

天辺で神経のような細かい枝を

悩ましく絡み合わせ戯れ爆ぜ

ぼくの不純な春のめざめを惹き起こしたが

シジューカラの会話

林中一番咲きの薄紅のシドミの花が

ぼくの乱れを治してくれた

落葉さらいも下刈りも不要になって  
貪欲な篠竹に食いつくされたまま  
ぼくの家の荒れ果てた雑木林は  
今もあるにはある  
どんなに変貌しても  
「ある」ということは  
この一篇の詩を書くだけで  
完結する

# 文字

螺良 君枝

古い家の戸棚の中を 整理していたら  
錆びたトタンの缶の中から  
義母の会計簿が出て来た

二月一日 シゴトハジメ  
シヨウユ 一シヨウ 八十円  
シヲ 五キロ 百十円  
タビ 一ソク 百十円  
グンテ 二ソク 百二十円

百姓仕事で ささくれたった手に  
ちびた鉛筆を なめなめ書いた  
懸命な心が息づいている

杖をつきながら 畑の草耒りに行き  
執念の鬼のように 働き続け  
生涯を農地に捧げた人

三日程患い 七十二歳 誕生日の雪の朝  
お前らに面倒はかけないよ と  
あっさり逝ってしまった

いつも張りつめた弦のようで  
気丈夫で近寄り難かった

カオウセツケン 二十円

レンジソウノタネ 四シヨウ 千二百八十円

痛痛しく たどたどしい字に  
温かさが滲んでいる

かあさん かあさん

親しく 一度も呼んであげなかった  
悔い！

長い歳月を経て  
涙といっしょに ほとぼしった



# 視線が漂う時間

松本ミチ子

コンビニ  
午前0時

レジに立つ

わたしの世界が始まる

いつも来る彼が来た

あなたの日本語は

言葉が眼の前で崩れ

ボソボソ音だけが届く

アンパン一個

会話の隙間から

ポツンと言葉が落ちる

彼の好みだから

どうでもいいのだが

「なぜ」と考えると

虚しくなる

それがいつの間にか

楽しむコツを覚え

もう眼が離せない  
不思議なくらい  
眼が開きっぱなし  
瞳孔まで  
開いているかも知れない

「意のままにどうぞ」

一日の底で  
君の言葉を掬い取る  
わたしはパート  
ずっと真夜中でいいのに  
朝陽が昇って来る  
モロッコの夕陽の色だね

## 存在考

戸井みちお

店先の招き猫

ひねもすうつらうつらの眠り猫であれ

そこに居るだけ 存在するだけで

人は見返り振り返り

微笑をおくる

番台娘

そこに居るだけ 坐っているだけで

人はてら銭そこに置き

声の一つもかけていく

居るだけでいいのだ

そこに居るだけで

何も為なくても居るだけで

この世に存在するもので

無用のものなどひとつもない

そこに転がっている石ころだって

紙の上に置けば文鎮

そこに転がっていた邪魔石も

桶の上に置けば

呼び名も重しの漬物石

物人全て

居るだけでいい

存在するだけでいいのだ

存在は美徳

無用などと言うは

おろか者の言う言葉

自らの無智無能の表白

世の中に無用のものなど一つも無し

存在に理由はいらぬ

在り居り侍りで

日々好日

# ワハハやハハハ

村上 周司

声というものは  
不思議なものである  
心の準備がないのに  
突然嬉しいときには  
ワハハやハハハと  
顔を赤らめて表現力ゆたかに  
笑うのである  
笑う門には福来たるとは  
よくいったものである  
また言葉の瞬発力は  
心の中のものし火となり  
幻想力となって  
よい効果をもたらすこともある  
そしてワハハやハハハという  
笑いの福の神のように  
最高の顔の  
演技力となってくるのである  
それが  
なんともいえない味となる

## 雨のあぢさゐ

大島 孝子

白梅しろつめが香り柳が芽吹きそむ美しき世に戦争が来た

コロナ禍につづき戦争 終息のきざしさへなき春の泥濘

見わたせば青葉若葉をゆるる風五月の丘に桐の花咲く

梅を漬け辣韭を漬け戦争のない日本の六月を生く

うつそうと木々の葉繁りそを濡らし梅雨のもどりか雨降りつづく

少しづつ不便になつてゆくやうな郵便事情・駅の無人化

常温の水のあまさやまろやかさ口内炎がしんと味はふ

友よりの便りが届き便箋のかたへに淡く雨のあぢさゐ

訪れてひらと去りゆく蝶さへもコロナ禍の中うれしき客まじらひ

身に及ぶ被害なければ長引けば 傍観者にならずやこの戦争

## かなしみ

唐澤るみ子

燃ゆるごとひとみをあげて問ふてゐる幼な子あらむウクライナの地に

爆撃は青空を突きまつ黒な墓碑となりゆく雨降るごとく

みんな死んでしまいましたと折鶴を死体のやうに並べ置く夜や

憎しみが兵器を造り絶望が兵器を愛しひまわりは泣く

遠見ゆる杉の大樹の直立を我もするなり心弱る日

寂しくも明るくあらむと思ひしか箱に残されし桃のくれなひ

ひと朝を一生涯として生きるゆゑ青き炎となりて朝顔

知られないどこか遠くに国を持つうれしさありて澄むやひぐらし

崩壊が歴史を埋つめまた埋つむ永遠とに壊れぬ ものは かなしみ

ひとびとは眼を開けてゐる荒海が波のひとつひとつを鋭とぐ夜は



## われもこう

神野 規子

グローバルグローバルと尋めゆきて人は地球を崩し始めぬ

自給自足忘れし人らの間に芽生うコロナウイルス世界を征す

コロナとう風に吹かれて迷いをり母の齡を超えて冬なり

狂い咲く椿に花虻とぶ師走氣候変動ここにもありや

ヤングケアラーなどと言葉つかわれて秩序というも怪しくなりぬ

囀りのちがう鳥きて春を呼ぶ白鵲鴿が庭に飛びゐる

重ねゆく老いの春日は怠惰にてただ凡庸に生きるほかなし

存在を誇張するかにわれもこう花舗に置かれて足を止めたり

骨芽細胞われを上げます朝々にコツコツコツと背なをたたけり

ながらえて命のひまを塗りてをりやさしき塗り絵夏の花々

## 水の時間

島内 美代

みづからの落葉の上に影をひく裸木をつつむ冬の天つ日  
裸木のふところに遊ぶ山雀も落葉の上の影となりたる  
冬の陽に落葉は白くまどろみぬかけすの声を風に流して  
公園の裸木をさつと移りゆく栗鼠の不意打ち あつと声のむ  
落葉積む冬の公園に遊びたる余韻にきざむ春のキヤベツを  
藍といふしづけき色をたたへたる夏のはじめの中禅寺湖は  
開山の勝道上人の息吹とも華巖の滝の霧にぬれゐる  
九輪草めでゐる中より声がする「毒もつ花は鹿は喰はね」と  
九輪花の毒を見分ける鹿の生共に生きゆく高原の燦  
神橋の下を流るる水音の水の時間にひき込まれゐる

## 詩篇が涙

園部 恵子

オリオンの下に松扇若芽立ち侵攻といふ戦はじまる

桜木の夕日に赤き散りぎはをちりぢり燃やし何の祭りか

蟻・蜘蛛・鳩・憩はす柵の一木の葉影窓辺にわが夏のため

願へる者の平和は毀されやすく線状降水帯が蟻塚を圧す

戦・疫・危険な猛暑余所事に柵は日日実を太らせる

啼く・啼かず・むくろしづもり世の隅に幾代を継ぐ八月十五日の蟬

細く高くひびきふるはせ「生かせよ」と詩篇が涙するミゼレーレ

こゑにほひ消えにし者をかへしつ秋のひかりは際やかに澄く

理不尽に逝かされし者わたくしを返せと野辺に立つ曼珠沙華

軍神いくさのみの星墜つる日よ射干玉ぬばたまの四散を果てに松扇をはる

## 夏の果て

高橋 淑乃

夏の果て水引草がくれなるの花の穂ゆらす藪かげの径

気がつけば今はもう秋街路樹の百日紅の花もそそけぬ

気がつけば今はもう秋繁りゐし糸のころ草の穂も黄ばみたり

気がつけば今はもう秋やぶらんが薄紫の花の穂を出す

今は秋淀みし水もさらさらと流れてやがて川に入りゆく

上三川街道左右はみな田圃垂るる稲穂を見て車駆る

稗草のひそやかにしてたくましく稲田の中に丈高く立つ

セプテンバー今はもう秋防災の日を喚起する九月一日

庭隅の萩にも秋はめぐり来て紅の蕾が朝の露置く

台風の11号が沖縄に停滞してゐる 砂糖黍倒して

## ねこじやらし

田村世津子

百ひらく向日葵見上げ百揺るるねこじやらしじやらす方位なき風

しなやかに金色の花穂なびかせる尾花を恋ふるあいのこころぐさ狗尾草なり

レット イット ビー 構はないでとねこじやらし離り住む孫も伸び放題なり

ねこじやらし闇に食はれてもた黙ふかしかげは見えねど虫のしとねに

精霊を送りし静寂の月かげも山門の柱に寄りかかりをり

立待の月に濡れるしねこじやらし無人の駅に誰を待つらむ

秋あかね群れつつ暗きかげ落とす季はうつろへどいくさ終はらず

うおんうおんと風の音に添ふ草ぐさの叫びは平和の歌をつづけり

いろさびて吹かるるままのねこじやらし抜きて放たむうつし世の鬱

妥協して染められてます秋景のショーウインドーの真つ赤なねこじやらし

## 平和なる里

福澤 悦子

平和なる里の朝明けあえかなるオクラの黄きいが蝶を寄せゐる

翻るは花びらか蝶かうつつなく白と黄色の光交錯かけす

照りかける朝明けの庭に影なしてカラスアゲハはゆるやかに翔ぶ

むらさきの彩いよよ冴え咲き代はりさきかはり桔梗の花は咲き継ぐ

ウクライナ侵攻のニュース聞きし後露けき芝生の庭に降り立つ

心冷え聞く今朝のニュースウクライナ侵攻B A 5の感染拡大

ささやかな平和に足らひ生きる民を侵略する非道許し難しも

為政者のままに他国を侵す兵も無辜の民なり隊離るれば

他国を侵すはロシアのみならず核をめぐり世界を不穏な雲は閉ざせり

強国の暴走をとどむる術無きや国連の無力露呈せる今

## 鎧年越

増田 律子

賽の目に敷詰められし石畳固き拳の鎧武者立つ

先導の年端もゆかぬ乙女子は夜空の星を瞳に宿す

ひたぶるに鏖阿寺目指す稚児武者の顎あぎとの紐は華とむすばる

緋緘しに薙刀揚ぐる若武者の真一文字の口許凜々し

練り歩く兵革へいかくの群れ幾重にも参道埋むる年越しの夜（兵革は鎧兜の意）

烈烈と追儼へ向かふ物夫の不敵な笑みにひかる甲冑

俄なる若大将や娘武者山門前に士気高むらむ

うつつ代の坂東武者の打ち揃ふ戌の刻ばかりの南大門

如月の闇をゆらして間歇の雄叫び拳がる鏖阿寺の庭

境内をとび交ふこゑと豆礫鬼やらひの夜は弦月の冴ゆ



## 秋は来にけり

山崎緋紗江

枯れ葦のそよぐ川岸くろぐろと群れ寄る鯉のいのち愛しも

しらしらと季節はづれの雪ふれば想ふ巨大な地下シエルターを

夫や息を戦地に残し隣国へ逃れるひとらに雪ふりかかる

「太陽が見たい」と少女ふた月を地下シエルターに息つめ生きて

音たてて戦車は続く教科書に穀倉地帯とありし大地を

惨状に胸ふたがりて朝なさな居間の小さきののさまに祈ぐ

慣れてしまふことの恐ろし先の見えぬコロナウイルス ウクライナ侵攻

『方丈記』の大火に飢饉大地震あまた乗りこえ令和の世あり

コロナ禍の令和もおはぐるとんぼ来て朝明あさけゆらりと萩群めぐる

ひそやかに秋は来にけりうすべにのむさしの萩のはつか花咲く

## 庭の蝶

横山 岩男

菜の花の咲けば黄の蝶白き蝶飛びめぐりつつ花に隠れぬ

老ゆるとはかかるものかも書く文字の真直ぐに書けず書けなくなりぬ

うまきもの食ひたきものなくなりてリハビリつづくわが身となれり

老齡のわが身案ずる子らのゐて思へば父には何なさざりき

幼子は幼子ながら手を引かれ歩みゐるなり機能備はりて

リズム感ある生活をせよといふ圧迫骨折は認知症になると

五月末の暑くなる前にはコルセット外せるでせうの声にうなづく

膝痛み歩けなくなりしといふ人にうなづくわれの圧迫骨折

確かなる歩みとなるはいつの日か杖を突きつつ庭を廻りぬ

九十代生きむがための予行にか八十代は病み多くして

柔らかな日々

石井  
光

年の瀬の絶滅危惧種ちんどん屋  
膝に乗る猫と惚けて日向ぼこ

麻酔覚め窓一杯の花楓

遠足のリュック最後に虫めがね

子どもの日図書館でみる紙芝居

算数のドリルの厚さソーダ水

蝉時雨旧りて傾く道祖神

タクシーの行灯の列秋暑し

新涼や罐ふって出す薄荷飴

意気揚揚姉妹はるのこづちまみれ

## 花の雨

人見 靖子

ひと吹きのたんぽぽの絮風にのり

校門の半開きなり花の雨

かりかりとコーヒーを挽く春の雪

身を隠す所のなくて春疾風

陶の町巨大狸のかげろへり

カサブランカ巢籠りのこふの鳥

蛇使ひの笛はフルート春めける

五重塔上より翳り春の雲

強東風やこの特大の土竜塚

立春大吉ぼこぼこともぐら塚

## 植田

渡邊 公之

先頭の一羽頼りに鳥帰る

打ち立ての蕎麦揚げたての露の臺

夕映えの村ひろびろとして植田

那須裾野ひといろとなる青田波

ほうたるの呼べば呼ぶほど離れけり

見渡せば那須野ヶ原の稲熟るる

冷めてなほ甘し新米塩むすび

軒下の日差しの中へ柿を干す

賀状書き急に会ひたくなる人も

ふるさとの畦に兄立つ三日かな

二つの音

善林 真琴

うれしくて走る哀しくても走る

この家にふたり二つの音がある

さらさらと生きてく古希のイヤリング

常温に戻ると見えてくる景色

夢を買う街へ老女のローヒール

普通の日で終わるコロナ禍誕生日

衰えた二の腕見せて接種待つ

父の田を覚えているか土踏まず

田を終う老いた夫のひとりごと

成るように成るさと庭の落ち葉掃く

# 平和

柳岡 睦子

平和ってこんなに脆い筈がない

生きてゆくヒント雑音から拾う

太陽と会話のできる母である

蒲公英の綿毛を運ぶ風の夢

葉脈は性善説を裏切らず

肩書きが直立不動ばかりさせ

ブレーキが効かぬ他人の口である

物語紡ぐ今宵の星月夜

わたくしの虹は二色で満ち足りる

人間にとっても似合うのは平和



# 蛙の深呼吸

石寄 敬子

水仙の中に無口な顔もいて

葉桜の風日常を取り戻す

安否だけ伝えて去っていく蜥蜴

梅雨の間に漏れる蛙の深呼吸

沙羅双樹徳を修めた花落ちる

すり抜けてゆつくり落ちる生玉子

翳りゆく犬の清々しい鼓動

肅然として山茶花が物を言う

木漏れ日の欠片収まる胸ポケット

空っぽの犬小屋雨の年の暮れ

# 深む秋

水上 義明

秋冷に脳のスイッチ入れ直す

鈍行でゆるり味わう秋景色

コーヒーの香りと競う菊日和

模擬店に足が早まる文化祭

満月に心の裏を覗かれる

絵手紙にぶとう一房盛りつける

収穫のよろこび運ぶ猫車

歯切よいタンゴの曲に浸る午後

深む秋虫に急かされ冬支度

秋場所の千秋楽に握る汗

# 人生いろいろ

松本とまと

人生記だれでも主役主人公

信号が何時も点滅する旅路

苦しくて泣いている日は雨模様

「金」の文字カネと読んだら濁り出す

雑草のきれいな花が咲く小道

ひまわりの黄はなみだ色ウクライナ

困ったねロシアはきつと赤い雪

急逝を偲ぶ静かな水の音

ドラマチック光も影も人生譜

心洗う白いヤシオの花筏

## すぐに抱き合う

三上 博史

60分よりちよっぴり長い1時間

ハシビロコウ時間を止めて生きている

二、三日損したような風邪をひく

食パンの耳には耳の意地がある

チンパンジーお義理のような拍手する

近づけばすぐに抱き合うマグネット

いつまで途上なのか発展途上国

コロナ三年令和四年の豆をまく

神様はいそいでいない冬銀河

自由主義と呼べば怪しくなる自由

# 特集

安らぎー小さな集まりー

## トンボのように

神山 暁美

ふり向かない、戻らない。ツイットと羽音もたてず前に進む、トンボ。大きな複眼は二七〇度を見渡し、ときおり空中で停止飛行。前にしか飛ばない、飛べない。不退転の精神を表すとして、昔から武士の袴や袴の模様になれ喜ばれたという。本意にも昨年までの私の一万九百五十日は、トンボのように前に進むしかない日々であった。悔やまない、思い出さない、先のこととは考えない。立ち止まることも叶わず、ただ明日だけを見つめて生きてきた。神経の糸に囲われた繭玉の中に居るような、常に緊張を感じながらの重い毎日であった。認知症の義母の介護から始まった—その日は実の老父母へと続き、昨年、九十九歳の父を看取つてようやくピリオドを打った。重なることはあっても途切れることのなかった、たったひとりの奮闘の日々。この間に、義妹と夫までもが私の手から旅立って逝ってしまった。安らぎを感じる日など一日もない三十年間だった。

そんな中で、いまでも続けている「小さな集まり」がひとつある。毎月第一日曜日午後三時からの『読む会』。前身は『詩を読んで楽しむ会』で、二十年ほど前、詩人・高田太郎さんが宇都宮市江野町・ろまん亭から始められた。その後、小説、

俳句、川柳など、文学の自由な集まりに飢えていた人々が仲間となり『読む会』として、場所を宇都宮中央生涯学習センターに替え、いまでも変わらない。私が自分の時間のない身で続けられたのは（出欠連絡不要）の六文字に尽きる。突発事項が起きても連絡の気遣いはせずに済む。だが、緊張の網の中での参加は「安らぎ」というには、ほど遠いものであった。おとな四人と秋田犬が住み、施設からの外泊で義母が過ごし、義妹が—実家—と称して帰ってきていたこの我が家。時には息子家族も泊まれた広い家に、いま父が遺していったオカメインコと私だけ。週に一度、すべての部屋を開け放し大掃除をする。鉢植えの観葉植物に水をやり、庭の花を切つて飾る。そして、いまや日課となった散歩に出かける。四葉のクローバーを探しながら、田園風景の中に自分を置く。緊張の糸はすべて解かれ、ゆるりとしたひととき。自分のことだけを考えていればよい現実。これが「安らぎ」か、とふと思う。

前からやって来る運命は、避けることも立ち向かうこともできる。だが、宿命は後ろから不意に肩をたたき、という。去年までの長かった日々は、まさに宿命。子が親を看取る行為は人間にしかできない尊いこと。それを成し遂げた満足感はある。自負もある。これで人生を完璧に終われたという気さえてしている。これからの私の運命。時は止まらずやってくるが、今までは全く異なる毎日。はるかに軽い。トンボのようにツイットと飛べそうな気分だ。ふり向かない、後悔しない、思い出さない、引き戻されない。やはり、まっすぐ前を向くだけ。残された運命の道先へ先へと、今度は自分の意思で進んで行く。ささやかな安らぎのときを支えに。

# かずおちゃんのスツマイモ

## 人見 靖子

今でも夏になると、忘れられない思い出がある。

三才の夏、疎開先の池の石の上、蛙を呑み込もうとしているそれはとても大きな蛇だった。蛙は頭から呑まれ、手足をばたばたさせて跳んでいた。私は、はっとして身動きも出来ず、ただその一点を見つめていた。

しばらくその強い印象から、逃れられなくなった。

今でもあの時の事は、鮮明に覚えている。

ある日、その池のある家の二階から見下、空を真っ赤に染め近くの山へ沈もうとしている夕日。

そして、鴉が二羽啼きながら、啼へ帰って行くのだろう。その光景は、まるで絵本のようにだった。

「夕焼け小焼けで日がくれて」、自然に口ずさむ。

家の前の短い坂をくだると、左側に三つも土蔵のある農家のわきへ出る。「他所のお家へ行ってはいけませんよ」と、うるさく言われているので、ちらちらと覗くだけだった。

ある日、その農家の子に、「おいでよ」と呼ばれた。

嬉しかったので、ついに行った。

土蔵の前迄来ると、その子が、いきなり土蔵へ「入れよ」と言った。その中に何が入っているのかと気になっていたの、恐る恐る、薄暗い土蔵へ入ってみると、今まで見た事もないほどのスツマイモが、山と土間に積まれていた。

蔵へ「入れ」と言ったのは、同じ年頃の色黒の男の子。

かずおちゃん。かずおちゃんは土まみれのスツマイモを胸にこすりつけて、「そら、食え」と私に突き出す。

すなおに貰った。「かじれ」と言うので、かじった。

なんとも言えない味が口中を支配する。

まん中ごろまでかじると、ほんのりと赤い色が現われた。

「甘かんべー、それ、あんこイモだぞ」とおしえてくれた。

疎開先、陶の町、益子。

今はキレイな町並で、ステキなレストランもある。

当時、町のメイン道路は、大きな石ころだらけ。

牛や馬の糞が山盛りころがっていた。誰かが言っていた。

「馬糞を踏むと、背が高く伸びるぞ」って、だから私、思いきって踏んでみた。それは新しくって、やわらかかった。

昔の益子は、大八車を牛や馬に曳かせ、キセルの煙を吐きながら、ゆったりと時が流れていた。

そして、初めての友達、かくれんぼをしたり、生のスツマイモ「食ってみろ」と言った。疎開先の子、「かずおちゃん」。



# 夕焼け

いぎやま きお

目の前の魔法のような夕焼けを見て、「明日も晴れる」と子ども心にほっとするものを感じたものだった。陽が傾き、あたりが暗くなりはじめると、誰からともなく「ガラスがなからかあえろう」と夢中だった遊びをやめて、家に向かって走りだす。家にかえれば母がいる。せまい家でも懐のような温もりがまっていた。

大人になった今でも西の空が夕焼け色に染まると、なぜか仕事をやめて暗くならないうちにと家路を急ぐ。家に着いたところで、かわりばえしない日常があるだけだが、夕食を待つにぎやかな家族がそろろう。

いつだったか、妻の十八番である料理「五目ちらし寿司」が夕食にでたとき、おひつの香り立つ湯気に私も子どもたちも、思わず鼻から息をすいながら「うまそう」と声に出してしまったことがある。それからが大変だった。

子どもたちの茶碗がかちあい、おひつの湯気がおおきくゆれる。ゆっくり味わえばおかわりがおくれると思うのか、にぎやかなやりとりに一喜一憂したものだ。うるさいほどの子どもたちの声も、今となっては聞くことができない。

「夕焼けがきれいね」妻が手をかざしながら話しかける。真っ赤な太陽が稜線にかくれようとしている。もう家路を急ぐことはないが、それぞれ家庭をもった子どもたちはどうしてい

るだろうか。どんな夕食の風景があるのだろうか、にぎやかだったころを思いだしながら、陽が沈むまで西の空を見上げていた。

# 「集い」を楽しみ 「書くこと」を楽しみ

大出 京子

「栃木自分史友の会」は、自分史を書くこととする人びとの集まりである。誕生は平成二年一月。月に一度、宇都宮市岩曽にある井上総合印刷所の「娯楽・研究室」で勉強会を開いている。勉強会は会員の作品の合評形式で行われる。

その結果を掲載しているのが『つれづれ栃木』(A5サイズ)で、年に一度出版される。第一号の出版は平成二年九月。その折に出版記念会が青年会館で開催されている。

記録を辿ると、出発当初は八十人もの会員数だったようである。令和四年の現在は十五人。少人数になったが、出発当初からの会員も健在で、勉強会は充実している。当然のことながら、発表されている作品は何を書こうとしているのかが伝わる、読みやすく理解し易い作品揃いである。

会員の大半はリタイアした男性だから、構成会員の平均年齢は高い。そこに二年前、男子大学生の入会という珍しいことがあった。以前からの会員との年齢差が気になって当人に訊いてみた。

「気になりません。皆さん自己主張が強くて面白いですよ」の返事には、思わず笑ってしまった。笑いながら、この若者は、書くことが好きなのだ、親近感を覚えた。卒業が近くなった今も、地道に書き続けている。

親睦を図るため、会は年に二度、宇都宮市のロマンチック村で宿泊研修と銘打って勉強会を開く。いつもの勉強会と違って家族的な雰囲気の中で合評が進む。高齢になったが、何か参考になればと、私はささやかな資料をプリントして持参する。役に立っているかどうかは別だが、私自身の生活の句読点になっている。

年齢は先にあげた大学生とは大分離れているが、この集まりに小山市から自転車飛ばしてきた男性がいる。あの時の合評会は賑やかだった。『つれづれ栃木』にその雰囲気までは載せることができなかったが。

文章は全身で書くものではないだろうか。僅かな文法的誤りは意欲と好奇心でカバーできる。と言ってもやはり、可能な限り文法的に誤りの少ない文章が望ましい。それを学べるのが作品の合評会であり、更にそれを乗せるのが『つれづれ栃木』である。和気藹々、気が付いたら会は三十年の余も続いている。

背後に、家族的な会員同士の付き合いがあるせいだろう。自分の畑で穫れた新米を分けてくれるお仲間、奥さま手作りの栗の渋皮煮をお茶うけにと、テーブルに広げるお仲間など、合評会に伴う楽しみが多い。

号を重ねて、令和五年には、三十二号の出版が予定されている。機関誌のカバーは毎号、会員の作品(写真)が使われる。宇都宮市の西、鶴田沼で撮ったダイサギの写真や、田んぼを利用しての、どんど焼きの情景など。

来年が待たれてならない。

# ファンクラブ

石寄 敬子

この世の片隅に誰の邪魔にもならないように石寄敬子ファンクラブが存在する。十年ほど前に私自身が作ったファンクラブ。我ながら痛い話である。

学生時代の私は面倒見のよい姉御肌で後輩を連れ回し、ジャージ半纏姿で京都ライブを謳歌していた。いつまでもこの生活が続いて欲しいと思う一方で、卒業したら全てと決別しなければならぬという覚悟を持って必死に遊んでいた。宇都宮へ帰って来て二十五年、私は何度友人から連絡をもらおうと当時の集まりに顔を出さなかった。それが十年前にとうとう重い腰をあげた。子育てが一段落したのと、ずっと誘い続けてくれた友に心がなびいたからだ。

久しぶりに京都を訪れた。始めこそ緊張したが、みんな大学の校歌を歌った瞬間、タイムスリップしてしまった。朝から晩までつるんでいた混声合唱の仲間たち。あの頃毎日歌っていた校歌は二十五年歌わなくても体が覚えていた。

その後宇都宮に戻ってきて、私は後輩二人にメールを送った。

ファンクラブに入りませんか。

入会の条件

- 一 入会金一口十万円（出世払い可）
- 二 私の葬儀には必ず参列すること

このくだらない呼びかけに二人はすぐに反応してくれた。十年で十名の会員。朝の通勤電車の中から「おはようございます。今日は出張で名古屋に向かいます」とか。仕事帰り「今日は結婚記念日、妻に花とケーキ買って帰ります」とか。何ヶ月も音信がないこともある。だいたいそういうときはまめな後輩が「今年も来てます、えべっさん。そら、本戎やわ、よーさん来てはります。ええ福持って帰るで、待っててやー」と写真添付で話題を提供してくれる。

いつの間にか私はファンクラブの中で、教祖様と呼ばれている。定かではないが、おそらく私が言い出したんだろう。「教祖！誕生日おめでとう」「教祖に触発されて俺もSF小説書き始めたぞ」など、ラインが入れば「なんだ呼び捨てか」とひと言返信する。

みんないい歳になり、肩書きが増えた。支店長、先生、編集長、お父さん、お母さん。だからなのか。肩書きのない、宙ぶらりんのあの頃が無性に愛おしい。

いまだ出世の途中なのか、入会金を払った者はいない。こんな条件があると知らない者もいる。ままごとなのだから何でもいいのだ。私が教祖様になって、ごっこ遊びの社会が形成された。誰にも迷惑かけないように、道の端を歩くように、私たちは静かに遊んでいる。

# 家族の団欒

高橋 淑乃

小さな集まりは家族である。家族の団欒が私の原点である。その始まりは夫婦二人だ。父と母が出合って私が生まれ、妹、弟、弟と四人姉弟の六人家族だった。私が長女で昭和六年生れである。家族六人肩寄せ合って暮らして来た。

父は陸軍の仙台幼年学校、士官学校、陸軍大学校まで出たエリート軍人であった。従って満州事変、日中戦争、太平洋戦争と日本の十五年戦争にどっぷりつかった時代である。

終戦の時、父は台湾にいた。母は那須烏山市の出身で、烏山の屋敷町に祖母が住んでいた。家屋敷は広く大きく、子供達は皆家を離れて、祖母一人と女中がいた。母と私達姉弟四人は、昭和十九年四月祖母の家に疎開をして世話になった。

私は栃木県立第一高女の二年生で烏山実践女学校に転校した。疎開者が多く編入がなかなか難しいとして、祖母が骨を折ってくれたと聞いている。そして翌二十年八月終戦を迎えた。

その秋、父が復員して来て一家は宇都宮に戻って暮らし始めた。父は戦犯で公職には就けず、生活は苦しかったのを覚えていいる。それでも子供達にはそんな様子は全く見せなかったのは父の偉い所であった。当時、金太郎飴と言うのがあって父は上野のアメ横あたりでそれを仕入れて来ると、夜子供四人と一緒に長い飴を二センチ位に切って紙に包み、翌日、自転車ですりに行くのであるが、子供達はお駄賃として飴が

いただけた。だからその手伝いは少しもみじめではなく、むしろ楽しかったのである。母は学生服のボタン穴かがりや、ボタン付けの内職をしていたので、私も学校から帰るとすぐに母の内職を手伝った。貧しいけれどよい勉強をしたと思っている。子煩悩な父と優しい母であった。又、或る時は百人一首を取りながら、小野小町や、紀友則、貫之の名歌の話に花が咲いた事も懐しい思い出である。

妹は絵が好きで上手であった。自画像を画いて日本水彩画展に入選した事もあった。美術学校に行きたかったらしいがとてもそんな余裕のある筈もなく諦めていた。

姉弟四人元気で成人し、家庭を持って、年に何回か両親の家に集まり、わいわい騒いでいた日々を懐しく思い出す。

孫達も生れて総勢十八人になっていた。父母が他界し、私も長男を亡くし、妹の夫、私の夫、妹と次々にいなくなりました。集まるためには世話係がいる。その世話係の長女の私が九十一歳となり、何も彼も面倒になってしまったのは淋しい事であるが、今回、思い出の一端として書いて見ると何か愉しい気分になり、又、どこかで小さな集まりを持ち、姉弟で両親を偲ぶのもよいかな等と考えている。

# 今が一番いい時

松林 厚子

実家は竹やぶに囲まれた山寺だ。コロナ禍になって、法事は簡略化される一方だが仏事に会食は付きものであった。

葬式という隣組の人たちが集まり、精進料理を調理した。年かさの女たちから若い女たちに料理は伝承されて、野菜のてんぷら、根菜とこんにゃくの煮つけ、白和えなど、テーブルの上には大皿の料理がずらりと並んだ。

女たちはおそろいのエプロンをつけて、台所でかいがいしく働いていた。

小学生の頃の私は、外の台所でもかまどの火の番を仰せつけられた。わざわざした雰囲気の中で静かに燃える火を見るのが好きだった。

私が中学生頃になると、会食に手作り料理はほぼなくなつて、仕出し料理を頼む檀家さんが増えた。

本堂で法要が行われている間に、料理屋さんが来て客間のテーブルに小ささまざまな皿に料理を並べていった。法事に参列した人たちは、喪服でにぎやかに食事をしていた。

会食が終わると、母、姉、私の三人で食器の片づけをした。母はお客さんたちにお茶を出したり、法事の打ち合わせに同席したりと忙しく、姉と二人で片付けることもちよくちよく

あった。

客間には、座布団が敷き詰められたままで、料理の残り香がただよっていた。どこからともなく線香の香りが飛んできて、何やら混然とした香りが充滿していた。

姉も私も、やる気がなくなつて、座布団に寝そべった。一つの座布団を折り曲げて枕にして、おしゃべりが始まった。

さぼっている、という感覚が妙な興奮を覚え、話は止まらなかつた。そこに、読経を終えた父が法衣のまま通りかかった。怒られるかな、と焦ったが、父はにこにこ笑っていた。

「おまえたち、幸せだな。今が一番いい時なんだよ」

「なんでよ。なんで今が一番いいの?」

「子どもたちはみんな成長したけど、まだ誰も結婚してないだろう。これから、それぞれ結婚すると家族が増える。いわば、他人がはいってくるわけだ。覚えておきなさい。今が一番いい時なんだよ」

独身時代、親に守られていたのに、それにちつとも気づけなかつた。お父さん、本当にあの時は一番いい時だったね。

一日だけ過去に戻れるなら、あの日に帰りたい。

# ご近所の灯り

高橋 曉美

一昨年、運転免許を返納し車を手放した。足を鍛えなければと、ウォーキングを日課にするようになった。

折しも、コロナ禍になり会合、サークルなどが休止になり、友人とおしゃべりを楽しむ食事会もなくなつた。

家にも普通になつた。元々インドア派なので一人でいることは苦にならないが、一日中、誰とも会わず、おしゃべりは電話だけとなると、気が滅入る。

ウォーキングは誰かと会えるいい習慣になつた。

通り道には、以前食堂をやつていたご夫婦の家があり、話題が豊富だ。杉並木近くに住む、庭の植木に水やりをしている女性と花の話をしていると、犬の散歩中の同級生が加わつて、草花や孫の話に時のたつのを忘れてしまう。

中でも楽しみなのは、一軒おいた先の男性が、魚の世話をしているのに時々出合うことだ。彼は軒下に十数個の水槽を並べ、メダカと金魚を飼育している。

車で彼の家の前を通つていたころは、あいさつ程度だったが、水槽を覆っているよしずをはずして、魚の世話をしている彼に思いきつて話しかけ、だんだん打ち解けた。

小さくてかわいメダカは、生まれてすぐに親から離さないと、親に食べられてしまうので気配りが必要とのこと。

金魚の種類も教えてくれた。

尾びれ、背びれが優雅で、丸みの強い腹部と小太りの体型の「琉金」は、人気があり高価だと知つた。「ピンポンパール」は名前の通りピンポン玉のような丸いフォルムだ。うろこがパール状で美しく、尾が短めで愛嬌がある。寒さに弱いので冬は室内の日当たりのいい場所で飼つているという。

彼は魚のことを説明するとき目を輝かせる。メダカを掬い上げたり、金魚の水槽をていねいに洗っている姿は、まるで少年のようだ。

はず向かいに住んでいる男性が話に加わつて、魚談義から昔の話になることもある。

彼は越後から酒造りに来て、この地に住み着いたという。私の実家の前に造り酒屋があり、冬、酒の仕込みが終わると酒蔵から杜氏と蔵人らの祝唄が聞こえて来た。なまりのある哀調を帯びた唄に聞きほれた思い出がある。彼が当時の蔵人の一人だつたと知り、親近感が増した。

ご近所はほとんどが高齢者で、私と同じひとり暮らしの女性が多いので、見栄を張つたり上下関係を感じたりすることもない。約束のいらぬ、時計を気にしない集まりは心地いい。別れ際のあいさつは

「お互い助け合おうね。何かあったらすぐ連絡してね」

夜二階の居間から見えるご近所の灯りは温かい。皆のマスク越しの穏やかな笑顔や、魚たちの可憐な姿が浮かび、連日の不穏な報道に鬱屈した気分を、優しくほぐしてくれる。



# はじめての夫婦だけの生活

小林千枝子

気がつけば「高齢者」。そう言うほどに人生を疾走してきたわけではないが、それなりに夢中で生きてきた。今、六十五歳で定年退職して二年半になる。晩婚ながら結婚して、母と私の二人暮らしのところに夫が入って三人家族になった。晩産ながら息子ができて四人家族になった。母が九十一歳のとき施設に入居したが、私は毎日のように母のもとに通った。日曜日には親子三人で母を訪ねた。コロナ禍で面会ができない日が続いたことから、家で母を介護することにし、介護用ベッド、車いす、スロープなどをレンタルした。そうして四人暮らしに戻ったが、間もなく息子が大学生になって東京へ出た。続いて母が急な発熱で入院。退院後、訪問医療等の手続きをして、在宅介護を続ける計画だった。なのに、母は一月もたらずに息を引き取った。夫と二人で看取った。諸手続きが済み、母の一周忌法要も無事に過ぎた。夫婦二人だけの生活になった。はじめての夫婦だけの生活。ずうっと夫婦共働きたったので、夫は家事を分担してきた。私には専業主婦の経験が、育児休業時以外にはない。コロナ禍ゆえ夫の人との接触を減らすべく、弁当は私がつくってもたせている。退職後、私に増えた家事はそれだけで、私がかつてのようにも、夫は変わらず家事を分担している。

私は近場の研究会に参加し、ズームで研究会や学会にも参

加している。これまでもやってきた趣味の書道、種々の書きものなど、私にもやりたいことがたくさんある。そのうえ、自宅庭の一部を畑にして野菜づくりをはじめた。金銭を得る仕事はしていません、日々忙しい。

四歳年下の夫はまだ現役の大学教員。職場結婚のため、夫の仕事の様子は想像できる。夫が仕事から帰れば、私はその日にあったことを話す。夫から仕事の話も聞くこともある。母の思い出話もある。唯一の生存する親となった夫の話もする。そして、つまらないことで笑い合う。息子とは月末にズームで家族会談をしており、それを翌月の生活費や住居費を親が担う条件にしている。だから息子も、意外に身近な存在で、夫婦の話題に上る。毎朝、二人して、仏壇に、母の遺影を見ながらお茶を供えて線香をあげる。子を想い、背後に亡き母のいる、この夫婦生活は、私の日常でもある。

生活にはいろんなことがつきまとう。それゆえにこそ離婚も激しいさかもし生じる。夫婦とて互いの人間性に疑問を抱くこともあるだろう。私たち夫婦とて平穏なばかりではなかったが、結果的に、長い間、苦楽をともにしてきた。なぜか、このところ夫の顔が柔和になってきたように感じる。

お互い、学生時代以来の仲間がいる。コロナ以前には、夫は年に二回は東京まで飲み会に行っていた。私にも二、三年に一度ともに旅をする仲間がいる。それでも、子を想い亡き母も抱える夫婦は、私には、新婚とは違う、他に代えがたい安らぎの、文字通りの小さな集まりである。



# アコースティック・ギター

福富 陽子

春先に中古ギターを買った。年代物のYAMAHA・FG110というアコースティックである。

若いときとちがって、かつて叩いていたドラムを再演する筋力もなければ気合も動機もない。そこで思いついたのが独り遊びのできる相棒、ギターだった。

初心者としてコードの練習から始める。近い目標はスリーコードで弾ける曲をコピーすること。そして歌詞を乗せながら唄う。といつても人前で披露するのが目的ではないから下手でも大丈夫。

三か月前のこと。近所に住むシローさんが中今泉町にある中古ギター店でアコースティック・ギターを買ったという。私を買ったのも同じ店である。ギターの調子が悪ければすぐに対応してくれるので安心だ。

シローさんは七十歳を過ぎてもテニスや合気道をやっけて健康体の持ち主である。それでギターも始めたとなれば、努力家だけにすぐにうまくなると予想される。しかし、人生で初めてギターを手にしたというシローさんが日に日にうまくなっていくのを傍観しているわけにはいかない。なぜなら、私にとつてギター購入は実は初めてではないからである。

十五年ほど前、フェンダーのエレキを衝動買いしている。その出来事を言い換えるならアンチ・ストレスの賜物。楽器

店の前を通ったときに一目惚れしてつい買ってしまった。もちろん月賦買である。実際高価だった。それほど当時の仕事、人間関係に心が折れていたのかもしれない。

菓の代わりにギターを掴んでみたのかな。

結局、ツェペリンやパープルのヒットした曲のサビのところをピックで弾いては悦に入る日々。弾いてウサを晴らしていたが、そんな戯けたことは長く続くわけもなくじきに終わった。以来、再生不可能な心境もひっくりくるめてフェンダーはクローゼットに仕舞ったままだ。

たまにシローさんにお尋ねする。「アコギのほうはどうですか？」すると、「いやあ、まだまだ。ユーチューブ見ながら、ちよつとずつ弾いているだけ」といういつもの答えが。

今はコード弾きでも、そのうちアコースティックのやわらかい音のひとつひとつを迷い子にさせぬよう弾き通せたら、あのとき閉じてしまった心も再生できるかな。シローさんとユニットを組んで演奏できたら、なおうれしい。

## ある小説と

# 表紙の木版画との再会

高杉 治憲

(一) 栃木県文芸家協会の元会長で、今は亡き松本富生先生が急逝されたのは、二期目の会長任期満了まであと一か月のことだった。当時、事務局長だった私は松本会長に従って同じく四年の役目が終了しようとしていた。私の場合は、次に事務局長を託すことができるのはこの人しかいないと、早稲内から懇請して承して頂いていた現局長兼編集委員長の三上博史さんのお蔭でスムーズなバトンタッチが出来て今でも感謝を忘れることはない。その感謝の一端として三上さんに提案して始めたのが、自らが経営する南平台温泉ホテルのロビーにある『読書コーナー』の一郭に開設した栃木県文芸家協会各員の著書ライブラリーである。現在、新旧会員各位の作品五十点余りが展示されていて多くの温泉リピーターの楽しみとして読まれている。コロナ禍によって、「袖すり合うも多生の縁」という日本古来の風情と習慣が薄れた感があるにしても、言語と文字、手紙、そして文学とのふれあいは取り戻したいと願っていたところ、件のライブラリーに纏わる小さな奇跡のような出会いが舞い降りてきたのである。

(二) その序章は二〇二二年五月、我が南平台温泉ホテルに時々来館されている小山市在住の木版画家という方の一通の手紙から始まった。そこには、『貴兄のライブラリーに展示

してある小説（松本富生作品『慟哭の余笹川』）の表紙は私の木版画の作品です。大好きな那珂珂町の南平台温泉で自分の作品を表紙にした小説と再会できた喜びは一入で、記念に作品の原画を呈呈したので小説の傍に展示して下さい」と書かれていた。このサプライズに感動した私は、送られてきた木版画家富張広司先生の作品原画『花一輪・余笹川』を故松本富生先生の本と並べて展示した。因みに、富張先生の木版画を表紙にした松本作品は他にも一冊、『風の通る道』であることが分かりその原画も展示した。その写真を送り御礼と共に私と南平台温泉創業オーナーの故神場多巳一父娘との出逢いと結婚から今日に至る経緯について返信し、合わせて自らの著書を自己紹介の心算で送付したのである。すると、富張先生から御礼と共に今度は夢のような提案と懇請が寄せられた。「私は画業六十年を超えて今八十六歳です。大好きな南平台温泉の近くに大好きな那珂珂町馬頭広重美術館があります。仮に、私の木版画を纏めて南平台ホテル内への展示が実現すれば広重美術館との相乗効果で日本の伝統芸術『木版画』の発展普及に貢献できると思います」と記されていた。その後、この話がとんとん拍子に進み、九月二十九日、南平台温泉ホテル旧みなみ座ロビーに『富張木版画館』がオープンする運びとなった。恩師、松本富生先生の作品は全て深くて重厚なテーマである。私は、この小さな奇跡のような巡り合いについて作品に手を合わせて報告した。「先生、温泉が繋いでくれたご縁で慟哭の余笹川に、花一輪が咲きましたよ」すると、破顔一笑のあの富生スマイルが浮かんで見えた。

# お友達になりましょう

古谷 耀子

年度初めに、地域の自治会で企画した「川柳の会」への会  
員募集案内が届いた。

しばらくそのまましておいたが、大病を克服した兄からの、  
「あなたも家の中にばかり居てはだめだよ。何か新しいこと  
に挑戦してごらん」との助言を思い出し、印刷物を手に取っ  
た。読み進むと、じょうずな誘いの文章に心をくすぐられ、  
最後まで読み終わってどうも落ち着かない。参加したい思い  
と、尻込みする気持ちが交差する。

講座の開かれる前日になって参加を決めた。電話で申し込  
みをする時、受付の女性は私の口調から迷いを察したらしく、  
「心配いりませんよ。誰にでもできますから大丈夫です。楽  
しんでくださいね」と、背中を押してくれた。

開講の日、台風の影響であいにくの悪天候だったが、予定  
通り会は開かれた。

講師は私の家の近くに住んでいる高齢の女性で、これまで  
にも別の会合で顔を合わせたことがある。十数名の受講生の  
殆どは、ご近所さんであることを申し込みの時に聞いて知っ  
ていた。

〈顔見知りばかりなのだから、緊張する筈ないわ〉そう高を  
くくっていたがとんでもなかった。

家を出る時からすでにソワソワしていたのだろう。肝心の  
マスクを忘れて受付で譲ってもらったり、会場まで車で送っ  
てくれた夫からは、

「家に帰ったら、玄関の鍵がかかって無かったよ」と、あき  
れられる始末。

教室に入ると、まだ誰も来てなかった。壁際に積まれてい  
た折り畳みの長テーブルを引っ張り出し、一人で組み立てて  
椅子を並べていると、気分はだんだん学習モードに切り替わ  
り、背筋が伸びる。

やがて講師が登場して開口一番、

「皆さんこんにちは。今日からお友達になりましょう」  
そう言って微笑んだ。

「異議あり。お友達では無く、師弟の関係でお願いします」  
私は思わず言いそうになって、〈勇み足は厳禁〉と自制する。

これまで、川柳とは人事や世相を捉えて、ユーモアや風刺  
を交え、十七音で表現するものと思いついてきた。私はそれ  
らのセンスに欠けているし、想像の斜め上を行く柔らかな思  
考も苦手としている。入会を躊躇したのもそのことだった。

ところが今回、殊更そのことには拘らなくても良いと教え  
られ、ホッと胸をなでおろした。

コロナ禍のなか始まった地域の「川柳の会」、講師の挨拶、  
「お友達になりましょう」は、正に名言だった。皆、すぐに  
仲良くなり、講師が読み上げる友の句に、爆笑したり頷いた  
り大いに楽しんでいる。

# 一人きりのグループ

安西 悠子

「グループ」というのは、複数の人達の集まりのことである。私の「グループ」は、私、たった一人なのである。グループをつくっていた仲間たちは、現世には、具体的な形をもっていない。肉体は滅び、精神だけが、私の周囲にあるのみである。

村部弘子さんの御子息より、涙声の電話があった。立派な青年の彼は、途切れ途切れの言葉で、「母が他界してしまつた。湯舟の中で倒れていました。」と、伝えて来た。「母は、温泉が大好きでしたが、お湯の中で命を絶ちました。」その言葉は、私を、一層悲しくさせた。彼女は、私より一歳上で大正十五年（一九二六年）生まれであつた。五年制の女学校を卒業した彼女は、小さなグループの中心で、穏やかな思考は、私達のまとめ役であつた。昭和二十年（一九四五年）の三月九日の深夜の大空襲の後、グループの人達を連れて、私の寄留先、深川森下町に来てくれた友である。九日、深夜、彼女は、世田谷の自宅の窓から、下町がB29の爆撃をうけて真赤に燃え上るさまを観たという。翌十日、私は登校しなかつたから、あの炎の中で、私は生きてはいられなかつただろうと予測し、グループの人達を連れて、まだ白煙けむる罹災地に来てくれたのだ。交通機関は全部ストップしていたから徒歩で、渋谷から隅田川に架かる新大橋を渡って私の為に来てくれたのだ。

鈴木壽美子さんは、卒業と同時に、弾劾裁判所に勤めた。敗戦直後、この役所は、赤坂離宮の一階の一室にあつた。私は、用事で上京した折は、彼女の事務所を訪れた。彼女は、係の人から鍵を借りて来て、離宮の室々を案内してくれた。「インドの間」は、比較的、小さい部屋であつたが、天井から、壁面、調度品、すべてが、印度風で、エキゾチックな趣のある美しい部屋であつた。中規模の舞踏会が開かれていたという広間は、床の絨毯だけが、過ぎ去りし日の栄華を偲ばせていた。

木崎王美さんは、生れも育ちも八王子で、卒業と同時に、高校の教師となつた。それから間もなく、急死の報せが届いた。家族の方と連絡がとれなくて、どんな状態であつたのかわからなかつた。彼女は、実に熱心な学生であつた。夏休みの宿題のレポートは、内容の濃い立派なものであつた。

高田尚子さんの御子息が、ある日突然、長道中を車を駆って訪れて来た。彼女は、故郷の常総市に住んでいた。学生の時は、茨城県のどのあたりの駅かわからないが、常総鉄道で通学していた。御父君が、常総鉄道の重役であつたと聞いたことがある。志賀直哉の父親も常総鉄道の重役であつた。御子息の無情の訃報に共に涙した。鬼怒川が氾濫すると、彼と、彼女の家は、洪水に見舞われないだろうかと案ずる。

現実には、たった一人ぼっちのグループであるが、私の周囲には、いつも、グループの彼女たちが話をかけてくる。

# 趣味の会

紙屋 里子

学校を卒業して三十六年間公務員として働いてきた。その間色々な事があつた。一言で言い表せる程単純なものではないが、無事に終える事が出来た。

さて、仕事を辞めてからが大変。やりたかつた事が沢山あるが、忙しくてなかなか取りかかれなかつたものをやらなくてはならない。唱歌教室、料理教室、小説講座、ヨガ、川柳の集い、ママ友の集まり等色々楽しい集まりに行き始めた。勤めと違い、色々な人たちの集まりなので、楽しかつたが、退職して四年後、義兄が亡くなり主人の故郷に帰つて来た。関西から関東に来たのだ。今までの集まりのようなものはあまり無い。小説講座は隣県まで探しに行った。栃木に来て見つかつたので十年近く通つた。でも体を壊してしまい、行けなくなつてしまった。それでSNSで探して何とか良い講座が見つかり現在も進行している。

でもいくら遠くに通えなくても、人との集まりには参加したいと思い広報をくまなく探し川柳講座を見つけた。関西にいますとき川柳の集まりに行つていたが、関東に来てからは、投句をしていただけだ。郵便で送り送られてくるだけだと物足りない。広報に出ていた講座に行き、人との交流もあり楽しかつた。講座が終わるとき、この地域に川柳の会は無いか講師の人に聞いた。すると友達が会長をしている会があると

言つて紹介してくれた。

会長さんのところに電話をして次の会の場所と日程を聞いた。川柳講座に行つていた人が私を含めて四人来ていた。その次の講座では二人になつた。残つた二人は今も続いている。川柳の会は関西にいた時と同じで自由な雰囲気の間だ。例えば一字一句違わない同じ句が出たら、二句共取り上げる。五七五の短い川柳等は、そんな事はあるのだという。昔の作家が作ったものと同じ句を作つて盗作だと言われたりすることがあるが、たまたまそうなつた場合が多いという風に。

関西と関東の川柳は微妙に作り方が違う。関西はその素材に入り込むのに対し関東はさらりと読む。それもまた楽しい。会に入り一カ月程して、懇親会と新人歓迎会とを兼ねて楽しい夕食会をしてくれた。一緒に入ったもう一人の人は体を壊して来なかつたのが残念だつたが。

あれから三年になる。今は新型コロナ禍で郵便で句を送り機関誌は郵送される。早くコロナが収まり集まりに行ける様になる事を願っている。

# 人の輪 活力の源

福澤 悦子

山峡の村を夕闇が包む。ひとつまた一つ、家々に灯がともり、ひとしきり和やかな語らいがあり、やがて灯が消え人々は安息の眠りにつく。そして朝明け。人は目覚め、動き始める。平和な村の変哲もない日々の繰り返し。これが私を育んでくれた原風景。何物もこの平安を侵すことはない。私は、このような村に、温かい家庭という輪を根幹として、様々な人の輪に支えられて八十余年を生きてきた。

通学の輪、クラスの前、趣味・奉仕活動の集まり。その場だけの輪、コロナ禍の中で消えていった輪、今も続いているもの。全てが私の生を明るく充実したものにしてくれた。私をその様な輪の中に包み込んでくれた一人一人に「ありがとう」と言いたい。

私は、自然を愛し、旅を愛し、文学特に短歌を愛し、謡曲仕舞いのめり込みながら、自由気ままに自分の生を満喫してきた。そして、そのための活力源となったのが、…の友という小さな集まり、人の輪だったのである。

コロナ禍の制限を受けつつも、現在も続いている私にとって大切な輪は三つ、語りの会、短歌の会、そして謡曲仕舞の会である。この三つが、乗り越えねばならない目標を突き付け、プレッシャーをかけ、私を奮い立たせる。

出版物を通しての交わりも深く長い。月刊の短歌誌「短歌

木立」との交わりはほぼ五十年、年刊の文芸誌『朝明』に入会してから既に十年余りになる。原稿の提出期限も待ったなしの厳しいプレッシャーとなる。

ジャンルを超えた文芸誌『朝明』は私にとっては新鮮な刺激であり、驚きであった。年ごとに特集を企画し、短歌以外に随想の作品の発表の場をも提供してくれる『朝明』は、これからも無くてはならない存在であり続けたいと思う。



# 大舞台で八十五歳は歌う

舘野ひろ子

昨年、一昨年と、コロナの感染を案じて果たせなかった、大舞台でのミュージカル・フェスティバル。今年は昨年よりコロナの状況は良くなかったが、透明のマスクをつけて歌って踊って演技しての発表が行われた。

参加者、総勢子どもから大人まで二百余名。一同が舞台上で写した写真が今机の上に飾ってある。

八月十一日、総合文化センターの大ホールで幕開けを演じたのは、県のミュージカル協会会長、稲見けい子先生門下生合同グループ『ホップスターズ』三十名。

私が所属する教室は、その『ホップスターズ』の中では一番少人数であり、たった六人しかないが、三十年近い歴史がある。先日一番古くから活動していた人が鬼籍に入り、最初からの人は、体力的に練習に体がついていけなくなると、去って行って、とうとう二人きりになってしまった。コーラスグループはたくさんあるが、ミュージカルとなるとただ楽しんで歌うだけではない。それに、もう一つの役割がある。子供ミュージカルの応援団を自負していること。

廃部の危機になった時辛うじて私の元の仕事仲間、ご近所の友人などを誘って四人が、お仲間に加わってくれた。先生も昔からの関わりから、少人数でも存続をしてくださっている。この先生、老人が多いので、最近は脳トレを準備体操に

取り入れて、和気あいあいの練習である。先日亡くなった一番古いお仲間を送り迎えもされていた。毎年行われるフェスティバルには、椅子に座ったままで出演できるように舞台を作ってくださった。彼女も満足であったろう。ここまでしてくださる先生なのだ。

コロナ禍の最中に集まっていたの歌のレッスンは難しかった。だが私たちは少人数ゆえにスマホのラインを通し、家にながらスマホの画面にお仲間や先生の顔を見ながら基礎の練習ができたのである。年寄りの私たちには今までには考えも及ばない方法だった。珍しいやら楽しいやら、子どものようにはいしゃいで画面に向かって歌っていたものだ。スマホを使いこなせていない者同士が操作するので、歌っているときに画面から顔が消えたり現れたり、笑いながらの楽しい練習であった。えらい時代に生き合わせたものだ感慨も一入とあったところ。

今年の演目は、戦後の混乱時を逞しく生き抜き今に至る人生の賛歌をテーマにしたもの。ちなみに私のセリフは「すごい」の一言、脳出血の後遺症で、呂律が心配で自らかつて出た。全体的には落ち着いた雰囲気でもハーモニーもよく、感動したの声もあつたらしい。

来年四月の発表は『ノートルダム物語』に挑戦する。  
私八十五歳、年寄りと侮るなかれ。

まだ歌える、やれる。

# 陶芸が結んだ集い

藤田 香月

三月二十六日の夕刻、益子町陶庫さんでの「合田好道先生を偲ぶ集い」に私も出席させていただきました。

本来なら、二月六日の祥月命日か三月十日の誕生日頃の筈であった。コロナ禍でもあり迷いはしたが、出席を決意させたのは陶庫の奥さん、ゆ美子さんからの電話だった。ご主人塚本倫行さんたちの、遅くなっても行ないたいとの意志と私への温かな心が伝わってきた。

今まではお座敷だったが、今回は陶庫さんの中に設けられた「合田好道記念室」に通された。大谷石の趣ある蔵に先生の壺や皿、お茶碗、絵や書が展示されている。温かみさえ感じられる石の壁と先生の作品とが自然になじみ、先生も喜んでこの場に一緒におられるかのように思われた。同時に塚本さんご一家の合田先生への敬慕の心が深く感じられた。

集いには、先生をよく知り、支えられた平野良和さん、塚本さんご夫妻、陶芸家の石川雅一さんと他に若い二人の陶芸家、二人の女性スタッフの方々も同席された。

合田先生は語り継がれるたくさんのエピソードをお持ちの方だった。一九一〇年香川県に生まれ、十九歳で上京し絵を描いたり、版画誌「白と黒」に出品されていたこともある。

その後、濱田庄司先生をたより益子に入られたとのこと。怒ると頭から湯気が出たとか、額のコブが大きく膨らんだ

などと伝わっている程こわい方であつたらしい。尊敬していてもとても一緒に住む気にはなれず、それができたのは和田安雄さんくらいだったとか。女性には優しく接したが恋の成就是無かった。食事時間近くなると知人宅を訪ねてよく、馳走になっていた。遠方から甥御さんが訪ねて見ると、知人宅に連れて行き「お風呂に入れてもらえ」と言い、外での食事は必ずと言ってよい程、一緒に行った人の支払いであった(中には貴重なお話への授業料とみる方もおられた)など。

濱田先生も合田先生の作品、特に赤絵には一目置かれていたと聞く。窯出しの度に訪ねられたとのことである。

合田先生が亡くなられて二十二年が経つた今も、ここ益子で変わることなく、むしろさらに先生への想いも深く、大切にされているのだった。

ここに合田先生の言葉の一部を紹介したい。

「合田好道生誕一〇〇年記念く合田好道のこと」から、  
○本当に良い物っていうのは純粹だよ、物にその人が表われているよ

○一流の土で五流の物を造つたらしようがないよ、益子の三流の土で三流の物を造つたらその方がずつとすごいよ  
○余白がなければいけない、余白はゆとりだ

そして今は亡き糸井哲夫さんの合田先生を表わす版画には、『白布に豆腐を描いた画家のいた大きな櫂の小さな画房』

『アトリエの大きな櫂は芽ぶきけり益子の土に根を深くして』の名言が添えられている。



# ささやかなドレスアップ

島田トミ子

七年ほど前に歌の好きな友人サワコさんから声が掛かった。  
「女性ばかりのグループで歌を習っているの。一緒にやらない？」

「エッほんど？ 嬉しい、ぜひ仲間に入れてください」  
歌は聴くのも歌うのも大好きな私は、そのとき迷わず即答した。

「そこはね、女性の先生が自宅にスタジオを作ってやってるの。カラオケの音楽に合わせてただ歌うんじゃないのよ」

私が尋ねようとしていることを次々に説明してくれる。興味深く聴いた。

「歌う前にストレッチをして身体の筋肉をほぐすの。そのあとに発声練習があつて、歌うのは最後」

へえそうなんだ。想像がますます膨らみ行きたい気持ちが高くなつた。上手く歌うばかりか楽しく歌うことがモチベーションである。

壁面には大きな鏡が張ってありその前でストレッチ体操。それだけで軽く汗ばんでくる。

「あああああ」ジャーン、「あああああ」ジャーン、先生が弾くピアノの音が半音ずつ高くなる。その音に誘導されながらだんだん高い音域の声を出していく。時々地声が出て先生

と眼が合うがこれも愛嬌と自分で照れ笑いをする。

この会は私が入る少し前に発足していて二十人近いメンバーがいる。サワコさんはそのリーダーだ。同じようなグループがほかにいくつかあるとのことであった。

普段は数人ずつに分かれて各人が選んだ曲を練習する。音源は「〇〇興商」の器械から流れてくる。

歌うジャンルは何でもよく、歌謡曲でも叙情歌でもカンツォーネでも、新しいものも、ナツメロも制約は何もない。そして練習が熟したところに発表会がある。一人三曲だ。英語の得意なマサミさんは必ず英語の歌を入れる。きれいな英語だ。

発表会では僅か二段の高さの舞台なのに、みんなの前で唄うというプレッシャーが緊張感に拍車をかける。天井にあるミラーボールの輝く光やスポットライトが身体を硬直させる。視線もどこへ向けたらよいのかわからないし顔も引きつってしまう。喉は上手く開かない、声もお腹から出ないで上ずってしまう。

それでも心が充分満たされる半日である。どの顔もキラキラとして美しい。練習日も発表会も私にとっては家事を忘れた自分の時間である。病気のことや介護の悩みも話せるストレッチ解消の場である。ここには身体の中のやる気パワーのタンクが空にならないよう充電できる仲間がいる。

発表会当日の私は濃い目の化粧をし普段は着ないフリルの付いた派手な衣装を着て臨むのだが、コロナ禍のために今は練習も発表会もない。次はどんな衣装にするか、ドリカムにチャレンジしようかとコロナ後の晴れ舞台が待ち遠しい。

# 俳句会は安らぎの場

渡邊 公之

私がお世話になってしている俳句会は、A句会とB句会の二つで、ともに十名ほどである。「朝明」の特集テーマの「安らぎ―小さな集まり―」にびつたりの会で、その二つの俳句会のひとこまをふれてみたい。

俳句は「座の文学」と言われる。

そのとおりに、句会の席は口の形・車座に。会の会長、リーダーがいて、句会はそれぞれ平日の午後、二〜三時間、進行役を中心に全員が発言して穏やかな、まさに安らぎの場、時間となっている。

両句会とも、俳句大会や新聞に載った会員の情報などの報告、お知らせがあり、みんなが我がごとのように喜び合ったり、拍手したりして、句会が始まる。

①まず、投句。A句会は二つの兼題（季語）の二句を含めて十句を短冊に書いて持ち寄り、全員で清記し、コピーして配付される。B句会は兼題（季語など）一句と雑詠三句の四句を会長に事前に送付、一枚に清記、コピーが配付される。

②次に、選句の時間です。両句会とも、二十〜三十分ほどで、いい句だと思ふ七〜八句を、全員がそれぞれ選び合う。その中ですばらしい句一〜二句を「特選」とする。

③そして、披講です。全員が自分の選んだ句を次々に披講する。A句会は選ばれた句の作者が名乗る（苗字でなく名前

を）。B句会は句の番号を披講し、作者は名乗らない。

④いよいよ、講評の時。A句会は披講した順に、一人ひとりが、特選に選んだ句などについて選んだ思いを語り合う。B句会は会長が、番号順に、特選に選んだ句を中心に、その句を選句した二〜三人に、選んだわけを求める。

講評の続きで、意見交換の時間。選句しなかったわけ、この句のここはどうなのか、ここをこんな風に直したら、など自由闊達に、相互に助言し合うことができてきている。

「これで今日は終わりに。来月は〇〇日、時間は△△、兼題は□□と◇◇です。よろしくお願いします」と、会長、リーダーの穏やかなひと声で句会を終える。

句会終へ笑顔で分かれ酔芙蓉 公之

こんなに和気藹々としていいなあ。盛り上がっているのを見ると、月一回の出会いであり、会員それぞれの個性や感性が見えたりしている。

コロナ感染症の拡大で、両俳句会とも何回か「通信句会」となり、会長やリーダーにご面倒をかけている。

二つの俳句会とも、大きな声で威圧したり、会を変に仕切ろうとしたりする人もなく、全員が発言でき、一人ひとりが自由に意見を出し合える、穏やかな雰囲気は、私に月に二回の「安らぎ」のひと時、場を与えてくれている。

佳句を詠めるよう、精進に努めよう！

# 燥ぎ踊る

国母 仁

屋敷内に十五坪程の空き地がある。東南の角地。十年前から畑に替えて作物を育てている。

この角地に八本のオクラが植わっている。二本もあれば充分なのだが。オクラはネバネバしているので納豆に混ぜるか刻んでかつお節をふりかけしょう油をかけて頂く。

「ネバネバの食材は身体にいいのよ」と画面の料理研究家のバアバが何度も転がしていた。どうしてネバネバが身体にいいのか正直わからない。

オクラと同様ネバネバのモロヘイヤのタネも妻が蒔いたというが芽が出ない。D 大学病院に妻が入院する前というから一週間は経っている。入院してから猛暑が続き畑はカラカラに渴きだす。

「水分不足のせいかも」とメールが届く。

一番目をかけているのが西瓜だ。日増しに新たな玉がつきはじめている。西瓜の苗は大玉二本と小玉二本。離れ小島に一本植わっている。大玉か小玉かそれともラグビーボールの様なかたちか。妻が知り合いから貰ってきた苗。

道沿いの小玉が急に生りだす。あつという間に七個の玉をつける。目印に一個ずつ竹棒を立てる。竹棒に目付を書いておけば収穫するとき迷わずに済む。収穫日は小玉が生りだしてから三十日とか。大玉は三十五日か四十日が目安と妻が上

から目線で口に出したのを思い出す。

妻が退院して初めて西瓜畑に行き一個一個育ち具合を確かめる。

「小玉は何とか八月中に食べられるが大玉は盆過ぎになるかもしれないね」

「盆過ぎたら西瓜は食べたくなくなってしまうよ。だつて盆が過ぎたら梨やぶどうが出てくるから。やっぱり西瓜は真夏の暑い時に食べるのが一番だよ」

私は六月一日に脊柱管狭窄症の手術を受ける。入院中は部屋に閉じ込められて西瓜畑が気になって仕方なかった。病室を抜け出し西瓜をずっと眺めていたと思った。

これ程、我が子を育てるとき愛情注いできたかと振り返ってみると自信がない。仕事を優先し、二人の子供と向き合つてこなかった気がする。その証に一度も授業参観に行った事がなかったから。妻任せだった。父親失格と言われても反論ができない。もう取り返しがつかないくらい地球は回り続けている。

秋が深まる頃、仲間夫婦を呼んで収穫祭を兼ねたバーベキューを毎年行っている。バーベキューの前にさつま芋掘りを始める。普段、土と接してない連中だからマルマルと育った紅あずまを掘り当てるとまるで小学生のように燥ぎ踊りだす。

子供の頃のどろんこ遊びを思い出しているのかも。

# 酒盛り

相馬 龍久

私は小さな居酒屋を経営している。この道は四十年以上になるが、生業としてやってきただけで社会的意義など考えたこともなかった。目に見えて世の中のために役にたっている職業の方もいる。そうはつきりと分かる人を羨ましく思うこともあった。お客さんに美味しいものを提供して、常連さんたちと話して一緒に飲んでお金を頂いて、そんなことを毎日繰り返して世の中のためになっているとは考えなかった。

しかし新型コロナ禍で行動制限が掛かり夜の街の灯火が消えた。異常な事態だった。まさに戦時下の灯火管制のようだった。私も何もやる事が無い、出来ない息苦しさを感じた。外に飲みに行きたいがお店も閉まっている、旅行もできない。こんなにも他者と触れ合うことが重要かということを思い知らされたことはない。夜の営業に時間制限をかけられている頃も休業した。短時間では営業にならないからだ。

あるとき我慢の限界がきて常連さんに声をかけ時間内にお店で三人飲み会をした。もちろん営業ではない。それぞれ酒肴を持ち寄って飲んだ。話の合う三人であったから学生時代のように盛り上がった。古来人々の集まりには酒は欠かせない。本来焚き火を囲める人数が人間関係の基本だと思っっている。焚き火の代わりに一升瓶一本を囲んでいる。狭い意味の

まほろばだ。あらためて小さな居酒屋の意義に気付いた。普段は見えないが人は体温の感じられる繋がりが必要なのだ。ビットの情報だけではないヒトの息吹きを感じられる繋がり求めている。飲み屋は「場」の提供だと思った。それは人生のある場面でもある。地元の人、転勤で数年いる人、戻ってきた人それぞれの人たちが行き交う。

酒盛りの白熱議論は覚えていない。楽しかったことだけは確かだ。

# 〳心地よさ〴を感じる少年団

水野 弥彦

全国各地には、その程度と由来や規模は異にするが、様々な少年団が存在し、活動している。その多くの場合、制服に身を正し、至るところで活動を続けている。代表的なところでは、ボーイスカウトやガールスカウトなどが名高く、よく目にすることの多い少年団ではなかるうか。

私の関係したところでは、鉄道を舞台に活動に励む「鉄道少年団」という組織との古く長いお付き合いだ。仕事の関係で発足直後からだから、既に半世紀以上にはなる。その主な活動は、全国各地で展開される駅頭や駅構内の清掃、車内実践活動（マナーの向上の呼び掛け）、地域・鉄道OB・現役社員らと共同で行うクリーン作戦、街頭で実施する各種の募金活動、各種イベントなどのお手伝いが、メインの活動。

この少年団の素晴らしい点は、全国各地に所在する少年団は20人前後と規模こそ小さいが、まとまりが良く、それぞれの少年団との横の連絡もすこぶる良い。もちろん少年団の団員は原則、小学校4年生から高校生までだが、指導員やその補助要員として大学生や社会人の若年者が関わることもある。団員は男女の区別なく、同等に扱われる。

日頃の活動は、各少年団単位で団長の指示に従って行動するが、各地域での交流活動や年一回の全国交流キャンプ（3泊4日・全国持ち回り開催）、また年一回行う全国作文コン

クールなど、各団員の研さんの機会は数多く、それぞれの模様は、各少年団を束ねる上部組織の「公益財団法人・交通道徳協会」発行の広報誌「明るい旅」などで報じられる。

現在、全国に47団・約1300人ほどの団員を要し、既に60年ほどの歴史を刻む。少年団のOBには一流企業に就職し、立派な社会人として、世のために尽力している人達も数多い。少年団の中で培ってきた能力を社会のために随分に発揮しているのである。

少年団の団長は、単に鉄道OBだけでなく、大学などの先生出身者も決して少なくない。

今や鉄道ブームも過熱気味。やれ「撮り鉄」だ「乗り鉄」だ、などと鉄道ファンと一口に言っても実にさまざま。最近は、これに「ママ鉄」「チビ鉄」が加わり、そのフィーバーぶりは、どうだろうか。新聞やテレビで報じられている通り、羽目を外しすぎた一部「鉄道オタク」と言われる人達の行為が問題視され、関係者に迷惑を掛けている事例は決して少なくない。行動理念の柱となる綱領（3つのちかい、10のやくそく）を守り、公德心豊かな全団員が鉄道を舞台に活動に勤しむ姿は、栃木県には残念ながら、この少年団がないので、見る機会が少ないことが悔やまれる。この少年団の団員を見ていると、安心感と心の安らぎさえ感じるから不思議なものだ。

# みぶスリーアップ川柳会

## 三上 博史

私の川柳キャリアも30年近くになった。以前から初心者への指導をしてみたいという気持ちがあった。それは二つの理由からである。

まず教えることは学ぶこと、学ぶことは教えること、これを川柳においてもモットーにしているので、指導することで初心者から何らかの新鮮な刺激をもらえるのではないか。そのメリットを享受したいという願望を持っていたのである。

次に柳壇の高齢化が深刻化する中、川柳愛好者数の減少傾向に歯止めをかけられるものなら何でもやって貢献したいという、私なりの意欲が以前からあったのである。実際には、一般社団法人全日本川柳協会の理事として、企業等が募集するテーマ川柳のコンクールの選者（審査員）をいくつか引き受けていた。少しでも川柳を身近なものにしていたらこうと、私なりに頑張っているつもりだったのである。

さて、令和3年の秋、知り合いを通じて壬生町教育委員会から正式な依頼があり、中央公民館で行う川柳入門教室の講師を担当することになった。地元の川柳普及のためならとにかくやってみるか、二つ返事で承諾した。

翌年5月から7月までの3か月、月2回で計6回開かれる入門教室は、15名定員で「二心何とか10名程度の応募があった。いざ始めてみると受講生の川柳についての知識は限りなく

ゼロに近く、江戸古川柳の有名句をいくつも板書して例示したが、ほとんど知っていなかった。これはかなり手ごわいぞ、と禪を締めてかかった。

毎回、講義のみならず川柳クイズ（穴埋め川柳）やミニ句会を設けて、何とか雰囲気盛り上げようと試みた。その甲斐があつて、どうにか最後まで付き合ってくれて無事終了した。

その後、受講生OB・OGが「みぶスリーアップ川柳会」を立ち上げてくれた。これは嬉しい出来事であり、まさかそんなことがすぐに実現するとは夢にも思っていなかった。

教育委員会の生涯学習担当者も好意的な方で会の設立に際しては、いろいろと助言をいただいで尽力してくれた。結局、受講生のほかに、受講生が勧誘してくれた方も含めて13名の会員で「みぶスリーアップ川柳会」がスタートした。

「スリーアップ」の意味は、川柳の三要素「穿ち・可笑しみ・軽み」、「ホップ・ステップ・ジャンプ」、「観察力・想像力・表現力」、「自分・仲間・家族」など、いろいろな意味が込められているとのこと。そしてさらに、なんと「スリー」は「三」、「アップ」は「上」と、私の名字「三上」も仕組まれているという。物凄くびつくりした。面映ゆい。まさかそんなところまで考えてくれたとは…。

さて、この会の発足で日本の川柳人口が少なくとも13名は増えたことになる。この増加分が何とか維持できるよう、私も顧問兼会員の一人として会を盛り立てていく覚悟である。毎回楽しく指導しながら褒め上手を心がけたい。